

学戦都市アスタリスク TRILOGY

宙の君へ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市の一つの学園、星導館学園に一人の少年が転入するところから始まる。彼はかつて《蝕武祭》で三冠制覇を成し遂げた《閃光》の異名を持つ《魔術師》だった。今度は全星武祭制覇を目指し、表舞台で活躍していく物語。

目次

第1話	《閃光》の刹那	1
第2話	追憶の過去	11
第3話	適合率検査	20
第4話	《閃光》の本気	34
第5話	決着	47
第6話	事後の日常	56
EX	設定	66
第7話	六花園会議	68
第8話	小さな嘘と	80
第9話	昏梟の暗躍	86
第10話	開幕前夜	101
《鳳凰星武祭》編		
第11話	鳳凰星武祭	108
第12話	四色の魔剣	122
第13話	くすぐったい距離	130
第14話	《吸血暴姫》	139
第15話	力と代償	148
第16話	《覇潰の血鎌》	156
第17話	誓約	168
第18話	つかの間の休息	173
第19話	突然の来訪者	181
第20話	禁忌の力 前編	187
第21話	禁断の力 後編	191

第22話	神器という名の悪魔	200
第23話	暴走は止まらない	207
第24話	覚悟の準決勝	216
第25話	決別の夜	223
第26話	最期の想い 前編	229
第27話	最期の想い 後編	235
《リーゼルトニア》編		
第28話	《大博士》	242
第29話	戻ってきた風景とお誘い	251

第1話 《閃光》の刹那

本土から北関東多重クレーター湖行きの直通列車に乗る。車内には誰もおらず一つの席に座ると程なくして発車した。湖の水上の上を走る列車から巨大な正六角形型のメガフロートに築かれた都市を見る。少年はバッグの中から無造作に仕舞われたくしゃくしゃの紙を取り出し、目の前で広げる。そこに書かれていたのは特待生として「星導館学園」への編入の招待状だった。

「回りくどいことをするもんだな」

本土から発車して数分で着き、駅に停車する。電車から降り、情景を見渡した。ローローここは水上学園都市「六花」、通称「アスタリスク」と世間では呼ばれている。住民が学生かつ《星脈世代》ジエネステラが占めているため、世間の目を気にしてこちらに引越してくる人も少なからしい。主に中央区と外縁居住区に分けられており、中央区はさらに商業エリアと行政エリアに分かれている。世界最大の総合バトルエンターテインメント《星武祭》フエスタの舞台であり、名目上日本の一都市にすぎないが、複数の統合企業財団が直轄統治しているため完全に治外法権状態である。そのためか本土と入国手続きは全くの別物となっている。が、その心配はいらず全部あちらが済ませてくれているようだった。それから都市内をモノレールで移動し、「星導館学園」がある北部へと向かった。

ローローローロー

「やつとついた。駅とは逆方向じゃないか、遠い所によく建てたもんだな」

この学園の象徴^{シンボル}、不撓の象徴である赤い蓮の花「赤蓮」の校章がデカデカと描かれた校舎の前に立つ。モノレールの中から見えた人々の身なりは多少自身が着ている服よりもマシなものを着ている人が多かった。今の少年の身なりはさほど汚くはないのだが、所々破けた羽織に泥や土埃が付着したズボンにブーツ。そして、身長より少しばかり長い布に巻かれた長物。このような身なりになってしまったのはある大会に参加したからである。約束の時間も迫っているのに気

づき、早速校舎へと足を進めた。

「……………」

「ようこそ、「星導館学園」へ。改めて、歓迎します」

「いえ。生徒会長に会いたい」

「ご案内します」

この学園の生徒らしき女子が先導し、生徒会室へと案内する。道中の廊下は清潔さが保たれており設備も最新のものが揃えられていた。

「どうぞ、こちらです」

「すまない」

それからその少女は「では」と一礼し去っていった。そして、扉を開け中へと入る。そこには学園都市の景色を背面にこちらを向いて座っている一人の少女。どこか上品で落ち着いた雰囲気を感じ、更には豊満な体躯、目もくらむような金髪を携えたまるで絵にも書いた美しい少女が微笑を浮かべていた。

「あんたがここの生徒会長か」

「ええ、そうです。よく来てくれましたね、かみきせつな神木刹那くん」

「俺もあんたを知っている。ここに来る前に少しかだけ調べさせてもらった。この学園の上位十二人《冒頭の十二人》の序列二位、《千見の盟主》クローディア・エンフィールド」

「あらあら、そんなに詳しく調べてくれたんですか？」

「もちろんあんたが純星煌式武装の適合者ってことも」

「あら、それならあなたも一緒でしょう？あなたが背負っているその布に巻かれた長物も純星煌式武装なのでしょう？」

「……………何故それを」

「総合企業財体ですらその存在を極小数しか知らない隠された純星煌式武装がこの世に一つだけ存在していると聞いたことがあります、まさか、それをあなたが持っていたなんて」

「……………」

「しかもあなたはあの大会に出場した経験がありますね？ギブアップは不可能で、試合の決着はどちらかが意識を失うか、もしくは命を失うかによって決まる非合法・ルール無用の武闘大会、《蝕武祭》に」

「まあ……」

「三回出場したうち三回とも優勝、その前人未到の記録と雷撃と剣戟を駆使した戦いから付けられた二つ名は《閃光》でしたか」

(この女……)

「万^マ応^マ素^ソとリンクし世界の法則を捻じ曲げることができ《魔^ダ術^テ師^シ》、雷を駆使して戦うことから《閃光》、納得です。ちなみに星^ホ辰^シ力^{リキ}はどのくらい？」

「自分でもよく分からない。知りたかったら後で調べればいい」

「まあ、それもそうですね。では、こちらを」

クローディアから渡されたのはこの学園の制服だ。

「では、着替えたらまた来てくださいね」

「ああ」

それから生徒会室を出て更衣室へと向かう。着替えながら端末を開き、『^{ネームド・カルツ}在名祭祀書』を開く。

「転入そうそう《冒^{ヘイ}頭^{トウ}の十二人》を相手するのはあまり気が進まないな。だがここで上位に組み込むのも手だな。やはり十二位から行くのが妥当か……いやしかし五位辺りに勝負を仕掛けるのも悪くない……ん？ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト……なぜヨーロッパの小国の第一皇女がこの学園にいるんだ？」

制服のボタンを鎖骨の辺りで止め、なるべく動きやすいように着崩す。まず刹那は新しい衣服などをもらう時は決まってることがある。足を曲げたり腕を曲げたり肩を回したりしこの制服の性能をあらかた確かめる。

「機動性を上げるのはいいんだが、少しフィットしすぎじゃないか？これでは気持ち悪いぞ」

壁に立て掛けてある長物と少しの荷物を背負いまた生徒会室へと戻った。今度はクローディアの口から自分が特待生として招待された理由を話される。

「この「星導館学園」は三つの星^{フェスタ}武祭のうち、《鳳^{フェニ}凰^{ニク}星^{クス}武祭》を得意としております。過去には上位の常連で三冠制覇の経験もありますが、近年の総合成績は振るわず五位という現状です」

「だ、ダメですよ?」

「冗談だ、生徒会長のアなたには逆らわない」

「それと、生徒会長はやめてください。クローディアと」

「いや、それには従えない。同い年とはいえ、形式上は俺より上だ。役職名で呼ばせてもらう」

「嫌です」

「嫌じゃない」

「嫌です!」

「嫌じゃない」

ふくれっ面のクローディアに真顔の刹那。しばし睨み合いをしていたが、渋々退いた。それからクローディアによる校内の案内だったのだがどうやら外が騒がしい。

「なんだ?」

「あれは・・・ユリス?それと・・・」

「咲き誇れ、六^ア弁^マの爆^リ焰^リ花^ス!」

ユリスと言う少女の前に巨大な火球が出現し、少年めがけて襲いかかる。

「なあ、あれ止めなくていいのか?相手は序列五位だぞ?」

「困りましたねえ」

「なぜチラチラ俺を見る」

まるでお前が行けと言うように下でどんちゃん騒ぎをしている二人と刹那を交互に見る。

「あ、あなた、それでも生徒会ちよー」

「それでも生徒会長か?」と言い終わる前に背中を押され、現在二人がいる三階から落とされた。

「な・・・!あんの野郎!」

直ぐに反転し無事着地する。上を見上げクローディアを睨む。が、当の本人はどうやら楽しそうであった。こうなっては仕方がない、二人を止めに行くことを決めた。

「咲き誇れ、九^プ輪^リの舞^ム焰^ロ花^ズ!」

「うわっ!」

愛らしい桜草を模した九個の火球が、それぞれ異なった軌道で少年を襲う。

「はぁ……」

少々嫌な顔をしながら頭を掻くが、次の瞬間刹那の姿はその場から消えた。

「わわわわっ……！！」

目を瞑った瞬間、九個の火球が全て真つ二つに斬られる。

「……！！」

「大丈夫か、少年」

「え……？」

少年が見たのは黒髪黒眼の端正な顔立ちの少年だった。

「見たところ大事はなさそうだな、立てるか？」

差し伸べられた手を少し戸惑いながらも受け入れる。

「あの、ありがとう」

「気にするな」

「何者だ、お前は。そいつと同じで変質者か？」

藪から棒に失礼な少女に眉をひそめる。

「変質者とは失礼だな、ちゃんと星導館せいどうくわんの制服を着ているだろ」

「では、何者だ」

「本日付けでここに転入することになった神木刹那。お初お目にかかる、《華焰グリュエーン・ローゼの魔女》」

「……もしかや、《魔術師ダクンテ》か？」

「ああ」

「ほう……」

薔薇色の髪を携えた少女は口元に孤を描き、そのまま制服の胸に飾られた星導館学園の校章『赤蓮』に右手をかざす。刹那は咄嗟に嫌な展開に発展することを予知する。

「不撓の証たる赤蓮の名の下に、我ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルトは汝神木刹那への決闘を申請する！」

「決闘!？」

見事に的中した。後ろの少年は驚いたように声を上げる。嫌な顔

をしている刹那を他所に、刹那の胸の校章がそれに応じて赤く発光する。決闘の申請に対して、受諾するか否か判断するのを求めているのだ。

「お前が勝てば、女子寮に忍び込んだことに関して目を瞑ってやろう。だが私が勝ったなら、その時はその男を好きにさせてもらおう」

「女子寮に忍び込んだ？」

「ち、違うんだ！これにはちゃんとした理由が……！」

刹那は少年の目を見て嘘をついていないことを瞬時に見抜き、ユリスを見る。手を後ろに回し、後ろを指さす。「下がっている」の合図だと分かるのに時間はかからなかったらしく、直ぐに移動したのを確認し、学園から支給された短い棒状の機械を取り出す。片手に握るには丁度いい大きさを、先端には緑色の鉋石ローマナイトがはめ込まれている。煌式武装の発動体だ。

「使う武器は剣か」

「……」

無言で手にした煌式武装を起動させる。マナダイトに記憶させてある元素パターンが再構築され、鋭角で機械的な鏢が何も無い空間から瞬時に出現する。さらに待機状態から稼働状態へモードを移行させると、万応素が集約・固定された眩い光の刃が虚空に伸びた。刀身の長さは一メートル程。何の調整もされていない、ノーマルな煌式武装だった。なんせ先程支給されたものだからだ。肩にかけていた長物をすっかり背中に背負う。

それを見たユリスも制服の腰に付けたホルダーから発動体を取り出し、煌式武装を起動させる。もつともこちらは刹那のそれとちがって、細くしなやかな光のレイピアだ。

「さて、準備はいいな？」

細剣を優雅に構えながらユリスの瞳は刹那を見据える。

「やっぱり煌式武装は軽すぎる。リーチも短いし、何より持っている感覚がない」

慣れた手つきで得物を振り回しながらそんなことを言う。そして胸の校章に手をかざし、呟く。

「我神木刹那は汝リースフェルトの決闘申請を受諾する」

受諾の証として、刹那の校章が再び赤く煌めいた。

(全く、関係ない私闘に巻き込まれてしまった)

ユリス自身、数々の決闘を勝ち抜いて序列五位という立場を手にしたのだ。たがそのユリスをして、目の前の少年、神木刹那という男の実力はまるで読めなかった。まずは武器の構え方、重心の取り方を見る。刹那は武器を構えず、重心は前でも無ければ後ろでもない。真ん中にある。何より気にしたのが彼の星辰力ブラーナと背中に背負っている長物。ここまで伝わってくる威圧感、数多の死闘をくぐり抜けた証と星辰力ブラーナの量を肌で感じる。

(こいつの星辰力ブラーナは並外れている……)

「咲き誇れ、鋭槍の白炎花!」

ユリスがタクトのように細剣を振ると、その軌道に沿って巨大な青白い炎の槍が顕現する。テツポウユリの姿をしたその炎は、さながらロケットの勢いで刹那を貫こうと飛びかかった。が、突如辺りに僅かながらパチパチと電気が迸る。瞬間、白炎の槍は黒い雷に掻き消された。

「なに……?」

刹那は先程と変わらない格好で立っていた。

「ねーねー、なにごと?」

「《華焰グリユーエンローゼの魔女》が決闘だったよ!」

「マジか! そいつあ見逃せねーな!」

「んで、相手は誰だ?」

「知らなーい。なんか見たことない顔ねえ……ネットは?」

「今見てる……え!? ちよ、ちよつとこれ! 見て見て!」

「なになに……? あら、この顔写真、」

あの彼じゃない。えーつとー? 二つ名《閃光》……《閃光》!」

「《閃光》ってあの《蝕武祭エクリプス》を誰も成し遂げたことのない三冠制覇した?」

「なんでそんな人がここにいるの!」

ギャラリーがだんだん騒がしくなる。『在名祭祀書ネームド・カルツ』に載っていない

いのは表舞台ではあまり大きなことをしていなかったためである。

「お前がああ《閃光》だと？面白い冗談だな」

「全くだ、同じ顔のやつなどどこにでもいる」

そんな二人の会話を他所にギャラリーの賑わいは増していく。

「もし彼が本物の《閃光》だったらいくら序列五位でも無理じゃないかしら」

「確かにな」

「でもよ、お姫様が手加減しているって可能性もあるぜ？」

そんなギャラリーの声に、ユリスは形のいい眉を僅かにひそめた。自分は手加減などするつもりもないし、していない。それでも全力全開というわけではないけれど、十分に本気で相手をしている。実際、どちらかといえば優勢なのはユリスの方だ。刹那はその場から一歩も動こうとしない。距離をとったまま圧倒的な火力で相手を封殺するのがユリスの基本戦法なので、まさに理想通りの展開である。この細剣《アスペラ・スピーナ》はあくまで接近された時の牽制用だ。だが、違和感がある。なぜやつは動こうとしない？

「どうしても彼を許さないのか？」

唐突に話かけられた。

「全てお前にかかっている」

「・・・そうか」

何としてでも違和感の正体を見極める。そう心に決めて、ユリスは星辰力を集中させた。星辰力は《星脈世代》の力の根源だ。目に見えぬオーラのようなものだが、それを集中させることによつて攻撃力や防御力を高めることが出来る。そしてユリスたち《魔女》や刹那ら《魔術師》にとっては、能力の発動に必要なエネルギーでもある。もつとも《魔女》や《魔術師》はその能力に星辰力を割かなければならぬ性質上、防御へ回す星辰力の割合が少なくなってしまう、白兵戦では不利になりがちという弱点が付き纏う。だが、そんなもの近づかせなければいいこと。

「咲き誇れ、六弁の爆焰花！」

今度のはひと味違う。ユリスの前に巨大な火球が出現すると、ギャ

ラリーがざわめいた。一度、あの少年に向かって喚けた時と同じ技だが、それよりも二回り大きい。

「やっべー！大技だ！」

「俺たちまで燃やすつもりかよー！」

「回避ー！ー!!」

巻き込まれて怪我をしても自己責任だ。ギャラリーが慌てて距離を取る。ユリスはそんな野次馬達には目もくれず、最適の軌道を瞬時に計算して火球を放った。流星に刹那も腰をかがめて身構えるが、かわされる直前でユリスはぐつと拳を握り締める。

「爆ぜろー！」

その命に従い、刹那の眼前で火球が爆発した。直撃させることは難しくても、この距離では完全に逃れることは出来ない。至近距離での爆発に巻き込まれれば、いくら《星脈世代》^{ジュネステラ}といえどしばらくは動けないだろう。

吹き荒れる焰で視界が埋まる。嵐のような爆風から顔を守りつつ、ユリスは勝利を確信していた。しかし、

「ー！ー！ー！雷切^{らいきり}」

剣閃が瞬いたとかと思うと、焰の花弁が黒雷の横薙ぎによって掻き消された。

「なー！ー！ー！流星闘技^{メテオアーツ}ー！ー!?!」

「驚くことではないだろ、俺は《魔術師》^{ダグンテ}だ」
流星闘技^{メテオアーツ}とはアナダイト^{ブライナ}へ星辰力を注ぎ込むことにより、一時的に煌式武装^{ルークス}の出力を高める技だ。

正式には過励万応現象というものだが、一朝一夕で出来るようなものではない。しかも先ほどの技の威力、本来であれば煌式武装^{ルークス}で使用するものではない。

「お前、やはり本物のー！ー!」

雷切と言えばあの《閃光》の十八番。確かにあれはここに来る前にテレビで見た《閃光》の雷切と同じであった。

「さあな」

刹那は静かに笑った。

第2話 追憶の過去

「咲き誇れーーーー！」

攻撃の呪文を唱えようとした瞬間、刹那の後方から剥き出しの敵意を感じ取り、瞬時にユリスの前へと移動する。

「なにっーーーー!?」

移動したと同時にユリスの元へと光輝く矢が飛んでいく。それを寸のところまで素手で掴み取った。

「これは矢か、一体誰が」

放たれた方へ目を向けると、もうそこには射った人物の気配は消えていた。

「ーーーーどういうつもりだ?」

それは明らかにユリスを狙った攻撃だった。おそらく爆発に紛れての不意打ちを目論んだのだろう。事実、どこから狙撃してきたにせよ、あのタイミングでは誰も気付かれなかったに違いない。極めて不本意ではあるが、刹那が助けてくれなければ完璧に成功していたはずだった。

「そんなこと撃った本人に聞け」

手に掴んでいる矢を砕き、何食わぬ顔でユリスに返答した。

「そうではない!なんでわざわざ私をーーーー」

と、そこまで言いかけ、気づいた。ユリスの目の前には異性がいるのだ。妙に意識してしまい、ユリスの顔が赤く染まっていく。

「おい、どうした?顔が赤いぞ?」

「え、あ……」

あたふたと狼狽えている少女を見て刹那は首を傾げた。

「はいはい、トキメクのはそこまでにしてくださいね」

深く落ち着いた声と共に、パンパンと手を打つ乾いた音が鳴り響いた。

「ーーーー」

「確かに我が星導館学園は、その学生に自由な決闘の権利を認めますが、残念ながらこの度の決闘は無効とさせていただきます」

そう言いながらギャラリーの中から現れたのは、目もくらむような金色の髪をたなびかせた一人の少女だった。

「生徒会長」

「……クロードディア、一体なんの権利があつて邪魔をする」

「それはもちろん星導館学園生徒会長としての権利ですよ、ユリス」

クロードディアはにっこり微笑むと、自分の校章に手をかざす。

「赤蓮の総代たる権限をもって、ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルトと神木刹那の決闘を破棄します」

すると、今まで赤く発光していたユリスと刹那の校章がその輝きを失う。

「大丈夫ですか？天霧綾斗くん」

「え？あ、はい」

「はあ……」

一息つき煌式武装の起動を切り、腰のホルダーにしまう。

「ありがとうございます……えーと生徒会長、さん？」

「はい。星導館学園生徒会長、クロードディア・エンフィールドと申します。よろしく願います。そして、彼は」

クロードディアは少し体をずらし、刹那に手を向ける。

「あなたと同じ転入生の神木刹那くんです」

「えっと、さつきはありがとう、神木くん」

「気にしないでいい、それと刹那で構わない」

「そうかい？じゃあそう呼ばせてもらうよ。じゃあ俺の方も綾斗でいいよ」

「わかった」

一方でユリスは今の裁定が気に入らなかつたらしく、いかにも不満そうな顔でクロードディアを睨みつけていた。

「いくら生徒会長とえいど、正当な理由なくして決闘に介入することは出来なかつたはずだが？」

「理由ならありますとも。彼が転入生なのはご存知ですね？」

そう言つて綾斗へ視線を移す。

「既にデータは登録されているので校章が認証してしまつたようです

が、彼には最後の転入手続きが残っています。つまり厳密には、まだ天霧綾斗くんは星導館学園の生徒ではありません。あ、刹那はもう生徒ですが、綾斗くんの代わりということで私がお二人を止めに行かせたのです」

「あれのどこが行かせたと言う。三階から人のことを突き落とすおいて」

笑顔のまますらすと説明するクロードイア。

「決闘はお互いが生徒同士の場合のみ認められています。刹那は決闘を受諾しましたがあれはまだ生徒ではない彼を守る行為、事実上この決闘はユリスと綾斗くんのもとの認識します。だとしたら、当然この決闘は成立しません。違いますか？」

全く有無を言わせない説明にさすがに下を巻く。

「くっ……！」

ユリスは悔しそうに唇を噛んだ。言い返そうとしないのは、どちらに理があるかわかっているからなのであろう。

「はい。そういうわけですから、皆さんもどうぞ解散してください。あまり長居されると授業に遅刻しますよ？」

その言葉に集まっていたギャラリーたちも三々五々に散っていく。中途半端な結末にすつきりしない表情の者も少なからずいたようだが、生徒会長に文句を言うほどでもないらしい。

「あっ！」

とっさに綾斗は先程の狙撃の事を思い出す。ひよつとしたらユリスを狙った犯人がこのギャラリーにいるかもしれない。このルールに精通しているとは言えないが、いくらなんでもあの行為は卑怯すぎる。許されるものではないだろう。

「あの、ちよつと待っ……！」

声を上げた綾斗の肩を、ユリスが掴んだ。

「捨て置け。どうせとっくに逃げている」

「どうやらそのようだな」

「それに《冒頭の十二人》が狙われるのは別に珍しいことではない」

「ええ、残念ながらそういうケースは少なくありません。ですが、今回

のは流石にやりすぎです」

「クローディア、わかっているな？」

「はい、既に風紀委員へ調査を要請しています。決闘中に第三者が不意打ちで攻撃をしかけるなど言語道断。犯人が見つかり次第、嚴重に処罰致します」

「横槍とはな、いい度胸じゃないか」

このクローディアという少女にもさっきの狙撃が見えていたことに綾斗は驚いた。ギャラリーは大勢いたが、他には誰一人として気づいていなかった。爆炎に紛れたあの攻撃を捉えていたとなると、刹那とクローディアという少年少女はただ者ではないらしい。

「その、さっきは……ありがとう……」

「気にしなくていい」

「その、束のこと聞くが、背負っている長物はなんなのだ？」

「これか？これは、まあ大事なものだ」

少し考えた後、ユリスを見る。

「そうだな……《フェニクス鳳凰星武祭》で戦うことになったら、こいつで相手してやる」

背負っている長物を指でコンコンしながら言った。

「まだ校内の案内が済んでいませんでしたね。それでは参りましょうか」

クローディアに連れられて綾斗、何故か刹那まで連れていかれるハメになってしまった。

—————

「えー、そのような意味で前世紀はまさしく災害の世紀であったと言えるわけですが、中でも《インヘルディア落星雨》と呼ばれる隕石群の襲来は全世界に未曾有の被害をもたらしました。三日三晩に渡って降り注いだ隕石により、世界は否応なく変質させられたのであります。既存国家の衰退と統合企業財体の台頭、それに伴う倫理的の変容、隕石がもたらした万^マ応^ナ素による新人類——つまり君たち《ジエネステラ星脈世代》の誕生、さらには万^マ応^ナ素研究を機軸として発達した落星工学による科学技術の飛躍的發展などなど、良くも悪くも人類の歴史は《落星雨》を境

にして大きく塗り替えられたと言うべきでありますな」

通りすがった教室からは、年配の教師が授業をしている声が聞こえる。

「もつとも最近の学説だと《落星雨》は通常の隕石ではなかったというのが主流のようです。なにしろどこの天文台も前触れさえ察知できなかつた上、衝突の際に生じるはずのエアロゾルもほとんど観測されていないのです。それが何を意味しているかというところ……佐藤くん、答えてください。佐藤くん？……また寝ているんですか」

いかにも単調でスロースペースなその口調は、少し耳にしかただけでも眠気を誘う代物だ。佐藤くんが寝るのも無理はない。教室を覗いてみれば、案の定授業を受けている学生の大半が机に突っ伏したり、椅子の背もたれに寄りかかり仰け反って寝ていたり様々だ。

「こんな朝早くから授業か、精が出るな」

「ええ。といっても今からこちらでやっているのは補習ですけれど」

「朝一から補習ですか……」

眠くなるのも頷ける。

「一応、我が学園のモットーは文武両道となっておりますので。あなた方も気をつけてくださいいね」

「勉強に関しては問題ない」

それから綾斗と生徒会室へと向かい、同じ説明を受けた。そして、綾斗がこの水上都市に来た目的は

「姉さんが……天霧遙がここにいたっていうのは本当なのかな？」

姉を探していたらしい。

(姉か……)

『刹那っ！』

昔のことを思い出し、自然と顔が曇る。浮かぬ顔をしている刹那が気になり綾斗は声をかけた。

「刹那？どしたんだい？」

「あ、いや……なんでもない。気にしないでくれ」

(昔のことを思い出すとはな……)

それから綾斗とは寮を見てくると言うのでその場で別れ、生徒会室

にはクローディアと二人つきり。

「刹那、どうかしたんですか？」

「どう、とは？」

「先程浮かない顔をしていたので」

「綾斗が姉を探していると聞いてな……少し、昔のことを思い出した」

「聞かせてもらっても、よろしいですか？」

その顔はいつもの微笑みではなく、至極真面目な表情だった。

「……ああ、ついでだ。長物のことも教える。訓練場まで歩かないか？」

それから二人は校舎を歩きながら刹那は昔の話をしだした。

「俺にも姉がいてな、あんたからの特待生入学を受け入れたのは姉さんを探すためだからだ」

「刹那のお姉さんはこの水上都市のどこかに？」

「わからない。もうかなり前の事だ。突然、家族の前から姉さんは姿を消した。姉さんは星辰力プラナーナを持たない普通の人間だった。体が弱くて、病気も患っていた。外出することが出来ない姉さんがなぜいなくなったのか、その手がかりがこの都市にあると思ったからここへ来た」

「……」

クローディアはただ、静かに聞いていた。

「父さんと母さんは失踪した姉さんを探すため、家を空けることも多い。そんな日の夜、父さんと母さんは殺された」

「……っ！」

「殺した奴らは「銀河」の諜報工作機関《影星》」

クローディアは「銀河」という名前を聞いた途端、少しだが顔を歪める。

「何故殺されたのかは今となっちゃわからない。父さんと母さんが小さかった俺を逃がすために命を張ってくれた……俺のために命を繋いでくれた」

「では、刹那は家族のために……」

「《蝕武祭》^{エクリプス}に出たのは姉さんの手掛かりを探すためだ」

昔の話をしているうちに訓練場へと着いた。背中に背負っていた長物を手に持つ。すう、と息を吸う。クローディアも緊張しているのか、息を呑む。

「起きろ」

その一言と共に、長物から光が発せられ、覆っていた布がまるで生き物のように勝手に解けていく。中から姿を現したのは、純星煌式武装の発動体だった。

「気をつけろ、こいつはなかなかのじゃじゃ馬だからな」

「あらあら、そうなんですか?」

そう言って刹那は発動体を握る。

「刹那の純星煌式武装のウルムⅡマナダイトの色は紫色なんですね」

煌式武装のマナダイトの色は緑一色だが、純星煌式武装のウルムⅡマナダイトには様々な色があるらしい。

「いくぞ」

「はい」

刹那が発動体を起動させると、日本刀のような機械的な鍔が形成された。そして、さらに鍔の部分から機械的な「はばき」が出現し、展開。その中から漆黒に輝く長身の光の刀身が形成された。柄の長さよりも刀身の方が長いというものだった。

「これが俺の純星煌式武装、《正宗》」

「それがあなたの……」

一見禍々しきを感じるが、それを含めてどこか美しさも感じる。そして、刹那はまた昔のことを思い出す。

—————

『刹那、《正宗》をもって逃げなさい!』

『そんなこと出来ないよ!お母さんもお父さんも一緒に逃げようよ!』

『それはできないんだ、刹那。父さんたちは刹那を守るためにあいつらを止める。そのうちに逃げるんだ』

『無理だよ……!ずっと一緒にいるって、姉ちゃんを探すって約束』

でしょ!?!』

幼い刹那の体を思い切り抱きしめる。

『ごめんね……!いつかあなたをこの《正宗》が導いてくれる。だから……!』

耐えきれなくなり、母は泣き崩れた。その母の肩を抱き寄せ、父は言った。

『刹那、お前は強い子だ。どんな困難も切り開ける。お前は、俺たちの自慢の息子だ。お姉ちゃんを、聖羅を助けてやってくれ。出来るね?』

『うん……!僕が絶対見つけるから……!』

『刹那……』

母が刹那の頬を包み込み、ある事を教えた。

『いい?こんな世界で神様なんか祈らないで……!しっかり、自分の道を行くのよ……!』

『結衣、もう時間がない』

『ええ……』

そう言つて父と母は家の玄関の前まで行く。そして最後に振り向き、最後の言葉を伝えた。

『俺（私）たちは、聖羅と刹那を愛しているから』

『行きなさい!刹那!』

そうして刹那は裏口から《正宗》の発動体を持って走り出した。小さい背中後ろを一度も振り向かなかつた。ただひたすら前を向いて走り続けた。例えば涙で視界が霞んだとしても。

『うあああああ!!』

目からは涙がとめどなく流れ、叫びながら走り続けた。

—————

「これは、姉さんを探すためのたった一つの手掛かりなんだ」

「刹那……」

「今度は、俺の命を削つてでも姉さんを見つけ出す。父さんと母さんが繋いでくれたように」

一瞬目を閉じ、クローディアを見る。その顔には、悲しそうな笑顔

が張り付いていた。

「それが、俺の成すべき事なんだ」

「……多分、私は一生忘れない。彼が見せた、悲しそうな笑顔
を。その奥にある揺るがない信念を。」

第3話 適合率検査

翌日、純星煌式武装オーガルクラスの適合率検査を受けるために生徒会室を訪れた綾斗を、クローディアが笑顔で出迎えた。

「昨日は大変だったようですね、綾斗」

ユリスが再び襲われたという一件は、昨日のうちに風紀委員へ通報済みだ。当然クローディアの耳にも届いているが、どれもユリスが大々的にネットニュースにも話題が上がっているが、どれもユリスが大々的に取り上げられ、綾斗の幼馴染み、紗夜の「さ」の字すら載っていない。やはり《冒頭ペーヅの十二人》と序列外では扱いがことなるらしい。わかりやすいといえればわかりやすい。と、生徒会室のドアが開く。

「ん？取り込み中だったか？」

刹那であった。

「いいえ、どうぞ入ってください」

軽く頭を下げ中へと踏み入れる。刹那には早く起きなければならぬ理由があった。

「おはよう、刹那」

「ああ、おはよう」

「ところで、何かあったのですか？あ、もしかして私に会いに来てー」

「断じてそれはない」

「.....」

完全に萎れてしまったクローディアを何とか綾斗は立たせる。刹那のメンタルブレイクスキルは非常に高いらしい。

『《在名祭祀書ネームド・カルツ》の更新を要求しに来た』

「え？刹那、《冒頭ペーヅの十二人》の誰かを倒したのかい!？」

「ああ、さつきな。寮の前で待ち伏せされていた」

「お相手は？」

元のメンタルに回復したクローディアが穏やかに尋ねた。

『《轟遠コルネフオロスの烈斧》』

「まあ、序列九位のマクスフェイルくんですか」

「《魔術師》^{ダシテ}である俺にとつては相性が良くてな」
「安心してください、『在名祭祀書』^{ネームド・カルツ}は随時更新されています。既に刹那の名前も載っているはずですよ。《冒頭の十二人》^{ペーヅ・ワッソ}との決闘の際はブックメーカーが開き、報道系クラブに真っ先にライブ中継されるほど注目が高いのです」
「じゃあ、まさか……」
「ええ♪先程からネットの書き込みが素晴らしいことになっていますよ」

刹那は血相を変えて素早く端末を開く。ネットのトピックスには滝が流れるが如くコメントが追加されていく。

「マクスフェイルくんは根に持つタイプと聞いています。新序列九位として、精進してくださいね?」

「決闘中は報道系クラブの奴らの姿なんか見えなかったぞ!」

「甘いですね、彼らは重度の野次馬なんですよ?バレずにライブすることなんて朝飯前なのです」

「あまり目立ちたくはなかったのだが……」

「ところでクローディア」

おもむろに綾斗は切り出した。

「犯人は捕まりそう?」

「んー、正直なところ難しいかも知れませんね。風紀委員にも本腰を入れて調査を行ってもらっていますが、ほとんど手掛かりは残っていないようです」

「いくらアスタリスクでも、昨日のは明らかな犯罪行為じゃないかな。だったら普通に警察とかに任せてしまえばいいんじゃない?」

風紀委員はあくまで学生による取り締まり機関だ。正規な捜査機関があるなら、そちらに任せられた方が頼りになるだろう。

「そこが難しいところでして。アスタリスクにも一応警察に準じる星獵警備隊^{シヤーナガルドム}という組織があるのですが、彼らは少々鼻が利きすぎるのですよ」

「とうとう……」

「彼らの警察権はアスタリスクの市街地においてのみ発揮されるべき

もので、学園内に及ぶものではないーというのが各学園共通の見解です。余程の事件でもない限り学園側は彼らを招き入れないでしょう」

学園の意向は統合企業財体の意向であり、すなわちアスタリスクのルールだ。学園側が許可しない限り、星獵警備隊のやはらが入ってくる事が出来ないらしい。

「痛くもない腹を探られるのは嫌だっということか」

「探られると痛いから嫌なのでしよう」

クローディアはあっさり認めた。

「私個人としては警備隊にお願いしたいところですが、こればかりは私の権限でもどうすることも出来ません。せめてもう少しユリスが協力的であれば打つ手もあるのですが……」

「まったく、なんでもあも頑なのかなあ」

風紀委員会に一報こそしたものの、ユリスはそれ以上の関与を拒んでいる。誰の助けも必要ないと言ってはばからないのだ。風紀委員は必要なら警護を付けることも可能だと言っていたのだが、「自分より弱い警護など不要だ」の一点張りである。

「あの融通が聞かない堅物娘の心を開かせるのは難儀だぞ」

端末をしまいながら刹那は言った。

「あの決闘以来、どうも俺は嫌われたらしいからな。教室にいるとしょっちゅう睨んでくる」

「それを言うなら俺もだよ……」

「きつとあの子は自分の手の中のものを守るのに精一杯なのでしょうね。新しいものを手に入れようとすると、今あるものがこぼれ落ちてしまうと思っているのかもしれない」

「手の中のもの……?」

「とはいえ、それとこれとは話が別です。私とて今回の件を看過することは出来ません。そこでお二人にご相談なのですがー」

クローディアがそう言っって身を乗り出したところで、生徒会室のドアが荒々しくノックされた。

「……と、すみません。今日はあなた以外にも来客があるのを忘れ

ていました。この続きはまた後ほど」

クローディアが慣れた手つきで執務机の端末を操作すると扉が開き、思わぬ一行が入ってくる。それは向こうも同じだったようで、揃って驚いたような顔で綾斗と刹那を見た。レスターら一行には綾斗も少なからず良く思われていないらしく、よく睨まれている。刹那に関しては因縁の相手だろう。

「あ、《コルネフオロス轟遠の烈斧》。今朝ぶりだな」

「……………てめえがなんでここにいる」

今朝の出来事が余程腹を立たせたのか、凄いい形相で刹那を睨む。新参者にしてやられたのだ、無理もない。

「そう睨むな。あんたとやり合うつもりは無い」

「オーガルクス純星煌式武装の利用申請はいろいろと手続きが面倒なので、出来れば一度に済ませたいと思ひまして。えーと、こちらは……………」

にこやかに紹介しようとしたものの、もちろん必要ない。

「見たところ、皆さん顔見知りのようですね」

「まあ、一応ね」

綾斗は微妙な笑顔で答えた。

「な、なんでお前がここに……………」

太った方の取り巻き……ランデイがぼかんとした顔で刹那を指さす。

「安心しろ、丸いの。あんたらの大将に喧嘩を売るつもりは無い。むしろ俺は買う方専門だ」

つまり、余程のことがない限り自分からはふっかけないと言うことだ。レスターはといえば、忌々しそうに綾斗を一瞥しただけですぐに視線を逸らした。

「今回は綾斗とマクスフェイルくんのお二人に適合率検査を受けていただきます」

「おい」

「ん？」

いきなりレスターに話しかけられ刹那は振り向く。

「てめえは受けねえのかよ」

「ああ、俺には純星煌式武装は必要ないからな。嫉妬されてしまう」

「・・・は？嫉妬？誰にだよ」

「相棒にだ」

ますます頭にはてなを浮かべるレスターは、首を傾げながらも視線を戻した。

「おわかりだと思えますが、そちらのお二人は付き添いということなので保管庫には入れません。よろしいですね？」

「ああ、はい、もちろん了解しています」

瘦せた方の取り巻きローサイラスはこくこくと頷いた。

「では俺も外の方で見ているとするか」

「何を言っているんですか？刹那にはもしもの時のために、一緒に来てもらいます」

「相変わらず面倒ごとを押し付ける厚かましい女だな、あんたは」

クスクスと笑うクローディアを半目で睨む。

「刹那こそ気になるでしょう？適合率検査がどのようなものか」

「まあ、少しは・・・」

「では良いではありませんか♪」

「いいからさっさと始めようぜ。時間が勿体ねえ」

「ふふ、せっかちですね。ですが確かに時間は有意義に使うべきです。参りましょうか」

クローディアは立ち上がると、先導して生徒会室を出た。よく磨かれた廊下を進みながら、綾斗は気になっていた疑問をクローディアにぶつけてみる。

「それで、純星煌式武装の貸し出してどういう手順になってるの？」

「手順としては単純ですよ。希望する純星煌式武装との適合率を測定して、80%以上であればそれが貸与されます」

「それだけ？」

「ええ」

なんだか拍子抜けだ。純星煌式武装に使われているウルムⅡマナダイトは、とても金銭には換算できないほどの価値があるという。そんなものを気軽に学生へ貸し出してしまっているのだろうか。

「はっ、なんも知らねえんだな。純星煌式武装を借り受けるのは言うほど簡単じゃねえんだよ」

すると綾斗と刹那の後ろを歩いていたレスターが嘲るように言った。

「そもそも希望すれば誰でも通るってわけじゃねえ。序列上位か、《星武祭》^{フェスタ}で活躍したやつ、あるいは特待生でもなきやまず無理だ。よしんば借り受けられたとしても、そいつを使いこなせるかどうかは別問題だがな。それに、てめえの横を歩いているそいつは特待生なのに、この大チャンスを自分から無下にした馬鹿野郎だしな」

適合率とはその純星煌式武装の能力をどこまで引き出せるかの目安だ。誰でも簡単に起動可能で、威力もある程度調整できる煌式武装とは違い、純星煌式武装はクセが強い。ウルムⅡマナダイトは極めて純度の高い万応素^{マナ}の結晶であり、限定的に《魔女》^{ストレガ}や《魔術師》^{ダンテ}のような特殊な力を発揮する。つまりそれを扱いきれるかどうかを測るのが適合率検査なのだが、言ってしまうえば相性の問題。基本値自体、努力ではどうにもならない部分が多い。

「ふふっ、さすがにチャレンジも三回目となると説得力がありますね」得意そうに語っていたレスターだったが、クロードディアの言葉で一転。顔をしかめた。

「けっ！今度で終わりにしてやるさー！」

「なあ、会長」

ちよんちよんとクロードディアの肩をつつく。

「三回目って、ほぼ望み薄くないか？」

「そんな酷なこと、言えるわけないでしょうっ」

「ずっとやらせているほうが酷だと思っただが」

「と、とにかく黙っててくださいっ」

コソコソと二人で話し合っている様子を見て、一行は首を傾げた。「そうだよレスター！今まではちよつと運がなかったただけだ！今度こそやれるさー」

「ふふん、当然だ」

ランデイのお世辞は随分とあからさまだったが、レスターもすぐ気

を良くする。

「希望すれば何回もチャレンジ出来るってこと？」

「許可さえ下りれば可能ですよ。学園としても宝の持ち腐れでは意味がありませんから。まあ、そうは言ってもその審査が厳しいのも事実です。《冒頭ペーの十二人ジ・ワン》を除いては、ですけれど」

なるほど、さすがの特権だ。

「といっても《冒頭の十二人》《ページ・ワン》とて無制限ではありません。見込みがないと判断されれば許可が下りなくなることもあります」

そうこうしているうちに、高等部校舎の地下ブロックにある装備局に着いた。地下といってもアスタリスクは人工島なので実際は水中なのだが、窓らしきものは一つもないので中はそう大差がない。職員と思わしき白衣の人々が忙しそうに往来する通路を物珍しそうに綾斗が眺めながら進んでいると、

「や、やあ、この前はすみませんでした」

ふいに背後から小さな声で話しかけられた。振り向いてみればサイラスが気の弱そうな笑顔を浮かべていた。

「レスターさんも悪い人じゃないんでぶが……その、ちよつとばかり気性の激しいところがある方なので……」

「ああ、いや、別に気にしてないよ」

「ランディさんもあの調子ですから、また何か不愉快な思いをさせてしまうかも知れませんが……ほ、本当に申し訳無いです。昨日も二人で何か話してみたいで……」

「おい、サイラス！てめえ、何してやがる！」

「そうだぞ！早く来い！」

「は、はいっ！で、では……」

前からレスターたちの怒声が飛んでき、サイラスは小さく頭を下げると、慌てて二人に駆け寄って行った。そして、その後ろ姿を刹那はただ無言で、睨んでいた。

「……………」

(刹那?)

そしてそのまま踵を返し、クローディアの元へと歩いていった。その後を追うように綾斗も駆け足で向かった。

それから装備局フロアの最奥にあるエレベーターでさらに潜り、ようやく到着したそこは広めのトレーニングルームのような空間だった。地下なのに随分天井が高い。片方の壁には六角形の模様が目立ち、並んでいて、その反対側は一部がガラス張りのようになっている。ガラスの向こうでは白衣姿の男女が何人か忙しそうに働いていたが、年齢的に学生ではないのでここの職員だろう。ランディとサイラスも今はそちらで待機している。

「んじや先に始めるぜ、いいな？」

「綾斗は構いませんか？」

「ああ、うん。どうぞ」

レスターは手慣れた様子で六角形が並んだ壁の隅に置かれた端末を操作し始めた。巨大な空間ウィンドウがいくつも表示され、真剣な表情でそれと向き合っている。

「あれは？」

「我が星導館学園が保有している純星煌式武装の一覧です。ちなみに現在の総数は二十二、これは六学園中トップなんですよ」

「へえ」

「一覧には形状と名前、その能力が記載されているので希望するものを一つ選んでください。表示がグレーになっているものは現在使い手の元にあるものです。つまり貸し出し中というわけです」

「なるほど。ということとは、ええつと」

綾斗はグレーの表示を数えてみた。

「七つか。あんまり貸し出してはいないんだな」

「そうだね。刹那は本当に受けないの？」

「ああ、俺は大丈夫だ。それよりお前はなにするんだ？」

「そうなんだよな。実の所、姉さんが使っていたかもしれない純星煌式武装だけ見れば良かったんだけど……」

「よし、これに決めませ」

やがてレスターは一覧から一つ選んでウィンドウを閉じると同時

に六角形の模様が一つ輝き、それは場所を組み替えながら滑らかに動きながらレスターの前にやってきた。更には低音を響かせて、模様から壁からせり出してくる。どうやら収納ケースのようだった。

「うふふ、無駄に凝ってますよね」

「無駄って……」

「あんたがそれ言っちゃダメだろ」

生徒会長に言われてこれを設計した人も立つ瀬がないだろう。

「あら？」

「《轟遠の烈斧》は挑戦者だな。あんな気難しいのを選ぶとは」

「それを言ったら私は何なんでしょうかね。ですが、確かに刹那の言う通りです。マクスフェイルくんは《黒炉の魔剣》を選びましたか」

「《黒炉の魔剣》？」

「ええ、かつて他学園から〃触れなば溶け、刺さば大地は坍塌と化さん〃と恐れられた強力な純星煌式武装です」

「四色の魔剣のうちの一振りだ」

「随分と仰々しいね……」

「確かにそうですが、それに見合うだけの力を秘めていますよ。手懐けられたのは歴代でも片手で数えるくらいしかいません。そしてあれが、使用履歴の改竄があつた件の純星煌式武装なんです」

「あれが……」

レスターはケースから発動体を取り出すと、部屋の中央に進み出しガラスの向こうへ合図を送っている。綾斗は思わずその手元を凝視した。

「あれが、姉さんが使っていたかもしれない純星煌式武装……」
《黒炉の魔剣》のウルムⅡマナダイトはレスターの手の中で鮮やかな赤く輝いていた。

「さあて、いくぜえ……!」

レスターが発動体を起動させると、まずはその柄が再構築されていく。かなりの大きさだ。そして間髪入れずにその柄の部分が開き、光の刀身が現れる。

「魔剣と聞いていたが、刀身は白いのか。にしてもでかいな」

綾斗もつとよく見ようと身を乗り出した瞬間、心臓がドクンと強く脈打った。まるで得体のしれない化け物と目を合わせてしまったかのような感覚、いや戦慄と言った方がいいだろうか。もつとも、それはほんの一瞬の出来事だったが。

(今のは……?)

綾斗は首をひねったが、どこからかスピーカー越しの声により意識を戻した。

『計測準備できました。どうぞ始めてください』

それを受けてレスターは《黒炉の魔剣》を握ったまま吠えるような気合いの声を上げる。

「うおおおおおおおおおお！」

爆発的に星辰力が高まっているのが綾斗にもわかったが、《黒炉の魔剣》からはなんの反応もない。

『現在の適合率、32%』

「なあめるなあああああああ!!」

「無駄なことを……」

刹那は静かに息をついた。《黒炉の魔剣》を握る腕の筋肉が膨らみ、割れんばかりに歯を食いしぼる。それは何者をも圧倒的な力でねじ伏せようとする強い意志の具現だ。だが《黒炉の魔剣》はそんなものには歯牙にもかけず、突然猛烈な閃光を放つとレスターの巨体を弾き飛ばした。

「ぐあああっ！」

「絶対痛いよ、あれ……」

「どうやら、お気に召さなかったようだな」

どういう力が作用しているか分からないが、《黒炉の魔剣》はしばらく宙に留まったままそんなレスターを見下ろしている。

「拒絶されましたね」

クローディアが呟いた。

「話には聞いていたけど、純星煌式武装に意思のようなものがあるっていうのはこういうことだったんだ……」

「ええ、とてもコミュニケーションが取れるようなものではありません

んが」

『最終的な適合率は28%です』

「まだまだあー！」

壁際まで吹き飛ばされたレスターが猛然と体を起こし、めげずに再度《黒炉の魔剣》を構える。

「ああいうがむしやりに力を追い求める姿勢は嫌いではありませんが……強引なだけで口説き落とせる相手ではないようですね」「当たり前だ、使い手が武器を選ぶように武器も使い手を選ぶ。そこに理屈なんかいらぬい」

「どうして刹那とクローディアはそんなに詳しいの？」

「純星煌式武装の使い手ですから、私も刹那も」

それは知らなかつたと呟き、綾斗は視線をレスターに戻す。

「マクスフェイルくんは前回、前々回とやはり名の知れた純星煌式武装を選んでいます、どれも今回と同じような結果でした」

「それはある意味才能だな」

「関心するところが違うよ、刹那……」

「強力であればなんでもいいという節操の無さを見抜かれているのかも知れません。その割り切り方は悪くない、むしろいいことだと思うんですが……」

クローディアはそこで言葉を切ってレスターを見やる。なんとか押さえ込もうとしているようだが、何度やっても弾き飛ばされてしまっている。

「くそがあー！なんでだ！なんで従わねえ！」

「限界だな、毎回あんななのか？」

「え、ええ」

そのうちにレスターは《黒炉の魔剣》に触れることさえ出来なくなってきた。近づいただけで跳ね飛ばされてしまう。

『適合率、17%です』

適合率は低下する一方。もはやレスターも苛立ちを隠そうとしな

「いいからオレ様に……従いやがれええええ!!」

怒号を上げて掴みかかったが、今度は一際大きく吹き飛ばされた。思い切り壁に叩きつけられ、がくりと膝を折る。

「ぐっ……!!」

『適合率、マイナス値へ低下!これ以上は危険です!中止して下さい!』

「あー、これは、うん、まずいな。完全にプツンだ」

「本格的に機嫌を損ねてしまったようですね」

「なんで二人共そんなに冷静なのさ!」

クローディアは一步踏み出しかけたが、ピタリとその足が止まった。理由は簡単。空中に浮かんでいる《黒炉の魔剣》セルベレスタが熱を放出しているからだ。10メートルも離れているのに直火で炙られている気さえしてくる。

『た、対象は完全に暴走しています!至急、退避してください!』

室内が赤い警告ランプ一色に染まる。スピーカーから焦った声が響き渡った。

『対象の熱量が急速に増大中!』

言われなくても既に実感している。

「アレは本来熱を刀身に溜め込む剣です。制御する使い手がいないので、少々外に漏れだしてしまっているみたいですね」

「こ、こういうことってよくあるの?」

「オーガルクス純星煌式武装の暴走ですか?いいえ、記録では何度か見えています。遭遇するのは初めてです。貴重なデータですが、逃げますか?」

「そうしたいのは山々んだけどさ……刹那がさつきから手招きしてるんだ。しかも、アレは俺をずっと見てるし……」

(なるほど……)

重い足取りで刹那の元へと行く。既に刹那は臨戦態勢にはいつていた。

「なあ綾斗、アレ、お前のにしてみないか?」

「アレを?俺に出来るかな」

「出来るさ、隙は俺がつくる。そのうちにやってみろ」

「……わかった」

綾斗は決心し、構える。

「いい目だ」

刹那は腰のポシエットから煌式武装ルークスとは別の発動体を取り出す。紫色に輝くウルムⅡマナダイト。

「あれは……！」

「いくぞ、《正宗》」

発動体を起動させ、刀の形状へと再構築される。

「あいつ、いつ純星煌式武装オーガルクスを……！」

レスターも驚きを隠せない。《黒炉の魔剣セルベレスタ》は綾斗に向かい、突進する。その前に刹那は立ちはだかり、《正宗》の刀身の腹を《黒炉の魔剣セルベレスタ》の刀身に這わせる。そして、真ん中の当たりで漆黒の刃を立て、打ち上げた。刀身と握り手の位置が逆転し、握り手の部分が綾斗の方へと向く。

「今だー！」

立ち位置を綾斗と逆転する。綾斗はしっかりと柄を握った。

「あつっ！」

想像していたが、柄はとてつもない熱さだった。星辰力プライナを掌に集中してなお手の肉が焼けるのを感じる。

それでも綾斗は離すことなく床に突き立てた。

「……悪いけど、しつこくされるのは嫌いなんだ。君と同じでね」

その途端、部屋に満ちていた熱気がかき消える。《黒炉の魔剣セルベレスタ》もさつきまでの暴れっぷりが嘘のように動きを止めた。

一同が唾然する中でクロードイアがパチパチと拍手し、刹那は《正宗》の起動体をポシエットにしまい、肩をポンと叩いた。

「さすが綾斗。……適合率は？」

職員ははつと我に返り、返答した。

『きゅ、97%、です……！』

「グツジョブ」

「結構」

刹那は綾斗に賞賛を贈り、クロードイアは満足そうに頷き、レス

ターに視線を向ける。

「そういうわけです。あなたには残念ですが、異議はありませんね？」
「……………」

まだ信じられないという視線で綾斗を見ていたが、やがて悔しそうに拳を床に叩きつけた。

「あ、丁度いいです。刹那も計測されては？」

「俺もか？まあ、せっかくだしな」

そして、刹那も適合率測定を開始する。

「ふっ……！」

起動した《正宗》を握り、自身の星辰力プラナーナを爆発させる。

「あいつ、バケモンか……………!？」

レスターはまた驚きを隠せない。クロードイアと綾斗も同じで、目をむいていた。

「……………ふう。どうだ？」

刹那が促すと、職員がまたまた驚きながら声を発する。

『ひゃ、100%です……………!』

「流石ですね、相変わらず」

刹那はやれやれと、息を吐いた。

第4話 《閃光》の本気

刹那は奈落の底へと落ちていくかのような感覚に苛まれていた。姉の聖羅はよく手に包帯を巻いていた。理由を尋ねては、よくあしらわれたものだ。そして、頭の中に直接流れてくる映像のようなもの。『うつ．．．．．！』

『聖羅？体の調子は．．．．．聖羅!？』

(あれは．．．．．姉さんに母さん?)

聖羅はベッドに腰をかけながら、手に黒い物体を握っていた。

『聖羅、何をしているの！早く離さない！』

『嫌よ．．．．．！絶対に離さないわ．．．．．！』

そして握られている黒い物体はまるで拒絶するかのように、聖羅の手を弾き飛ばした。僅かな力であったが、常人である聖羅にとっては激痛だった。

『きゃあ！』

『聖羅っ！』

黒い物体はそのまま地面へと落下した。聖羅の手は火傷をしたかのように真っ赤に腫れている。

(あれは、《正宗》の発動体！)

『《星脈世代》^{ジェネステラ}じゃないのに素手で純星煌式武装^{オーガルククス}に触るなんて．．．．．それがどれだけ危険かわかっているの!？』

『ええ、わかっているわ．．．．．！でも、なんで刹那なの．．．．．！なんでよりによってあたしの弟を選ぶのよ!』

『聖羅．．．．．』

『なんで、他の人じゃないの．．．．．!』

聖羅の目からは大粒の涙が零れていった。

『純星煌式武装^{オーガルククス}には意思のようなものが宿っているのは知っていますよ? 《正宗》自身が刹那を選んだのよ』

『まだ小さいのに．．．．．酷いよ、お母さん!この世界は．．．．．!』

そこで映像は終わった。瞬間、断片的ではあるが脳内に映像が次々に流れていく。何者かが眠っている聖羅を抱き抱え、遠のいていく映

像。どこかの施設内。横たわっている目線から見えるカプセル内のような天井。そして、それを見下ろす仮面の人物。

刹那「……………」

跳び上がるように起き上がる。時刻は丁度六時を指していた。片目からは一筋の涙が流れていた。どうやらルームメイトのことを起こしてはおらず胸を撫で下ろす。おもむろに机に目を向けると、カーテンから差し込む僅かな光を反射して、《正宗》の発動体に埋め込まれた紫色のウルムⅡマナナイトが艶やかに輝いていた。

「……………あれはお前の記憶なのか？ 《正宗》……………」

もちろん返答はなく、刹那の独り言は虚空へ消えていった。あれは自分にはない記憶だった。一体なぜ、あんなものを自分に見せたのか。純星煌式^{オーガルクス}武装の気まぐれか、はたまた何かの前兆を予告するためのものか。今の刹那に知る術はなかった。だがもし、あの断片的に見えた映像が本当なら、姉を連れ去ったのは仮面の男に間違いない。やはりここに来て正解だったようだ。

「待っている、仮面の男。お前を見つけて必ず……………！」

刹那は奥歯を噛み締めた。だが、一つだけ分からないものがある。あれがもし《正宗》の記憶だったとしたら、時々見るメガネをかけた少女は何者なのか。

（あれは誰なんだ……………昔、会ったことがあるのか？ 俺か姉さんが。だがどこか、綾斗に似た雰囲気があった。顔はあまり似ていなかったが……………）

この世の中に似たような人なんていくらでもいる。考えるのをやめ、制服に着替える。気晴らしに外に出るために、机においてあった煌式^{ルークス}武装と純星煌式^{オーガルクス}武装の発動体を腰のポシエットに詰め込めこんだ。季節は春だと言うのに、アスタリスクの朝はいつもこれだ。一寸先さえわからない濃霧。水上の上だから仕方がないと言ったらそこまでだが、やはり慣れない。濃霧の影響か、早朝に出歩く人なんて滅多にいないのだろう。曇って見える街頭の明かりだけが視界に入る。

「お、お前さんも朝早いのかな」

「……………夜吹か」

「この朝は視界不良だから気をつけんだぜー」
(こいつ、いつの間に後ろから……)

足音、ましてや気配すら感じ取れなかった。刹那とてこういう視界が悪い時は警戒心は持っている。だが、夜吹の気配には気づけなかった。まるで背後から近づくと暗殺者のような感覚だった。いつも飄々としてるため、掴みどころがないのも夜吹の特徴だ。裏表がないのはいいことなのだが、やはり食えない男であるのは間違いない。
《星武祭》^{フェスタ}での活躍は諦めてると言ったが、どこか怪しい。

「俺に何か用か？」

「いやな、神木が散歩してるって小耳に挟んだもんでよ。天霧も呼ぼうと思っただけど起こすのも悪いしな」

「そうか」

「《閃光》の実力をもっと決闘か公式序列戦でも拝見したいしな！今度はちゃんとお姫様とやってくれよ！」

「あの時勝手にライブ中継してたのはお前だな？」

「おー！気付いてたのか！いやー、バレるとは俺もまだまだ未熟だな」

英士郎の額を指で弾く。少し鈍い音が鳴り、少し遅れて「いってー！」という声が発せられた。

「今日はお前の朝食をもらおう」

「なんですと!?俺から朝食を奪うってのか!」

「それでチャラにしてやる」

「えー」

「現金を取つてもいいんだがー」

「私めの朝食でよかったらどーぞもらってください」

「ーったく」

英士郎は刹那の肩に手を回し、歩いていく。だが、刹那はまだ知らない。彼が両親を殺した一族の当主の息子であり、後々戦うことになることをー。

ー

「おーっす、刹那」

「ん、ササミか」

「ササミじゃない、沙々宮紗夜って名前がある」

「すまない、ササミ」

紗夜はふざけて言っているのかと顔を見たが、刹那はいたって真面目な顔だった。どうやら本当にササミで覚えてしまったらしい。

「名前を覚えるのが苦手だな」

「じゃあ問題」

紗夜は問題形式で名前を覚えてもらおうと早速実践する。

「薔薇色の髪をしている女子は？」

「リースフェルトのことか？」

「水色の髪をしている女子は？」

「ササミ」

「……………」

「なぜ睨む」

なかなか手強い。真面目に間違っているとかなり苦労するだろう。

「気を取り直して、じゃあ星導館学園の生徒会長の名前は？」

「生徒会長」

「それ役職名。名前」

「《千見の盟主》」
バルカ・モルタ

「それは二つ名。名前」

「……………腹黒い女？」

ダメだ、こんなにも人の名前を役職名やましてや食べ物で覚えるなど。まるで試合で燃え尽きたジョーのような気分だ。紗夜の体は真っ白に脱色され、壁に寄りかかる。なんで？ユリスと綾斗だけは覚えてるのに。

「だ、大丈夫か？ササミ」

「……………」

応答がない。紗夜の体調が優れないのかもしれない。体も真っ白だ、刹那は直ぐに次の行動にでる。

「失礼」

紗夜の右手首と首に手を当て、脈拍を測る。

「脈拍、心拍数ともに異常なし」

「うわぁ！紗夜どうしたの!？」

慌てて綾斗がやって来る。隣にいたユリスもこれにはビックリだ。

「謎の病だな……」

顎に手を付き、考え込む。体色が消えるなど有り得ない。だが《ジュネステラ星脈世代》の新たな病気だとすれば一大事だ、と自分が原因にも関わらず真面目に考える刹那であった。

—————

「まったく、原因はお前か。刹那」

「すまない、沙々宮……」

「覚えてくれたから許す」

あれから保健室まで紗夜を運び、ユリスと綾斗による一時間にも渡る教えの末、なんとか名字を覚えさせることができた。すると、保健室のドア越しに視線を感じる。敵意のような、とても危険な視線を。

「誰だ！」

刹那はドアを思い切り開けたと同時に、逃げる人影を視界に入れた。

「綾斗、リースフェルトを頼む」

「まさか！」

「ああ、犯人を見つけた。俺は先に奴を追う」

「刹那！待て、私も行く！」

「ユリス!？」

「勝手にしろ」

(そう遠くには行ってないはずだ)

刹那は足に星辰力プラナを集中させ、窓を開け飛び降りる。着地し地面を蹴り砕く程の初速で走り出した。

「な、なんて速さで走るんだ、アイツは……」

「ユリス、俺たちも行くこう！」

綾斗、ユリスも刹那の後を追う学園を飛び出した。

—————

「ちっ！逃げ足は速いな」

跳躍し建物の屋根に立ち、星辰力を眼球に集中させた。

《閃理眼》！」

建物や住宅群が透き通ったように見え、その中を走る人型を見つけた。人という生き物は生きている限り、体から微弱ながらも電磁波を発している。その電磁波を辿り、読む事で相手の行動を先読みすることが出来る。もちろん戦闘にも使えるため汎用性は高い。

「見つけた。向かった場所は再開発エリアの外れか」

今度は建物と建物の上を跳びながら再開発エリアの廃ビルを目指した。

一方綾斗たちといえば――

「クローディア！刹那の居場所は!？」

『端末のGPSでは再開発エリアの廃ビルを指していますね』

「よし！私は先に行く。綾斗、お前はアレを取ってからこい」

「アレ?」

端末越しからクローディアの声が発せられる。

『先ほど《黒炉の魔剣》の用意ができました』

綾斗は少し考えた後、直ぐに答えを出した。

「わかったよ。《黒炉の魔剣》を取りに行ったら直ぐに行くから無理しないよね!」

「ふん、私をなめるな」

二人は別方向に向かい走り出した。

――

その頃、刹那は再開発エリアの廃ビルを訪れていた。解体工事中のそこは逢魔が時の薄闇が支配している。すでに一部の壁や床が打ち壊されて広く感じるが、あちこちに廃材が積まれているため死角は多い。顔色一つ変えず足を踏み入れた。まだ日中だというのに中は薄暗く、日差しはほとんど入ってこない。確かに、隠れるには打って付けの場所だ。常時《閃理眼》を発動させながら黙々と歩みを進める。一番奥の区画に足を踏み入れた途端、吹き抜け状になっている上階部分から刹那目掛けて廃材が落ちてきた。が、もう既にそこに刹那はい

なかった。《閃理眼》により、犯人の動きを先読みしたのだ。立ち込める土埃を払いながら、静かに出てくるよう促した。

「リースフェルトはいない。いい加減出てきたらどうだ、サイラス・ノーマン。お前が一連の事件の犯人だということは分かっている」

弾かれた強化鉄骨が床に突き刺さり、廃材が巻き上げた土埃はまだ落ち着かない。その中、一人の少年がゆっくりと姿を現した。

「これは失敬。余興にもなりませんでしたか。ですが、リースフェルトさんではなかったのは計算外でしたがね」

痩せた少年リースサイラスは、芝居がかった仕草で頭を下げた。

「それにしても驚きましたよ、よく僕が犯人だとわかりましたね」

「お前のことは最初から疑ってたさ。危なくその上手い芝居に騙されるとこだったかな」

「やはり、あの時僕を睨んでいたのは君でしたか」

適合率検査の時のことを刹那は思い出す。

「もつとも、綾斗とリースフェルトは前々からわかっていたと思うぞ。今回の事件の当事者はいつらだからな。だが、第三者の俺に看破されるとは、その芝居の稽古が足りてないんじゃないか？」

「これはこれは……僕としたことが迂闊でした。では、彼も最初から僕を疑って探りを入れていたと」

「そのくらいはやってのける奴さ、あいつは」

「ふむ……だとするとやはり彼のほうへ狙いを変えた方が良かったですね。リースフェルトさんを狙う上で、彼はいかにも邪魔者だ。――君も」

「この道化が……!!」

「くくっ、わかっていますわかっていますよお。君がわざわざここに足を運んでくださったのは、お二人を守るためでそよう？」

余裕の表情で手を広げてみせるサイラスに、刹那は拳を握り締める。

(まさか、ここに来るよう誘導されていたとはな)

「で、用件はなんだ」

「まあまあ、そう急かささないでください。僕としては話し合いで済む

ならばそれに越したことはないと考えているのですよ」

「この期に及んで戯れ言を」

「いえいえ本当です。僕としては正面から《閃光》とやりあうのは出来るだけ避けたいのが本音ですし」

そう言いながらも余裕の表情を崩さない。ここに来る前に調べてみたが、サイラスは序列外だし公式序列戦に参加した経歴もない。だが、その分実力は未知数だ。

「わかった、聞いてやる」

ここは相手の出方を伺った方が得策だと判断し、サイラスの提案に乗った。

「そうこなくては。実は僕、ここでの目的はお金を稼ぐ事です。単身で来た君にも分かるでしょう？お金を稼ぐ大切さを」

サイラスは尊大な笑顔で頷く。

「君はおわかりでしょうが、こちらの条件はリースフェルトさんの《鳳凰星武祭》の辞退です。プラスして、今回の襲撃と僕が無関係であることを証言していただけると助かります」

「メリットは？」

「リースフェルトさんと天霧綾斗くん、そして君の身の安全では不足ですか？」

「ーくくならないな」

どうでもいい話を聞かせたこっちはハッキリ言って、サイラスのことなどどうでも良かった。どうせ、クローディアからは逃げられないのだから。だが、大切な友の身が危ないとなれば話は別だ。

「そんなもの、お前を叩きのめせば済む話。それに俺が黙っていたとしてもすでに生徒会はお前まで嗅ぎつけているはずだ」

「そっちはどうとでもなります。なにしろ、僕がやったという証拠は一切ないのでからね」

「大した自信だな。別に自分の力を誇示する訳では無いが……勝てると思っているのか？」

サイラスは圧倒的強者の威圧を身に受けてた。血の気が引き少し足がぐらついたが、なんとか平然は保っていられた。なんとか、だが。

「事実ですから」

刹那とサイラスの視線がぶつかり合う。と、そこに割り込むように、低く怒りに満ちた声が響き渡った。

「これは一体どういうことだ、サイラスッ！」

「………《轟遠の烈斧》？」

ずかずかと大股でやって来たのはレスター・マクスウエイルだった。レスターの目線と怒りは明らかにサイラスに向けられている。

「やあ、お待ちしておりましたよレスターさん」

「ユリスが決闘を受けたというから駆けつけてみれば……今の話は本当なのか？てめえがユリスを襲った犯人だと」

どうやらさっきのやりとりを聞いていたらしい。

「ええ、その通りです。それがなにか？」

「ふぎけるな！なんでそんなマネしやがった！」

「なんでと言われましたもね。依頼されたからとしか答えられませんが」

「依頼だと………？」

レスターは驚きと怒り、そして混乱が混ざった表情をしている。これが演技なら大した役者だが、そんな器用さを持ち合わせていないことぐらい刹那にもすぐわかった。

「そいつはな、どこぞの学園と内通して《鳳凰星武祭》にエントリーした有力学生を襲っていたのだ。知らなかったのか？」

声が発せられた方を振り向けば、そこには仁王立ちしたユリスがいた。その表情はレスター同様、怒りに満ちていた。

「………！」

「遅かったな、リースフェルト。道中危険がなくて何よりだ」

「遅れてすまん、刹那」

レスターは言葉もないといった表情だった。彼にとつて余程従順な取り巻きだったのだろう。そんなレスターを嘲るような目で見ながら、サイラスが肩をすくめる。

「僕はあなた方と違い、正面切つてぶつかり合うような愚かしいマネを繰り返すのはごめんなんですよ。もっと安全でスマートに稼げる

方法があるなら、そちらを選択して当然でしょう」

「このやり方がお前にとってスマートとやらと言うなら……お前、かなりの外道だぞ」

「それが同じ学園の仲間を売ることだと?」

「仲間? ははっ、ご冗談を」

サイラスは笑いながら首を横に振った。

「ここに集まっている者は皆敵同士じゃありませんか。チーム戦やタッグ戦のために一時的に手を組むことはあっても、それ以外ではお互いを蹴落とそうとしている連中ばかりです。リースフェルトさんや神木刹那くんのように序列が上位の人はよくお分かりでしょう? 必死で闘って、血と汗を流して勝って、ようやくそれなりの地位を手に入れたと思ったら、今度はその場を付け狙われる。僕はそのような煩わしい生活は真つ平なんですよ。同じくらいに稼げるのであれば、目立たずひっそりしていたほうが余程賢いと思いませんか?」

「確かに貴様の言い分にも一理ある。同じ学園に所属しているが仲良しこよしの関係ではないし、名前が広がれば煩わしさも付いて回る」
「おい、ユリス……!」

心当たり抜群だったのか、顔をしかめるレスター。

「だが、決してそればかりではない」

「おや、これは意外ですなあ。あなたはどちらかと言えば僕に近い方だとばかり思っていたのですが」

「こちらにも心外だな。貴様のような外道と一緒にされるとは」

ユリスはこれで終わりとばかりにサイラスを睨みつける。

「ぶちのめす前に聞いておくぜ。なんでオレ様を呼び出した。まさかオレ様がてめえの味方をするとも思ったのか? だったら大馬鹿野郎としか言えねえな」

「いえいえ、あなたは保険のようなものですよ。もし刹那くんとの交渉が決裂した場合、誰か代わりに犯人役をやっていたら必要がありますからね」

「……てめえ、本当に馬鹿なのか? オレ様はいそうですかと引き受けるわけねえだろ」

「なに、三人とも口がきけなくなれば、あとは適当な筋書きをこしらえますからご安心を。ま、そうですね、三人が決闘の拳句、仲良く共倒れしたというのが、一番無難なところででしょうか」

その言葉にレスターの堪忍袋の緒は完全に千切れたようだ。

「おもしろえ、てめえのチンケな能力でオレ様を黙らせるっていうんなら、是非ともやってみようじゃねえか」

そう言つて煌式武装ルックスの発動体を取り出すと、その巨体に負けないサイズの戦斧《ヴァルディッシュユレオ》が出現する。

「レスター、あまり先走るな。何を仕掛けてくるかわからんぞ。やつも《魔術師》ダンテなのだろう?」

「ハッ、あいつの能力は物体操作だ。せいぜいそこらの鉄骨を振り回すぐらいしかできやしねえさ。それよりユリス、刹那。てめえらは手を出すんじゃないぞ。これはオレ様が残した不始末だ、自分のケツは自分で拭く!」

言うが早いかレスターは地を蹴った。一瞬でサイラスとの距離を詰めると、巨大な光の刃を唸らせて三日月斧を振り下ろす。

「くたばりやがれえ!」

が、その寸前。

「なにっ!」

突如として吹き抜けから降ってきた黒ずくめの太男が二人の間に割って入り、レスターの一撃を受け止めた。

それも素手で。レスターは驚いた表情をしつつ、一度距離を取る。

「へっ!そうかそうか、そいつがご自慢のお仲間つてやつか」

「仲間?くくつ、馬鹿なことを言わないでください」

サイラスがパチンと指を鳴らすと、太男に続いてさらに二人、黒ずくめの男たちが姿を現した。

「こいつらは、僕の可愛い可愛いお人形ですよ」

男たちが黒ずくめの衣装を脱ぎ去る。その下から現れた体は、まさしく人形だった。顔には目とおぼしき窪みがあるだけで、鼻や口もない。関節は球体で繋がっており、全体的につるんとしている。強いていえばマネキンだが、それより遥かに不気味だった。

「戦闘用の擬形体か……」

ユリスは冷静に判断した。

「僕の能力は印を刻んだ物体に万応素で干渉し操作すること。それが無機物である以上、たとえ人形のように構造が複雑であっても自由に操ることが可能です。もつとも、それを知っている人間はこの学園にいませんがね。さあ、やってしまいなさい。僕の可愛い人形たち！」

四体の擬形体がレスターに飛びかかったが、その四体全ての胴が一瞬にして斬られた。

「……へ？」

「刹那……てめえ……」

「すまない、《轟遠の烈斧》。邪魔はするなと言われたが、ここは俺に任せてほしい」

「刹那……」

「リースフェルトも。《轟遠の烈斧》、俺はあんたと初めて決闘したとき、こんな強者が学園にいたことを初めて知った。あんたは確かに強かった。今も、きつとこれからも。だからこそ、あんたやリースフェルトを危険な目に合わせたあいつを、何より俺は許せない」

「……ふん、勝手にしろ……サイラスを頼む……」

「ああ、頼まれた」

刹那はゆっくりとサイラスへと歩み寄る。

「サイラス・ノーマン。正直、外道のお前と口は聞きたくないが、これだけは言っておく。お前のいうスマートな選択は間違えたようだな」「何を理由のわからないことを」

「お前は選択を間違えた。お前は、俺の怒りを買った」

刹那の星辰力が爆発する。それに呼応するかのように《正宗》に変化が訪れる。

「なんだ、《正宗》が……」

ユリスは目を凝らした。そう、《正宗》が変形しだしたのだ。柄が割れ、割れた中から更に柄が伸び、漆黒の刀身が更に伸びる。まるで、野太刀のような姿に変形したのだ。

「ば、ばかな……！ 純星煌式武装が変形するなんて……！」

サイラスも流石に驚きを隠せないようだった。

「《正宗・叢》むらくも」

野太刀へと変貌した《正宗》を構え、サイラスを睨む。

「ま、まあいいでしょう。僕が最大で操れる128体の人形で相手をしてあげましょう！」

目の前には総勢128体の擬形体がひしめき合う。だが刹那は全く動揺した表情を見せず、構える。

「この形態になると少し流星闘技メテオアーツが変わるんだよ。広域殲滅用にな」

《正宗・叢》に黒雷が纏われる。

「雷切・顎あぎと——！」

纏った黒雷がまるで生き物のように巨大な顎を模し、128体の擬形体の半分を根こそぎ狩りとった。

「懺悔の用意はいいか、外道」

刹那は鋭い眼光でサイラスを睨みつけた。

第5話 決着

「咲き誇れ、アンテリナム・マジエス呑竜の咬焰花！」

ユリスが細剣を振るった軌道に魔法陣が浮かび上がる。さらにそこから猛烈な熱波が迸ったかと思うと、その魔法陣を破るようにして巨大な焰の竜が出現した。

刹那が狩りとり損ねたもう半分の雑兵を焰の顎でまとめて噛み砕く。

「やるな、リースフェルト」

「奴を捕らえるぞ」

「わかった」

「これはこれは、大したものですね。序列五位と九位は伊達ではないということですか……！」

サイラスは距離を取ると、再びパチンと指を鳴らす。

「しかし、所詮は多勢に無勢！個々では敵いませんが、数では圧倒的に僕の方が勝ちです！」

竜の顎をかいくぐった人形が五体、再びユリスを囲むようにして襲い掛かった。

「くっ！」

ユリスは細剣を振るって応戦するが、その集中力は能力のコントロールへ割かれているためどうしても動きが鈍る。

「鳴神————」

刹那は《正宗・叢》を地面に突き立て、電撃を地面へと流す。ユリスの周りに五つの黒い点が地面から出現したと同時に、

「早蕨——」

黒い点が針状に変形し、五体の人形を串刺しにした。更に黒い電撃を流し込み、内部で爆散、拡散しその体は弾け飛んだ。

「危なかった」

地面から抜き取り、ユリスを見る。

「余計なことを……！」

皮肉を言われたが、ユリスの顔は全く迷惑そうな顔はしていなかった。

た。ユリスが僅かに口角を上げたのを見たと同時に、刹那も僅かに上げた。が、突如、物陰に隠れていた人形が手に持っていた剣型煌式武装でユリスに特攻する。

「っ!?リースフェルト、避けろ!」

「なにっ?ー!?!」

寸のところでも後ろに弾みを付けて後退するが、僅かにその刃は太股を掠めていった。だが後ろにも更にもう一体人形が隠れていた。無防備のユリスをガツチリ掴み、身動き取れないようにする。

「リースフェルト!」

刹那は助けに行こうとしたが、どこから湧いてきたのか更に十体近くに取り囲まれる。

「私のことはいい!お前は早くあいつを・・・!」

サイラスを一瞥するが全く余裕の笑みを崩さない。その笑みがまた焦燥感を煽り、刹那はまずは目の前の一体を薙ぎ払う。

「あなたの能力は強力ですが、ご自分の視界まで塞いでしまうのが難点ですね」

「ふん・・・流石によく観察しているじゃないか・・・!」

太股に感じる痛みに堪えながら、挑発的な笑みを見せる。

「だが、私にも一つわかったことがあるぞ」

「ほう、なんです?」

「貴様の背後にいるのはアルルカントだということだ」

その言葉に今まで笑みを崩さなかった顔から、消えた。

「その人形共、特別仕様だな?私やレスターの攻撃に耐えうるだけの装甲やをどこから調達した?ましてやその数を量産となれば、技術的に見ても他の学園では不可能だ」

「ふむ、ご明察ですが、これはいよいよもって見逃すわけにはいかなくなりませんでしたね」

「はっ、もともとそんなつもりなくせによく言う」

サイラスは無言のまま近づいてくると、ユリスの太股の傷を思いきり蹴りつけた。

「ああああああつ!」

遠くからユリスの絶叫が聞こえた。

「リースフェルトツ！……邪魔だ！雷鳴・彼岸桜！」ひがんぎくら

《正宗・叢》から発生した黒雷が鞭のように九体の人形を絡めとったまま上空で球体へと変化。瞬間、球体が刺々しくなり内部の人形を破壊する。刺々しい球体が消えると、上からバラバラになった残骸が幾つも辺りに散らばる。

「サイラス・ノーマンツ!!」

刹那は足に星辰力プラナーナを集中させ加速する。が、

「君にはまだ大人しくしていてももらいます」

再度パチンと指を鳴らすとぞろぞろと人形が湧いてくる。

(これ程の数、いつの間に……!)

「くく、すぐにはしません。まずはあなたのその体を堪能してから終わらせるのも悪くありませんねえ」

「この下郎め……!」

舐めまわすようにユリスの体軀を眺める。サイラスが手を上げると、隣にいた人形が動き出した。ユリスの制服を脱がすため手にかけてようとする。ユリスは思わず目を瞑る。

「ごめん、遅くなった」

服に手をかけようとしていたその手は、吹き飛び、ユリスを拘束していた人形も一閃。ユリスをお姫様抱っこしその場から跳躍する。

風が疾った。優しく、心地よい、それでいて力強い風。誰かと目を開ければそこには、あの少年の顔が目の前にあった。その右手には純白の大剣。

「あや、と……」

「ごめん、ユリス。遅くなって」

「遅いぞ、綾斗」

「ごめんごめん、刹那。ユリスとレスターは僕が守るから刹那は存分に暴れなよ！」

その言葉に刹那はニヤリと笑った。やはり力をセーブしながら戦うのは難しい。《蝕武祭》エクリプスなら本気を出せるのだが、サイラスのような二流、いや三流如きに本気を出してしまったら彼が死んでしまう。だ

が、もうその必要は無くなった。なぜなら、許しが出たのだから――

「いやはや、まったく思わぬ飛び込みゲストですね――天霧綾斗くん」

その声に意識と視線を戻せば、サイラスが芝居がかった仕草で肩を竦めていた。相変わらず余裕たっぷり、一瞬のうちに人形が二体も片付けられたのに微塵も動揺していない。

「今のが《黒焔の魔剣》の力ですか……なるほど、確かに少しばかり厄介ですね」

《黒焔の魔剣》セルベレスタといえはユリスも聞いたことがある。星導館学園が誇る純星煌式武装オーガルククスの中でも、トップクラスに強力な能力を秘めた剣だったはず。純白の刀身が眩しく光る大剣だが、綾斗はそれを片手で構えている。

「しかし使い手が二流では折角の純星煌式武装オーガルククスも宝の持ち腐れというものです。綾斗くん、あなたの闘いぶりは何度か拝見しましたが、正直言つてこの学園では凡庸の域を出ません。今は不意打ちが上手くきいたようですが、百体を超える僕の人形たちを相手に何ができると――」

「――黙れ。不意打ちしか出来ないのはあなただろう、サイラス・ノーマン。それにあなたの相手は俺じゃない」

「じゃあ一体誰が僕の相手を？」

「俺がしてやるよ、三流ゲス野郎が」

「え――――ぼふあつ!?!」

一瞬にしてサイラスの横に移動した刹那に思いきり頬を殴り飛ばされる。かなりの距離を飛び、壁に激突した。

「痛い痛い!?!」

「もう終わりか、サイラス・ノーマン」

冷たい目でサイラスを見下ろす。

「く、くはははは! 良いでしょう、もう余興は終わりです! 四人諸共朽ち果てるがいい!」

更に人形がどこからともなく湧き上がる。今まで乱雑に並んでい

た人形たちは整然と隊列を組み始める。前衛は槍や戦斧といった長柄武器、後衛は銃やクロスボウ、その間に剣や手斧を持った人形が埋め、その最後列にサイラスが鎮座した。

「これぞ我が《無慈悲なる軍団》の精髓！一個中隊にも等しいその破壊力、凌げるものなら凌いでみせろ！」

腫れた頬の顔でそんなことを言われてもはつきり言っつて締りが無い。前衛の人形たちが猛然と突っ込んでくる。

「雷切・顎！」

《正宗・叢》に黒雷を纏わせ一閃。斬撃と同時に猛獣の顎あぎとと化した黒雷が噛み砕いては破壊していく。

「ふ、ふふふ………なかなかやりますね……！」

「うん、今ので大体わかったよ」

刹那の後ろでユリスを支えながら綾斗は呟いた。

「彼の能力で個別に動かせる人形はせいぜい六種類つてとこかな」

を、サイラスに聞こえるように大きな声で言った。

「はあ？」

サイラスの眉が怪訝そうに寄る。

「全く、何を言い出すかと思えば……一体どこに目をつけているのですか？現に僕はこうして百体以上の人形を……」

「見ればわかるよ。完全に自由に動いているのは六種類。あとはある程度パターン化した動きしかしてない。そもそも十六体ぐらいまでかな。残りは全部同じように引き金を引いたり腕を降ったりといった単純な動きをしているだけ」

「……！」

「ハツタリにはいいかもしれないけど、あなたが不意打ちできない理由もよく分かったよ。こんなお粗末な能力、普通に闘えばネタが割れてしまうだろうからね」

サイラスは弾かれるように刹那を見る。その顔は「その通りだ」と言うかのように口角を僅かに上げていた。サイラスの顔は青ざめ、小刻みに震えている。それは綾斗の言葉が真実だと如実に表していた。「ん？ああ、そうか。六種類十六体つてことは、ひよつとしてチエスの

イメージなのか。まあ、ゲームプレイヤーを気取っていたのかもしれないけどーあまり腕がいいとは言えないね」

「『轟遠の烈斧』^{フォルネコロス}が言った通り、とんだ食わせ者だな。本当にチンケな能力だ」

「クソがあああああああああ!!」

一転して顔を真っ赤にしたサイラスが吠えた。

「潰れるツ！潰れてしまえツ！」

「刹那……！」

「大丈夫だ、リースフェルト。しっかり見ている、これが『閃光』の剣舞だ」

前衛の人形たちが襲い掛かってくるが、野太刀の『正宗・叢』で一気に両断。雲霞の如き人形の群れの中を一人の少年が漆黒の軌跡を残しながら舞う。流星闘技^{メテオアーツ}を使わない、ただの剣技で圧倒していく。その姿はまるで天女のように美しく、あらゆる者を薙ぎ倒すほど雄々しかった。

「こんな木偶で俺を仕留めれると思ったか？」

全ての人形を薙ぎ払い、断ち切り、木っ端微塵にし、野太刀をサイラスへと向ける。人形に攻撃する暇さえ与えない圧倒的剣戟。戦闘開始から、二分とかがかっていない。たったそれだけで、百体を超えるサイラスの人形たちを一体残らず切り伏せた。対レスター用に用意された重量型も、対ユリス用に耐熱処理を施された黒い人形たちも外形を留めているものあれば、留めていないもの地面に転がっていた。「馬鹿な……こんな馬鹿なことが……あ、ありえない……ありえるはずがない……」

その光景を見ていたサイラスはあさましく茫然自失といった有様だったが、刹那がその野太刀をむけると悲鳴を上げて尻餅をついた。

「もう終いか？」

「ま、まだだ！僕にはまだ奥の手がある！」

サイラスは腰砕けになりながらも大きく腕を振った。すると背後にあった瓦礫の山が吹き飛び、中から巨大な人影が姿を現す。他の人形より五倍はあるだろうか。吹き抜けがなければ天井を突き抜けて

しまいそうなら大ききだ。腕も足もこの廃ビルの柱くらいはあるだろう。まさしくゴレムと呼ぶにふさわしい。

「は、ははは！ さあ、僕のクイーン！ やってしまえ！」

サイラスの命令に従い、巨体に似つかわぬ素早い動きで刹那に襲いかかる。

「ふうー、あまりこの技は使いたくなかったが、仕方がないな」

突如、刹那から膨大な量の星辰力プラナーナが膨れ上がる。それは徐々に収束、最後はまた刹那へと戻っていった。すぐに変化は訪れた。次第に刹那の体から黒雷が迸り出す。髪は徐々に逆立ち、黒雷もバチバチと激しさを増す。そして、開かれた目には元の黒い瞳の中に真っ赤な輪が浮かび上がっていた。

「身体能力を倍加させる流星闘技メテオアーツ———建御黒雷神タケミカヅチ」

巨大な拳が圧殺せんと迫る。《正宗・叢》を両手で構え、突きの構えをとる。

周囲には黒雷の球が出現、それは徐々に姿を変え無数の顎あごへと変貌した。

「喰い荒らせ、雷槍・連門顎れんもんあぎと———」

高速の突きと同時に無数の顎は巨大な拳へと特攻する。拳を食い破り、突きで穴を穿つ。たった数回の突きで腕は崩壊したが、勢いは止まらず今度はその巨軀へと狙いを定めた。無数の顎に挟られ、突きにより無数の穴が穿たれていく。そして、突きが止むとその巨体は地響きを上げて倒れた。

「うわああああああ!!!」

自暴自棄に陥ったのか、人形の残骸を浮かせ刹那に投げつける。

「歩法ぜつえい———絶影ぜつえい」

刹那は影を絶つほどの速さで移動する。移動した後には影が残り、しばらくの間はそこに留まり、それ自体が質量を持つ。建御黒雷神タケミカヅチ発動中のみに限定されるが、目くらましや攪乱にはかなり役に立つ。投げつけられた残骸を軽くあしらう。

「逃げても無駄だ。《閃理眼》ですぐにお前の居場所を特定できる」

ゆつくりとサイラスと距離を詰めていく。

「ひ、ひいー!」

転がるようにしながら、半泣きの顔で人形の残骸の中を逃げ惑うサイラス。

「――」

無言で見えていたが、ふいにその眉が険しくなる。とつきに行こうとしたがそれよりサイラスの方が遥かに早かった。人形の残骸にすがりついたサイラスの体がふわりと浮いたのだ。正確に言えば浮いたのは人形の残骸のほうなのだが、この際そう変わらないだろう。そのまま一気に速度を上げ、吹き抜けを上っていく。

「逃がすか」

「刹那」

「すぐに終わらせる。三人は待っていてくれ」

刹那は吹き抜けをジグザグに高速で上っていく。既にサイラスは最上階に到達しており、暗雲が覆う空へと躍り出ていた。

「逃がさないと言ったはずだ」

「――!?!」

サイラスの顔が恐怖に染まっていく。

「まさか、自分から外に出てくれるとはな」

《正宗・叢》を掲げ、天へ向かって黒雷放った。数秒の間、それは巨大すぎる龍の姿で顔を出しす。恐怖がサイラスを支配していく。

「あ、ああ、あああ……!」

「今度こそ、終わりだ。懺悔の用意はいいな?」

「や、やめ、やめろおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

「往生しろ。麒麟きりん・獄門ごくもんあざと顎あご――!!」

龍の顔が変形し、巨大な顎へと変貌した。《正宗・叢》を振り下ろすと同時にその巨大すぎる漆黒の顎はサイラスもろ共周辺の建物を飲み込んだ。地面が割れんばかりに唸り、落雷の轟音が鳴り響き、轟く。漆黒の雷の柱が再開発エリアの一角にそびえ立った――

「――」

綾斗とユリス、レスターが外に出ると暗雲は晴れ、雲の隙間から太陽の光が差し込む。そして遠くから一人の少年が歩いてきた。

「終わったぞ、あとは生徒会に任せよう」

「お疲れ、刹那」

「さすがに疲れた。あれは奥の手だからな、早速お前達にはバレたが」
「そう言い、綾斗に支えられているユリスに目を向ける。」

「大丈夫か？」

「ああ……すまん、他人のお前を巻き込んでしまった」

「気にするな、大切な仲間のためだ。いくらでも体を張る」

「本当に、変わったやつだな、お前は」

「おい、刹那」

ふいにレスターに声をかけられた。

「サイラスを止めてくれて礼を言う」

「気にするな。あ、そうだ」

そつとレスターに手を差し出した。

「何時でも挑戦待ってるぞ」

「……ふっ、ぬかせ。すぐにてめえを叩きのめしてやる」

そう言いながらニヤツと笑い、その手をガツチリ握った。

第6話 事後の日常

「痛っー!」

「全く、無茶するからですよ?」

現在刹那とユリスはクローディアに手当をしてもらっている。幸い切り口は浅く、包帯を巻くだけで済んだ。それでもしばらくは安静が必要だが。

「刹那もです」

ちよんと腕を突くと、声にならない悲鳴を上げピクピクと痙攣した。

「お、お前ってやつは……!」

涙目になりながらクローディアを睨むが全く効果なし。ニコニコ笑みを浮かべていた。

「あなたの建御黒雷神あは自分の体に負担をかけるのでしよう?」

「わかっているのなら、俺の体に触るな! バカ女……!」

その言葉にムツときたのか、今度は太股を思いきり叩いた。

「~~~~~ツツ!!??」

「バカはどちらですか」

(何だかんだ言ってる割には仲良いな。コイツら)

ユリスはそんな光景を微笑ましく思う反面、どこか羨ましいような感情が押し寄せてくる。

「と、とにかくだな。リースフェルトが無事で何よりだ」

「ええ、心配しましたが、無事で何よりです」

「ああ。私は助けられてばかりだな」

俯きながら言うリースフェルトの頭に手を乗せ、少し乱暴に撫でた。呆けた顔のリースフェルトを見て僅かに微笑えむ。

「気にするな、いつでも頼れ。力になる」

その顔に一瞬見惚れたが、すぐにパツとそっぽを向く。その顔は真っ赤に赤かった。

「?」

「あらあら、ユリスも若いですね」

「か、からかうのはよせ！クローディア！」

「そういう会長も若いぞ？」

「お前は意味をわからず使うな！」

そう言っただけで立ち上がり、クローディアの頭も撫でた。

「職務も大切だが、たまには休息を取れ。顔色、初めてあった時より優れていないように見える」

いつもは無表情でバツバツバツサ酷いこと言うのにこういう時だけ優しくなるのはいささかずるいと思う。改めて近くで見ると背も高いし、人形みたく整った顔。変に意識してしまい、クローディアもユリス同様、赤くなり俯いてしまった。

「ん？どうした、会長」

「い、いえ……！」

（自分は触られたくないって言ったのに自分から人に触るなんて、何なんですか、あなたは！）

そんな悪態をついたが、どこか嬉しくも思えた。刹那に自分という存在がやつと認識されたかのように思えたのだ。

「————」

「……あの、刹那？どうして私の顔を……？」

《〈閃理眼〉》

刹那の瞳が僅かに黄色を帯びる。クローディアから発せられている電磁波を読み取り、記憶を探る。そして一つ見つけたかと思うと、（な、なんだこれは……会長は毎夜こんな夢を……!?）この見続けたら狂うぞ！）

それは自分の死に様を毎夜夢として体感しているというものだった。

（これは……会長の持つ純星煌式武装オーガルククスの「代償」とやらなのか……？）

そこで《〈閃理眼〉》を切り、改めてクローディアを見ると、

「……なんだ？」

顔色があまり優れない理由は睡眠にあると踏んだ刹那は《〈閃理眼〉》を使い改善点でも述べようかと思っただけが、全く別なものを視てし

まったく、何やらユリスの視線が痛いし、クローディアはポーツとした表情で自分を見るし。

「会長、しっかりしろ」

「ふあ……!!?」

ハツと我に返ったのはいいのだが、変な声が聞こえた。まあ、聞かなかったことにしておこう。

「と、ところでな刹那」

おもむろに話かけられ、顔をユリスへと向ける。

「その、だな……もう見つけたのか?」

「何をだ?」

「《鳳凰星武祭》のパートナーのことなのだが……」

「いや、まだだ。そろそろ締切が近いんだったな」

「そ、そうか……!な、なら、私とー」

「あら、抜け駆けは頂けませんねユリス」

「……クローディア、まさか、お前も出るのではあるまいな……」

「あら?私が出てはいけないというルールはありませんよ?」

火花を散らし合う二人を見て刹那は小さくため息をついた。なぜこうもいがみ合うのだろうか。(ほぼほぼ君が関わってるんだだけだね)

「あ、いたいた」

保健室に今度は綾斗が入ってきた。

「どうした?」

「《鳳凰星武祭》のパートナーは刹那は決まった?」

「いや、まだだ」

「そうなのかい?実は俺もなんだ。良かったら一緒に出ない?」

「ああ、俺は別に構わー」

言い終わる前に腕と足を同時に思い切り叩かれ、すぐさま悶絶。

「綾斗、一体どういう見だ?」

「いや、俺はただ刹那にパートナーの申し込みを……」

「ライバルが多すぎますね……」

「おーっす、刹那。《鳳凰星武祭》のパートナーになってくれ」

今度は紗夜も参戦し、いよいよ凄いことになりそうな予感がする。

「さーさーみーやー！貴様もか！」

「どうして！あなたはこう！女の子を次から次へと！連れて来るのですか！」

怒声を上げるユリスに刹那の制服の襟を持ち、揺するクローディア。そんな光景を見て苦笑いする綾斗にいまい状況が掴めない紗夜。そして、もうどうにでもなれ、と投げやりな顔の刹那を含む五人はしばらく保健室に籠もり、その後教師陣に説教されたことはここだけの話。

「ところで、ユリスは純星煌式武装の適合率検査は受けないの？」

綾斗のおもむろに発せられた言葉にユリスは少し考えた素振りを見せた。

「ふむ……今は受ける気はないな。そもそも《魔女》や《魔術師》が純星煌式武装の所有者として認められたケースは稀すぎるほどだ。アスタリスクの歴史の中でも十人に満たないと聞いている」「じゃあ刹那はかなり珍しいってこと？」

「そうなるな、しかも適合率が100%だったのだろうか。《正宗》の能力を最大限で行使できる唯一の所有者である証拠だ。あの野太刀型の《正宗・叢》も刹那だからこそ成し得るもののはずだ」

「相変わらずめちやくちやくちやっていか、なんていうか」

「めちやくちやくちやという範疇では収まらないだろう。最早、奴の領域は規格外だ。流星闘技を連発出来るほどの圧倒的星辰力の量、おまけにあの《蝕武祭》優勝経験あり。化け物だ」

(あいつなら、オーフェリアを止めることも……)

一瞬白い髪の少女が頭を過ぎり、自然と顔が曇る。

「刹那は《竜王星武祭》《リンドブルス》にも出るのか？」

「まあ、一度は出てみたい。あの《孤毒の魔女》とも一度手合わせしてみたい」

目の前を歩く少年に目を向ける。紗夜の隣を歩く少年の横顔を見て、嫌なことを思い出した。

『ユリス、あなたの運命では私を止めることは出来ないわ』

昔、親友のはずだった彼女から突きつけられた言葉だった。

「ん？あれは誰だ？」

刹那が指を指すを見れば、ビルのディスプレイに美しい少女が映っていた。

「ああ、あれはクインヴェール女学園の生徒会長、シルヴィア・リユーネハイム。世界最高の歌姫って言われてる人だよ」

「学生なのに歌手なのか？」

「たいした人だよね、トップアイドルなんてさ」

綾斗の説明にもう一度ディスプレイに目を向けた。

「そうたいした奴には見えないが。決闘した場合三分あればもしくは——」

ビシツと後ろから頭をチョップされた。

「お前はすぐに勝負で考えるのをやめろ」

「すまない。しかし——」

「ん？どうした？」

シルヴィアの映像とユリスを交互に見ながら真剣な顔で口を開いた。

「やはり女性の体の格差は如実に表れるものだと思ってな」

「——」

ビシツ

その場の空気が一瞬にして凍りついた。これだけは言っておこう。

彼は決して下心や悪気があった訳ではない。少しばかり、そう。知識や常識がないだけなのだ。

「せ、刹那……」

「おい、どうしたんだみんな。何を固まっている」

「こ、この……」

ユリスが纏うオーラが何やら陽炎みたくユラユラ揺れ始める。

「な、何を怒っているんだ……」

「この……！」

「ま、待て！リースフェルト……！」

後ずさりするがとうとう壁に追い詰められ、

「この、痴れ者がああああ!!」

ビンタではなくパンチで刹那は窓ガラスを割り、宙を飛んだ。

「—————」

「おいこらてめえ、刹那。学園の窓ガラス割るたあどういうことだあ？聞いてやるから言ってみろ」

「寝ぼけてまして」

「ほお、寝ぼけてか。そうかそうか……ふざけんな！」

頬にパンチを貰った次は頭に拳骨を貰ってしまった。

八津崎匡子、刹那達の担任である。元レヴオルフ出身ってこともあり、言動や気性は荒い。が、全盛期は《獅鷲^グ星武祭^プ》の優勝経験がある実力者だ。

「少しばかり痛いです……先生」

「優しくなんかしねえぞ」

職員室で盛大な説教くらった刹那を見る目は少し痛い。

「ま、だがそんなくらいが丁度いいな」

「先生も、学生時はよくこういうことを？」

「おうよ、よくしたもんさ」

（やっぱりな……）

なぜか納得できる。

「てめえにはあたしも期待してんだ」

胸の当たりを、先程の拳骨とは違いぼんつと叩かれた。その顔は少し微笑んでいた。滅多に見れない超レアな表情かもしれない。

《星武祭^{フェスタ}》の制覇、頑張れよ」

「もちろんです」

それから始末書を書いて先生による説教は幕を閉じた。

放課後になり、寮に戻る途中。騒ぎは起こった。

「見つけたぜ！序列九位！」

「なんだ？」

声をした方を振り向けば、十五人の集団がニヤニヤしながら立っていた。

「なんか用か？」

「決闘、やろうや」

「……」
「ったく、刹那のやつ。どこに行った」

ユリスは苛立ちながらも刹那を探すが、外に人溜まりが出来ていた。しかも、ライブ中継までされている。

「序列上位と誰かが決闘しているのか？」

「急いで外へと向かった。」

「うおりやあああ！」

「よっ」

斧型の煌式武装ルークスの振り下ろしを難なく躲す。

「せやつ」

それから一回転し、先程攻撃した生徒の懐に入り回転の勢いをつけて裏拳をかました。思っきり吹っ飛び意識不明にする。

「すごい、煌式武装無しであそこまで出来るなんて」

「やっぱり刹那くん、かつこいいよね」

「ちくしよお！」

今度は刀型の煌式武装ルークスを持った生徒が突っ込んでくる。煌式武装ルークスを持った手を弾き、無防備の腹にそつと手を置いた。

「星辰力ブラーナはこういう使い方も出来る」

「えー……？」

まるで何かに吹き飛ばされるようにその体は後方へ吹き飛ばされた。地面さえ抉れる程の速さだった。

「ふう、次は？」

「まだまだあ！お前らやつちまえ！」

「おー、これはこれは」

残りの生徒が遠距離型の煌式武装ルークスを刹那めがけ乱射した。

「避けるのは厳しいな、打ち落とすか」

ポシエットから煌式武装ルークスの発動体を取り出し、起動。青く光る刀身が再構築された。重さだけを《正宗》と同じくらいに調整してあるため、まあまあ使いやすくなっている。光の矢が自分の目の前に来た

のと同時に煌式^{ルークス}武装で打ち落とす。それを全ての矢を切っては打ち落とすを繰り返す。

「マジかよ……」

数秒も経たないうちに彼の足下には光の矢が全て散らばっていた。

「いくら速く見える光の矢も、実弾よりは遅いからな」

「実弾って……」

チラツと見れば大半の人は戦意喪失といった感じだ。

「はあ、参ったぜ。降参」

「そうか」

『^{エンド・オブ・デューエル} 決闘終了 勝者 ^{ウイナー} 神木刹那』

機械音声のアナウンスで校章が光を失った。

「やっぱり強えな、お前は」

「そんなことない、あんたも《^{フェスタ}星武祭》に出るのか？」

「まあな、当たった時はお手柔らかに頼むぜ」

それから短い会話を交わし、少年は帰っていった。いきなりふっかけられた決闘だが、大きな怪我もなく無事？に終わったのでよかった。ギャラリーの野次馬たちも各々にその場を去っていく。

「さて俺も帰るか」

発動体をポシエツトにしまい、歩き出そうと足を踏み出した瞬間、脹脛が攣ったかのような痛みを出し始めた。

「っー、あの技の反動は中々取れないからな……」

こうなってはしばらく歩くことは出来ない。どうしたものかと悩んでいると、視界の隅に薔薇色の髪を風にたなびかせた美しい少女が入る。

「見つけたぞ！」

「リースフェルトか」

「反動が取れないうちは決闘するなどあれほど口を酸っぱくして言ったのにお前という奴は！戦闘狂なのか!？」

「別に戦闘狂というわけでは……」

「じゃあ何なのだ！狂戦士か!？」

「狂戦士か……かっこいいな」

「褒めていない！」

「またもや制服の襟を掴まれ前後に揺さぶられる。軽い脳震盪でも起こしそうだ。クロードディアの時もそうだが、女という生き物は遠慮を知らないらしい。」

「あ、あのおく………」

「貴様というやつはいつもそうだ！自分のことより決闘の方が大事なのか!？」

「く、苦し………」

「あ、あのお………」

「!？」

「やつと張り上げた声で目の前で言い争っている人たちはこつちを向いた。ツーサイドアップの銀髪と、年齢に似合わぬ均整の取れた体。そして肩に背負っているのは身長より少し短めの長物。刹那は物珍しい顔で見て、ユリスは襟をすぐに離し、後ずさった。」

「あの、これ落としませんでしたか………」

「少女から差し出されたのはメガネであった。刹那はポシエツトを探るがいつも持ち歩いているメガネが無いことに気づいた。」

「どこかで落とししたのか。すまないな」

「い、いえ………」

「物凄く人見知りなのか気弱なのか、一つ一つの挙動が小動物みみたいだ。」

「で、では私はこれで………」

「そう言い残しそそくさと駆けて行った。途中で何も無いところで転んで、カエルの潰れた「むきゅつ」という声と共に白いパンツが見えたことは、見なかったことにしよう。」

「中等部の生徒か。ん?」

「下を見れば生徒手帳らしき物が落ちていた。」

「刀藤綺凜とうとうきりんって読むのか?」

「そうだ」

「ユリスが険しい顔をして刹那の隣に立った。」

「刀藤綺凜、星導館学園の序列一位だ」

「《疾風迅雷》って、彼女のことか」

それにしてはあまり威厳のようなものが感じられなかったが。

「中等部って、あんなに体の発育は著しいものなのか？」

隣に目を向けると自然と顔ではなく下の方に行ってしまった。

「やはり、格差とは何にでもあるものだな」

「き、貴様というやつは……！」

もう一度言おう、決して悪気や下心は全くないので尚更夕チが悪い。

「お、足も大分良くなった。帰るか」

軽くつま先をトントンし、ユリスを見たのだが、

「もう知らん！貴様などそこらでのたれ死ね！」

「何を怒っている」

「うるさい！話しかけるな！」

「お、おい、そんな早歩きしないでくれ。まだ足がー」

「知るか！」

このやり取りをしながら帰路を歩いていく二人。中々こちらも仲がよろしいようだ。

EX 設定

主人公設定

神木 刹那

：身長 176cm

：血液型 O型

：誕生日 11月25日

：所属 星導館学園1年

：序列 星導館学園9位

：純星煌式武装 正宗

：二つ名 閃光

概要

本作の主人公。黒い髪に黒い瞳が特徴的な美少年に分類される少年。クローディアから特待生枠での転入を斡旋され、姉の足跡を辿るようにこの学園に入学する。ほとんど表情を変えないが、身内や仲間には時折笑顔を見せる。高い戦闘能力と綾人に勝るとも劣らない膨大な星辰力を駆使した戦闘スタイルで、主に正宗を駆使して戦う。姉の情報を得るため《蝕武祭》に参加し三度も優勝している。それ以降、亡き父と母の約束である「姉を助ける」という望みのためグラウンドスラムに全星武祭制覇を目指す。正宗との適合率はほぼ100%と規格外の数値をたたき出している。ちなみに人の名前を覚えるのは苦手。観察眼もずば抜けており、非合法の《蝕武祭》での経験も相まって実弾より遅い高速攻撃は全て叩き落とすなど、卓越した技術も持ち合わせている。女心を理解していない故の発言が多々目立つが、それは生きてきた環境が故にである。

純星煌式武装 《正宗》

刹那が使用する刀型の純星煌式武装。代償は不明。刹那が使用することで初めて真価を発揮する特異な武器。また、野太刀型の《正宗・叢》へと任意で形状移行ソフトチェンジすることが出来る。元々は統合企業財体「銀河」が所有していたのを、刹那の父と母が奪還しそのまま刹那の手へと渡った。「銀河」はこの《正宗》が「神器」イノセンスの一つなのではと考

えており、現在も搜索中。

新設定

この世界には「神器」^{イノセンス}という分類に区分される純星煌式武装が七つ存在する。神話上の空想話かと思われていたが近年、四つが判明されたが所在は未だに不明。そのどれもが「天使が持てば世界を救い、悪魔が持てば世界を滅ぼす」と言われる程の強力な力を持っている。純星煌式武装自身に「意思」があり、認めた使い手以外は触れることも出来ないと言われている。共通して全ての「神器」はウルム・マナダイトから金色のオーラを放つ模様。

判明している神器^{イノセンス}

刀型神器^{イノセンス}

《真刀・神威》※ 所在不明

剣型神器^{イノセンス}

《金繆の神劍》※ 所在不明

細剣型神器^{イノセンス}

《アクセラレータ・ノヴァ》※ 所在不明

槍型神器^{イノセンス}

《必中射殺の神槍》※ 所在不明

第7話 六花園会議

アスタリスクの中央区、商業エリアが接するあたりのホテル・エルナトと呼ばれる超高層ビルがある。各国のVIPや著名人が利用するホテルだが、なによりも名高いのがその最上階に広がるドーム型の空中庭園だ。しかし、縦横に水路が張り巡らされ、四季折々の花々が咲き乱れるこの庭園へ、実際に足を踏み入れた事がある者はそう多くはない。このホテルに宿泊するような階層の人間でも、例えそれが統合企業財体の幹部であろうとも、無許可に立ち入ることは許されていないからだ。

ここは一ヶ月に一度、極めて限られた人間が集う為に造られた聖域であり、その扉を開く資格を持つものは世界でたった六人のみ。

——すなわち、アスタリスクにおける六つの学園の生徒会長である。

「ごきげんよう、皆様。お元気そうでなによりです」

庭園の中央部、周囲を軽く見渡せる程度に小高く盛られた丘の上に、ぽつんと設えてある洋風の四阿。そこにはアスタリスクをそのまま縮小したかのような六角形のテーブルが備えてあり、六つの椅子のうち四つが埋まっていた。優雅な仕草で一礼した少女——クロロディアは、いつものように優しく微笑んでその五つ目を埋める。

「ようこそ、ミス・エンフィールド。相変わらず時間通りだね」

柔らかな笑顔でクロロディアを迎えたのは、左側の席の貴公子然とした青年。整った顔立ちといい、癖のない淡い金色の髪といい、かなりの美男子と言ってもいい。落ち着いた物腰で、仕草の一つ一つが洗練されている。青年の顔に浮かぶ薄い微笑は一見すると穏やかそうに見えたが、しかしそれはクロロディアの顔に浮かぶ笑みと同種類のものと彼は一瞬にして見抜いた。

「ところで、ミス・エンフィールド。君が連れを連れてくるなんて珍しいね」

「ああ、彼は私のボディガードです。最近何かと物騒なので」「なるほど」

クローディアはそつと視線を半歩後ろで控えているサングラスを
した彼に送る。

(大丈夫、バレてませんよ)

(了解、任務を続行する)

ボデイガード、神木刹那はほんの僅かに首を縦に動かした。服装は
黒のスーツを着崩しサングラスという何ともガラの悪い格好。

青年は刹那にも笑みを送り、軽く会釈する。白を基調とした清廉な
聖ガラードワース学園の制服が、まるでこの青年のために誂えられた
かのように似合っている。

「さて、それじゃ全員揃ったようだし始めようか。皆、時間に余裕があ
る身では無いわけだしね」

金髪の青年はそう言うと言間ウィンドウを展開させた。六つの学
園の生徒会長によるこの定例会議は、舞台となる庭園の名を取って俗
に『六花園会議』と呼ばれている。

表向きは六学園の友好関係を維持し、お互いの発展と《星武祭》^{フェスタ}の
円滑な開催を目的に意見を集約する場であるとされるが、その実態は
互いの腹を探り合う政治的なパワーゲームの舞台となっている。な
お、その進行役は前シーズン総合成績一位の代表者が担う事になっ
ている。

「あら、ですが……」

クローディアはまだ空席である右隣の席を見た。クインヴェール
女学園の生徒会長が座っているべきはずのそこは空席のままだった。

「ああ、彼女は確か欧州ツアーの真つ最中じゃなかったかな。例に
よって委任状を預かっているよ」

「そうでしたか。流石は世界の歌姫様、お忙しいようですね」

「はっ、どうせいでもいなくても変わりやしねーだろ、あんな小娘」

不愉快そうに鼻を鳴らしたのは、金髪の青年の向かいに座る青年。
色のくすんだ赤髪で、背は低く小太り。目ばかりが大きくギラギラし
ている。

(コイツは確かレヴォルフの現生徒会長、《悪辣の王》^{タイラント}だったか)

ふんぞり返って腕を組み、いかにも不機嫌そうに顔を歪めている

が、これはいつもの事らしく、少なくともクロードイアでさえも彼が笑った顔は見たことがないらしい。レヴォルフの制服はタダでさえ威圧感があるのだが、青年の纏う禍々しい雰囲気は更にそれを増しているようだ。

「この場で他学園の代表を侮辱するような発言は慎んでもらえるかな、双剣の総代」

金髪の青年は困ったように苦笑しながら、赤毛の青年を諫める。

「侮辱だあ？笑わせんな、んなこたあ周知の事実だろうがよ。そもそもクインヴェールの売女共に、まともな学園の管理なんざ出来んのか？あの小娘が生徒会長になってからこれで何回目の欠席だ？クソの役にもたつてねえじゃねえかよ」

「はあ……君は本当に口が悪いな。わかったからもうやめたまえよ」

金髪の青年は大きく溜息をついた。それでも赤毛の青年はふんぞり返ったまま、言葉が続ける。

「ま、見た目だけで選ばれたような愚図共の代表に、それ以上の事を求めるのも間違いつてもんだろうが……」

と、次の瞬間……赤毛の青年の喉元に純白の剣が付き付けられていた。

「やめたまえと言ったはずだよ？双剣の総代」

金髪の青年は穏やかな苦笑を浮かべたまま、片手でその剣を構えている。

刹那は思わず感嘆した。

（煌式武装をホルダーから抜き放ち、起動し、振り抜くまでの所作が恐ろしく速い……流石は《聖騎士》^{ペンドラゴン}と言ったところか）

「……ほほお？おもしれー。やってみるか、《聖騎士》殿？いいぜ、その瞬間ガードワースはおしまいだがな」

一方で赤毛の青年も顔色一つ変えず、更に挑発して見せた。確かに六花園会議の場で刃傷沙汰を起こしたとなれば、金髪の青年はおろかその所属学園もタダでは済まない。

「だろっね」

しかし金髪の青年はにつこり笑うと、躊躇なくその切っ先を押し込んだ。薄らと光を放つ純白の刀身が、あつさり赤毛の青年の首を貫く。――だ、

「ふん、子供騙しもいいところだな」

赤毛の青年はその短い首に刃を挟んだまま、つまらなそうに言った。見ればそこからは一滴も血が流れていない。

「ほほ、相も変わらずお主らは仲が良いのう。ようも毎回、飽きもせずそうじゃれ合えるものじゃ」

そこへ声を掛けたのは、金髪の青年の左隣にちよこんと座った少女だ。いや、少女というよりは、童女と言った方が正しいだろう。愛くるしい顔立ちに黒髪を蝶の羽のように丸く結わえ、あどけない笑みを浮かべている。しかしその立ち居振る舞いには、どこか老成された落ち着きさえ感じられる。その胸に煌めくのは、ジエロン界龍第七学院の校章『黄龍』。

「じゃが戯れもそのあたりにしておくが良いぞ、小僧ども。でないと儂も混ざりたくなってしまうからのう」

さも楽しそうに童女が言うのと、金髪の青年は二度目の溜息をついてその剣――聖ガラードワース学園が誇る純星煌式武装オーガルクス『白瀧の魔剣』を引き、赤毛の青年は舌打ちをして口を慎んだ。

「ふふ、公主の調停とあれば仕方ありませんね」

クローディアが口元を押さえながら笑うと、金髪の青年は大袈裟に肩をすくめる。

(あれが、《万有天羅》……)

赤毛の青年は忌々しそうに眉をひそめたが、両足を机に放り出すとその顔をクローディアへと向けた。

「そ、ういやあおもしろー噂を小耳に挟んだんだがな、クローディアよお」

真っ直ぐクローディアを睨みつけるその瞳は、狂犬のような無差別の攻撃性を感じさせる。

「星導館とアルルカントが新型煌式武装ルークスの共同開発に合意したって話なんだが、これはどういうこった？」

「へえ？」

「ほほう」

金髪の青年と童女も興味深そうにクローディアを見る。

「あら、流石と言いましょうか……随分耳がいいのですね」
「つてこたあ、本当なんだな？」

「確信があつたからこそ、ここで話題を出したのでしよう？」

クローディアは目を細めて再び口元を押さえた。この赤毛の青年はこうして卓を囲む者達の中で、最も抜け目がない。闘いの場でまみえるならば金髪の青年や童女の方が遥かに手強いのだが、こうした場において一番厄介なのが間違ひなく彼だった。なにしろレヴォルフ黒学院史上初めて、《星脈世代》^{ジェネステラ}ではない学生として生徒会長の座についたのだ。彼の武器は知略と策謀。力もカリスマも人望も品性も、およそ人の上に立つべき資格は何一つ持たないが、人を使い操ることにかけては彼の右に出る者はいない。正に、そちらに関して悪魔的な才を持つ青年だ。この世に存在する有り^と有らゆるものを、恐らくは自身をも嫌悪しきつっている憎悪の権化。

「ですが、その件はあくまで我が星導館学園とアルルカント・アカデミー間の話です。皆様とは関係ない話だとおもいますが」

「そうはいかねーな、女狐。学園同士の密約は星武憲章違反だ。^{ステラ・カルタ}他の学園がそんな抜け駆けを黙って見ていると思つたか？」

赤毛の青年はぐるりと卓を見回した。

「まあ、確かに奇妙ではあるね。細かい条件が分からないから何とも言えないけど、普通に考えればアルルカントにメリツトが無さすぎる」

金髪の青年は薄い笑みを浮かべたまま、静かに頷く。煌式武装^{ルークス}の技術に関してはアルルカントが頭一つどころか三つも抜けている。他の学園の手を借りる意味がない。

「そもそもにおいて、学園としての正規の煌式武装^{ルークス}開発施設を備えているのはアルルカントだけじゃろ？うちも含めて他の学園は全て統合企業財体から提供された物を使つておるのじゃからな」

「ええ、ですから今回はうちの技術者がアルルカントに出向して、共同

開発にあたることになります」

これには流石に驚いたのか、一同が目を丸くした。

「おいおい、それじゃ共同開発どころか最早一方的な技術提供じゃねーか」

「確かに。こう言つてはなんだけど、好き sadece 技術を盗んでくださいつて言つてるようなものだね、それは」

これには刹那も驚いたのか、静かに聞いている。

「アルルカントも太っ腹じゃのう」

それでもクローディアは笑みを崩さない。

「これは是非とも、もう片方のご当人に話を伺いたいもんだな。なあ、アルルカントさんよお？」

全員の視線が、クローディアの正面に座っている学生に集まる。

今まで一言も発言せずただただ恐縮したように座っている青年は、狼狽えるように首を振った。

「いや、僕は何も聞かされていないというか、承認サインをしただけで、その、はい。詳しいことはさっぱりでして……」

中肉中背、目は細く黒髪で、見るからにはぱつとしない風貌だ。気弱そうな眉は八の字に下がりっぱなしで、全体的に影が薄いというか、まず存在感があまり無い。とはいえ、その胸には叡智の象徴たるアルルカントの校章『昏梟』が、しっかりと煌めいている。

「聞いていないって………本当かい？」

「はあ………」

細めの青年は困ったようにぽりぽりと頭を搔く。

「いくらアルルカントといえど、それでは生徒会長としての立場があるまいて。大丈夫なのかえ？」

六つの学園はそれぞれ個性的な特徴を持つが、中でもアルルカントは構造的に異質な部分が多い。学生は研究開発を専門に行う研究クラスと、その研究成果を使って闘う実践クラスに分かれており、前者の方がヒエラルキーの上位に立っているのだ。更に研究クラスはそれぞれの分野ごとに派閥が分かれ、常に熾烈な勢力争いを繰り広げているらしい。この勢力争いは、自分の派閥の成果物を使った実践

クラスの学生が《星武祭》^{フエスタ}において、どれだけの成績を残せたかによって大きく変動していると、夜吹から聞いた。

つまりアルルカントにおける最高権力は必然的に最大派閥のトップが握る訳で、生徒会は派閥間の調整役程度としてしか機能していないのだという。要は体のいいお飾りだ。

「まあ、それはその……」

「皆さん何か勘違いしていらつしやる様ですが、これは密約でも何でもありません。我が星導館学園とアルルカント・アカデミーが取り交わした正式な提携です。いずれ内容の詳細も発表されますが、何でしたら今お見せしましょうか？」

合図を出すと、後ろにいたボディガードが懐から一枚の紙切れを取り出し、机の真ん中へと置いた。それは正式な提携を記した書面だった。

「あくまで対等の取引だつてーのか？」

「勿論です。我々はアルルカントの施設を借り受ける代わりに、研究開発費の七割を負担するのですから」

と、そこへ童女が何気ない口調で入ってくる。

「そうそう、星導館といえば先頃何やら学内で小さからぬ揉め事があったようじゃのう。わざわざ《影星》まで動かしたようじゃが、もしかして今回の件と何か関係でもあるのかの？」

(なに……?)

確かにサイラス・ノーマンに関してはクロードディアに任せた。その後の処遇も聞いた。しかし、《影星》を動かしたなどという情報は聞いていない。

「さて、何のことでしょう」

顔色一つ変えずけろりと答えるクロードディア。だが、もちろん無関係なはずもない。今回の共同開発合意は、言ってしまうえば先日の……サイラスが巻き起こした一件の落とし前だ。他学園の生徒を利用してその学園の生徒を襲わせるなど、それこそ明確な星武憲章違反である。公表すればアルルカントの処罰は免れないだろうし、学園の評判にも傷がつく。それだけは何としてでも避けなけ

ればならないが、それでは星導館こちらに旨味がない。そこでクロードイアはその一件を表沙汰にしない代わりに、アルルカントから実践的な技術提供という実益を引き出したのだ。

「ふん、腹黒女がいけしやあしやあと抜かしやがる。人に化けるのも上手けりや、他人を化かすのも上手いってか？」

赤毛の青年がふんぞり返りながら言い終わると同時に、今度は青い刀身の切っ先が付き付けられていた。

「……あん？」

「口を慎んで頂きたい、双剣の総代」

(せ、刹那!?)

「……」

その光景を静かに金髪の青年と童女は見ていた。

(一連の動作が速すぎる——中々の手練を懐に入れたね、ミス・エンフィールド)

(ほう、あの小僧……強いほう)

赤毛の青年は、スーツに身を包み、サングラスで目元を覆っている少年を睨む。

「先程も光輪の総代が仰られたはずだ、口を慎めと」

「だからなんだ」

「我が赤蓮の総代は多忙の身故、円滑な話し合いを所望したい。それでも尚話の折をくじくのであれば——ここで切らせてもらう。」

それに我が赤蓮の総代への侮辱、些か癪に障る所がある」

「ほお？」

赤毛の青年は目を釣り上げた。しかし、そこに金髪の青年が割って入った。

「そこまでだよ。確かに彼の言い分は最もだ。そういう事だ、双剣の総代」

「チツ」

「彼の代わりに僕から非礼を詫びさせて貰いたい、済まなかったね。君も剣を納めてくれるかい？」

「ご理解、感謝する」

そう言い、刹那は煌式武装をホルダーに納めた。

「では、この話はここまでというところで」

にっこりと微笑み、この話題を打ち切る。

「ふむ……確かに発表内容は吟味してからでも遅くはないだろうからね。うん、それじゃ改めて今日の案件だけドロー——」

ところが金髪の青年が仕切り直そうとしたところで、再び声が割って入った。

「あのお、すみません。ちよつといいでしょうか？」

「おや、今度はそちらか。なんだい？」

おずおずと手を挙げたのは、細めの青年だった。

「ええつとですね、実はその、急な話になりますが、今日の議題に挙げさせて頂きたい案件がありました」

「ほうほう、何事じゃ？」

一同の視線を受けて心なしか小さくなったように見えるの細めの青年は、しばらく周囲を見回してからおずおずと口を開いた。

「えー、皆さんにご提案させて頂きたいのは、アスタリスクにおける人工能の取り扱い及びその権利についてです」

「人工能だと？」

赤毛の青年は訝しげに眉を顰める。

「ええ、はい。昨今落星工学の発展により人工能の研究は大幅に進んでいます。遠からず、人間の自我に近いものを持った人工能が誕生するであろうことは疑いの余地がありません。ですが、おそらくそういった存在に対する法整備はこの国でもすぐには進まないでしょう。なにしろ僕達は《星脈世代》ジェネステラですらそうだったのですから。そこですら、余計なしがらみのない我々が、まずモデルケースのような形で彼らを受け入れる態勢を整えればと……」

「それはつまり、自我ともいえるものを持ちえた機械を、アスタリスクの学生として受け入れるということかい？人間と同様の権利を与えて」

どこか呆れ果てたような顔で金髪の青年は言った。

「はい、出来れば《星武祭》フェスタへの参加にも……」

「アホか、論外だ。討論する価値もねえ」

赤毛の青年も白けた表情で切って捨てる。

「てめーのところが機械を学生扱いするってのなら知ったこっちゃねーが、そいつらを《星武祭》^{フエスタ}に出そうってんなら話は別だぞ」

「そうですね。幾ら何でも無理がある提案だと思えます。少し考えただけでも問題が多すぎですから。例えば星武憲章^{ステラ・カルタ}の年齢規定はどうクリアするおつもりなのです？十三歳から二十二歳までという制限に当てはめるのであれば、彼らが参加する頃には旧式にも程があるようになってしまっているのでは？」

「第一自我の有無はどうやって判定するんだい？まずはその基準から整備しなければならぬんじゃないかな。まあ、確かに将来的には何らかの規定が必要になるとは思うけどね」

「なんじゃ、主ら皆反対か。つまらんのう」

ぷくーと頬を膨らませた童女は、腕組みをして一同を見回した。

「あん？界龍^{ジエロン}は賛成に回るってーのか？」

「無論じゃ。その方が面白いからの」

この黄龍の総代は、とにかく自由気ままだ。

学園の代表でありながら個人の意思を優先させ、自分の学園の利益は二の次なのだ。場が混乱し、状況が混沌とするのを楽しんでいるかのようにさえ見える。そんな彼女が生徒会長の座に立ち続けていられるのは、その圧倒的な戦闘能力があつてこそと言われている。

生徒会メンバーを選出する方法は学園ごとに異なるが、例えれば星導館では選挙が行われるし、レヴォルフでは序列一位が生徒会長の指名権を持つ。界龍^{ジエロン}はシンプルな学内トーナメント方式で採用していた。立候補者の中でも強い者が生徒会長となるのだ。それつまり六学園中最大の規模を誇る界龍^{ジエロン}で、誰一人彼女を止められる者がいないということを示していた。何にせよ、星導館、ガラードワース、レヴォルフは反対。一方で界龍^{ジエロン}が賛成の意向を示したものの、提案したアルルカントを含めて、こちらは二票。

「クインヴェールの委任状には、多数票に一票。よって反対は計四票。否決という事になるね」

「そうですか………残念です」

細めの青年はがくりと肩を落とした。しかし――

「でしたら………自我のある無しに拘らず、それらはあくまで武器として扱う、ということでもよろしいですね？」

俯きながら細めの青年が呟いたその言葉に、場の空気が僅かに張り詰めた。

「それは、どういうことかな？」

「だってそうでしょう？学生としての権利は与えない、自我の有無に拘らず機械としてみなす――先程皆さんがそう仰ったじやありませんか。それが例え人の形をしていたとしても機会は機械、つまり道具です。そして星武憲章ステラ・カルタには道具の――武器武装の使用に関して、形状でそれを制限するような項目はありません」

「………つまり自立型擬形体を武器として使おうってーのか？」
「ふむ。確かにそれを制限するような項目は星武憲章ステラ・カルタにもないのう」

それは当然だ。人間が操作する戦闘用擬形体ならともかく、単純作業しか出来ないような自動制御の擬形体を舞台に上げたところで、《星脈世代》ジュエネステラの相手になるはずもない。あつという間にスクラップだ。だが、もし――その擬形体に人間と同じような判断力を持たせることが出来たとしたらどうだろうか。

「なるほど、つまりここから本番ということですね」

クローディアはそう言って目を細めた。

「やれやれ、これから「神器」イノセンスの所在などに付いて話し合いもしないとならないのに………」

(イノセンス………?)

「では、そちらも並行して進めましょう」

「ふう………わかったよ、これは本腰を入れて話し合う必要がありそうだね」

金髪の青年が三度目の溜息混じりにそう言うと、細めの青年は恭しく頭を下げてそれに答えた。

「ありがとうございます。これで僕も怒られずに済みそうですよ」

刹那はその後の話し合い、そして、「神器」イノセンスと呼ばれる純星煌式武装オーガルクス

について静かに聞いていた。

第8話 小さな嘘と

アスタリスクの中央区から星導館へと続く一本の舗装された道路を一つのバイクが走り抜ける。

「せ、刹那!? もう少しスピードを……!」

「まさか、会長はバイクに乗ったことがないのか?」

運転しているスーツに身を包みサングラスの少年、神木刹那は後ろで自分にしがみつく少女に声をかけた。

「は、はい! ずっと、車の移動でしたので……! きやあつ!」

吹き抜ける風で暴れるスカートを何とか押さえている姿は、いつも余裕のある笑みを浮かべている彼女とはまた違う姿だった。

「しかし、サイラス・ノーマンでの一件。何か妙だと思わないか? あれから奴とは顔を合わせない。本当に大丈夫なのか?」

「え、ええ。私もすぐ風紀委員に任せただけで詳しいことは分かりませんが……おそらく大丈夫かと」

「そうか、ならいいんだ」

(うそ……私はあなたに嘘をつきました……)
クロードディアは逡巡した。

—————

サイラス・ノーマンは足を引きずるようにしながら、再開発エリアの路地裏を必死で逃げていた。人形たちの残骸を掻き集め、麒麟・獄門顎の直撃は免れたもののそれだけでどうにかなるはずもない。骨は何本折れているかわからないし、引き裂くような痛みが稲妻のように体中を駆け巡っている。それでも足を止めるわけにはいかなかった。統合企業財体の直轄特務機関《影星》が動いている以上、何があっても捕まるわけにはいかない。連中はどんな手を使ってでも自分の持っている情報を全て引き出そうとするだろう。そしてその後は……

「くそっ! 何故だ!? なぜ出ない……!」

一刻も早くアルルカントに保護してもらわなければならないのに、連絡用の携帯端末はまるで繋がらなかった。

「僕が捕まって困るのはあっちも同じだろうに……!」

「それは少々自分を買いかぶり過ぎではありませんか? ノーマンくん」

「ひっ!?」

闇の中からサイラスの行く手を阻むように現れたのは、金髪の髪を持った少女だった。

「せ、生徒会長……!」

サイラスは奥歯を噛み締める。その両手には一本ずつ、不気味な形状の剣が握られている。鍰飾りの文様はまるで目玉のようであり、一對のそれは正しく化け物の瞳のようだ。

純星煌式武装《パン||ドラ》。悪名高いそれを目の当たりにするのは初めてだったが、もちろんサイラスもその能力について耳にしている。

「あちらにとっては所詮捨て駒でしかなかったのでしょうか。お可哀想に」

「……と、取引しませんか、生徒会長!」

「取引? 私とですか?」

「全て! 僕が知っていることを全てお話します! ですから僕の身の安全を保証して頂きたい! 《影星》ではなく、正規の風紀委員に身柄を委ねたいのです!」

クローディアは首を傾げ、短く問い返す。

「その場合、私にはどのようなメリットが?」

その返答にサイラスはほくそ笑んだ。交渉の余地があるならばチャンスはある。

「《影星》はあくまで内密に僕を処理してしまうでしょう。ですが、風紀委員会が担当すれば事件を公表せざるを得なくなります。そうなったらあなたは僕を外交カードとして使えるハズだ……!」

「ふむ……」

クローディアは考え込むように瞳を閉じた。それを好機と見たサイラスは更に言葉を連ねる。

「僕とあなたは似た者同士のはずです! 他人をゲームの駒としか考え

ていない！馬鹿共はそれを批判するが、使えるカードを最適に運用する事こそがゲームに勝つ鉄則です！あなたならお分かりでしょう!?」
「なるほど……それは確かに一理あります」

その言葉にサイラスの表情がぱつと明るくなる。やはりクローディアは利を取る女だ。そうした賢しきは扱い易い。だがクローディアはにっこり微笑みながら言った。

「ですが、私とあなたでは大きく違う所があるのですよ、ノーマンくん」

「え……?」

「あなたは自分をプレイヤーだと思っているようですが、私は自分自身も駒の一つだと考えています。だって、そうでなければつまらないでしょう?」

さも楽しそうにクスクス笑う。

「く、狂っている……!あなたは狂っているツ!!クローディア・エンフィールドオツ!!」

「ええ、それは重々承知の上ですよ?それに……この一件を公表して外交カードに使うよりも、内々に処理をしてアルルカントへ貸しを作っていた方が私としてはお得なのですよ」

サイラスの顔が更に引き攣り、ガクガクと足が震える。

「う、うわああああああああ!!」

サイラスは絶叫と共に最後の奥の手を解放した。服の裏側に仕込んでいたナイフを操り、クローディアへの不意打ちで投擲を仕掛けたのだ。この距離ではかわしようがない。絶対の自信を持った最高のタイミングだった。……しかし、

「あらあら」

クローディアはソレをまるで分かっていたかのように、弾き上げた。

「まさか、この子の能力を知らないわけではないでしょうに」

その両目はサイラスから見て、右目が翠色に、左目はピンク色に染まっていた。《パン||ドラ》が形成する刃と同じ色だった。

「ひっ……!」

「刹那があなたをここまで疲弊させてくれたおかげで手間が省けました。手加減していたとはいえ流石は《閃光》と言ったところでしょか。あ、そのように怯えなくても大丈夫ですよ？あなたにはまだ利用価値が残っています。今はまだ、ですけどね」

クローディアはまたにっこり微笑む。しかしそのオッドアイの瞳は凍てつくように冷徹で、サイラスは足を動かすことも出来ない。

「では、ごきげんよう」

涼やかな声でそう告げると、クローディアは舞うように双剣を振るう。その柄に施された二つの瞳が怪しく光ったと思った時には、サイラスは全身から血を吹き出していた。

「……い、今のあなたの姿や顔を見たら……彼は失望するでしょうね……」

そのまま地面に倒れ込んだ。星導館が誇る純星煌式武装オーガルククスの中でも、突出した能力を秘めた未来視の魔剣。その胸の校章がパキンと割れる。

「もちろんその事も重々承知の上ですよ。全ては私の願いのために……」

「あーあー、まさかやっちゃったんじゃないでしょうね」

街灯の陰から染み出るように現れた少年は、場違いに軽い口調でクローディアに声をかけた。

「大丈夫ですよ。取り敢えずは懲罰房にでも放り込んで置いてくださいな。後の処理はあなた方《影星》に一任しますが、ちゃんと情報を引き出してくださいね？」

「そりゃモチのロン。ウチらはそれが専門ですから」

少年は横たわるサイラスに視線を向け、やれやれと肩を竦めた。まるで関心が無さそうだ。

「このこと、アイツには？」

「いえ、そちらの事はご心配なく。ですが、彼がこの事を知ったら私共々非難されるのは目に見えています」

「アイツは優しいツスからね。それを覚悟した言葉の割にはいまいち浮かない表情ツスね」

「あら……あなたに気取られてしまうとは、まだまだ私も修行が足りませんね」

「そんなに悔しいならご自分も一緒に行けば良かったでしょうに」

呆れたように少年が言う。

「そういう訳にはいきません。私には私の職分というものがありますから」

「おっと、それだけっすか？」

少年がニヤニヤしながらからかうと、クローディアは笑顔のまま眼前に切っ先を突きつけた。

「私の詮索をするようにと上から命じられましたか？夜吹英士郎くん」

「いやいや、滅相もない！」

慌てて首を振る少年の仕草は、しかしどこかおどけて見える。

「まあ、純粋な好奇心ってやつですよ。本当に向こうは任せっきりで良かったのかなーなんて」

クローディアは答える代わりに残念そうに肩を落とすと、ため息混じりに呟いた。

「……まあ、仕方ありません。少々悔しいですが今回だけはユリスに譲っておきましょう。なにしろ……ようやく本番の幕が開いたのですからね」

クローディアはクスクスと笑った。

—————

と、ある出来事のことを思い返したクローディアは重いため息を吐き出す。そして、目の前の少年の背中を見た。

（もしあなたが私の真実を知ったら、あなたは軽蔑しますか？それとも、非難し、罵倒を浴びせます？でもあなたは優しいからもしかしたら……）

と、そこでクローディアは首を振る。彼が優しいから自分を許してくれる？自身の目的の為に全てを切り捨てる汚い私を彼が許す？そんな事はない。許しを得ると言う考えを持つことさえも烏滸がましい。それでも……

(せめて、全てが終わるその日まで——)

「あなたの傍にいさせてください——」

「ん？なんか言ったか？」

「えっ?! い、いえ！なんでもありません！」

「そうか。だが、悩みがあるなら相談に乗るぞ。まあ、大して役には立たないと思うが気休め程度にはなるはずだ。俺たちは“友達”なんだろ？」

「————」

「あんたがピンチの時は俺が必ず助けに行く。その時は俺の名前を呼べ、どこへでも飛んでいくから」

そう言っつて視線を後ろへ移し、優しく微笑んだ。

「——ありがとう、刹那……」

「気にするな。飛ばすぞ、しっかり掴まれ」

「……はい」

バイクのエンジンを吹かし、一直線の道路を駆け抜ける。

その軌跡は、いつか訪れる幸せな未来への暗示のように見えた。

第9話 昏梟の暗躍

「咲き誇れ——リベングストーンデイジー赤円の灼斬花！」

凜とした声がトレーニングルームに響くと同時にユリスの周囲から紅蓮の炎が吹き上がった。それは竜巻のように渦を巻きながら、見る間に空中で円盤状へと形を変えた。その数は数十にも及ぶ。炎の刃を激しく回転させるそれは、正しく灼熱の戦輪チャクラムだ。

「行け！」

火の粉を撒き散らしながら襲い来る無数の戦輪を、刹那は片手に構えた剣型煌式武装ルークスで、先陣を切つて飛び込んできた戦輪を一閃。中央から真横に真っ二つに分かれた戦輪は、蠟燭の火が風に消えるかのように虚空へ沈む。が、その間に刹那の両側に回り込んだ戦輪が左右から同時に飛びかかった。完璧に統制されたその動きに静かな感嘆を漏らしつつ、身体を回転させ薙ぎ払う。

しかしそれを読んでいたかのように刹那の頭上からもすごい勢いで戦輪が降った。僅かにタイミングをズラして正面から三つ、更にその後ろにも三つの戦輪が追ってくる。

（多重攻撃か）

三次元機動する物体を十数個同時にコントロールするだけでも至難の技だというのに、ここまで見事に操りきるユリスの腕前は、最早腕の問題ではなく天賦の才だと思わせる程見事だった。

（もらった！）

勝利を確信したユリスは、内心喜ぶが相手は《エクリプス蝕武祭》を三度制した人間。そう簡単にはいかなかった。たった三度みたび。そう、たった三度剣閃が瞬いただけなのに自身が操る灼熱の戦輪は虚空と化していた。その中央には未だ無傷の少年。

「さっきの攻撃はなかなか良かった。驚いたよ、リースフェルト」

剣型煌式武装ルークスを払い、再度ユリスを見る。

「流石、といったところか。何食わぬ顔でふざけた芸当をしてくれる」

「ここまで来れば最早清々しい。あの少年には実弾より遅い投擲攻撃は全く意味がないのだ。」

「相変わらず自分の能力の操作が上手いな。俺とは大違いだ」

左手に僅かに黒雷を奔らせた。

「ここまで来ると次はどんな手で躲してくれるか楽しみになってるな」

ユリスの周囲にはまだ十個以上、焰の戦輪が渦を巻いていた。

「いや、リースフェルトのお目にかかるものは持ち合わせてないぞ」

「ほう、ではどうする?」

言いながらユリスは、抜け目無く戦輪を立体的に展開していく。その光景は緻密な布陣を敷くようでありながら、花畑を思わせる美しさがあった。

「正面突破、何でもものはどうだ」

瞬間、刹那の星辰力が僅かに膨れ、一気に加速した。地面を蹴り碎く程の初速を伴う刹那の正面突破にユリスは一瞬、刹那の姿を見失った。

「しまっー!?!」

突如自身の目の前に現れた少年に、目を見開く。

「終わりだ」

刹那の煌式武装がユリスの校章を捉えた瞬間、美しい口角が僅かに上がっていることに気がつく。

「掛かったな、刹那! 綻べ、栄裂の炎爪花!」

「……!」

途端に刹那の足元へ魔法陣が浮かび上がり、その行く手を遮るように炎の柱が立ち上がった。前後左右に全部で五本。まるで鋭い爪を持つ巨大な怪物の手の中に囚われてしまったかのようにだった。

「設置型の能力か……!」

「ふふん、今回は勝たせてもらおうぞ」

勝ち誇ったユリスの声が炎の向こうから聞こえてくるがその表情は見えない。炎の柱はその爪先を刹那へ向けると、握り潰すように襲い掛かってきた。

「雷切……!」

剣型煌式武装に星辰力を注ぎ込む。刃に黒雷を纏った煌式武装を

斜めに切り上げていく。

「穿光！」

最後に上段からの一閃。迸る黒雷がトレーニングルームを駆け巡る。五本の炎の柱は全て、掻き消えていた。

「なっ……」

輪上の衝撃波をその場に残し、間合いを詰めて煌式武装の切っ先をユリスの校章に突きつけた。突きつけた衝撃波は凄まじく、間を開けてユリスの背後を超突風が貫いた。それと同時に甲高いアラートが響き渡る。

「今日は少し危なかった、段々力をつけてきたな。リースフェルト」

「むう、またしても貴様に負けるとは……」

腕組みをしたユリスが、ぷくーつと頬を膨らませたまま不機嫌そうに言った。刹那は再度剣型煌式武装を払い、稼働状態から待機状態へと変える。

ここはユリス専用のトレーニングルームなので二人の他には誰もいない。天井は高く、ちよつとした体育館くらいの広さがあるが、もちろん誰にでもこんな空間を与えられるという訳では無い。これも《冒頭の十二人》の持つ特権の一つだ。

「果てしないな、お前に追いつくには」

「ん？お前は俺に追いつきたいのか？」

飲み物を口から外し、意外な事に目を丸くする。

「べ、別に追いつきたいというか、も、目標の様なものだ」

「？ お前は十分強いだろう」

「む、世辞なら結構だ。結局今日だって一本も取れていないではないか」

収まったふくれっ面が再度顔に現れる。

「世辞ではない。正直、最後のは驚かされた。設置型能力の発動場所まで完璧に誘導されたからな」

飲料水を口に含み、また口から離しユリスを見やる。

「そもそもお前は学習能力が高い。トレーニングを始めた当初は一瞬で勝負が着いていた」

「う……」

「だが今は十分俺の速さに慣れてきている。ましてや行動を制限するよう巧みに能力を使って対応してくるようになった。これを強くなったと言わないで何と言うんだ？」

「む、むう……」

照れと嬉しさからか、なんとも言えないように下を俯く。

「と、ところで刹那」

「ん？なんだ」

「お前のあの身体能力を倍加する流星闘技、やはり何度も使用するの
は厳しいのか？」

「まあ、出来なくもないがあまりしたくは無いな。あれは身体の生命
の制限を完全に解除するとまではいかないが、それと同等の負荷を
身体にかける事になるからな。そんなモノを何度もやってみろ、命が
幾らあっても足りないさ」

「持続時間はあるのか？」

「そうだな、測った事がないからなんとも言えないが、体感的に持つて
五分といったところだ」

「そうか。お前にとつては五分もあれば殆どの相手を倒す事は出来る
だろうな。しかし、それより上の相手となると難しいぞ」

「そうなのか？」

「お前なあ……」

呆れるようにため息混じりにユリスは呟く。

「お前より絶対強い……とまではいかないものの身体能力倍加の
流星闘技メテオアーツを使用しなければ勝利は危ういという学生はいる」

「まああの二人だろう。《聖騎士》と《万有天羅》」

「なんだ、知っていたではないか」

ユリスは意外そう顔で刹那を見た。

「お前が言った《聖騎士》、ガラードワースの生徒会長は剣士として最
高峰と言われている。私も試合を見たことはあるが、少なくとも全力
状態の綾人と同格以上なのは間違いない。界龍ジェロンの生徒会長もとんで
もない化け物と聞ぐが、まあ彼女はまだ《星武祭》フェスタに参加出来る年齢

に達していないのでそうそう見えることはなかるうな」

六花園会議を思い出し、刹那は納得する。あの二人は少し違う雰囲気
気を纏っていたが、強者が纏うアレと同じだったか。

「あ、まだ一人いたな。確かレヴォルフの《弧毒の魔女》エレンシユキールガル、だったか。ア
イツも相当の強者のはずだ。三年の冬が楽しみだな」

殆ど世間の事を知らなかった刹那が唯一しっている《魔女》ストレガ。史上
二人目の《王竜星武祭》リンドブルス連覇者にして、前人未到の三連覇すらほぼ確
定とされている少女。そんな世間の裏では、一人の少年が《蝕武祭》エクリプスを
三連覇したという情報が持ちきりになっていたが、ここだけの話。今
では誰もが知る常識となっているが。

「……《弧毒の魔女》エレンシユキールガル、オーフェリア・ランドルーフェン……」

「ん？なんだ、リースフェルトもソイツと戦いたいんだな」

ぼそりと、感情を押し殺したように引く声でユリスが呟く。そんな
傍らで驚いたようにユリスに話しかけるが、そこでユリスの様子がお
かしい事に気がついた。

怒っているような、悲しんでいるような、様々な感情が入り交じつ
た表情で俯いている。

「リースフェルト？」

ユリスの目の前に刹那の顔が入ると、ユリスははっと顔を上げた。

「あ、ああ、すまない。少し考え込んでしまった」

誤魔化すようにそう言うと、ユリスは人差し指を立てて胸を張る。

「そ、それでだな、アスタリスクには学生以外にも実力者は多いのだから
？例えば警備隊の隊長はアスタリスク史上最強と呼び声が高い
《魔女》ストレガだし、我々のクラス担任である谷津崎女史も私などより遥かに
強いだろう」

「先生が？」

「あの人はああ見えてレヴォルフで唯一《獅鷲星武祭》グリアプスを制した事があ
るチームのリーダーだ。なぜ星導館で教師をしているかわからんが
な」

「飛ばされたんだろう」

「さらっと酷いことを言うな、お前は」

真顔で言つてのける刹那に、ユリスは苦笑を浮かべた。
すると、鈴を転がしたような音が響いた。それから少し遅れて空間
ウィンドウが展開する。

『来訪者です。取り次ぎますか?』

滑らかな機会音声がそう告げ、今度は機会音声混じりの少女の音が
響く。

『その必要はない。どうせリースフェルトの事だ、刹那とイチャイ
チャしたいから適当な理由つけて入れてくれないのは目に見えてい
る』

「なっ……!!?」

「この声は沙々宮か?」

『こんな鉄壁、吹き飛ばすまで』

なにやら嫌な予感がユリスを貫いた。

「まさか……!!刹那、伏せろ!」

「え、何故だ?沙々宮だぞ?入れてやっても……」

「そうではないー!!」

『三十九式煌型光線砲ウォルフドロー』

空間ウィンドウに映るのは紗夜を優に超える砲。

『掃射』

緊張感のない声で紗夜がそう呟いた瞬間、空間ウィンドウの前の扉
が徐々に膨れ、融解しだし、トレーニングルームの扉を光の奔流がぶ
ち抜いた。

「なにっ……!!?」

「沙々宮ー!!」

刹那は瞬時に躲し、極太の光の柱はそのまま規模を縮小し、次第に
は消え去った。そして、ぶち抜かれた穴から一人の少女が姿を現す。

「刹那ー」

沙々宮紗夜、その人だった。

「……………」

「これ、穴開けて良かったのか?リースフェルト」

ぼつかり穴が空いた扉を指差し刹那は尋ねた。

「なんて事を……」

ユリスに至っては怒りを通り越し、呆れ果てている。がっくりと俯いて額を押さえている。

「……あらあら、これはまた派手に壊してくれたものですね」

「うわ、凄いなこれ……ユリスがやったのかい？」

そこへ穴の向こうから、聞き覚えのあるゆったりとした声が響いてきた。扉の穴からひよこりと顔を覗かせたのは、案の定この星導館学園の生徒会長であるクロードイアと、天霧綾人であった。

「このトレーニングルームはあなた方『冒頭の十二人』に貸し出しているだけで、学園の設備である事をお忘れなく。分かりましたね？ 刹那」

「お、俺か？」

珍しく戸惑いを隠せない。

「わかっている……と、言いたいところだが今回はコイツが犯人だ」

ユリスはビシツと人差し指を紗夜に向ける。

「裏切り者」

「なんだとツ!？」

「あらあら、壊した張本人は沙々宮さんでしたか。訓練中の不慮の事故でしたら内々に処理致しましたのに」

「ひっ……」

クロードイアは顔こそ笑みをたたえているが、目が全く笑っていない。見ろ、紗夜なんか怯えている。

「沙々宮さん？ 後で生徒会室に来るように」

「は、はい！」

と、そんなやり取りをしていると、

「いやー、でもでもびっくりしたよねえ、カミラ。まさかいきなり扉をぶっ飛ばすなんてさー。変わってるって意味じゃうちも相当なものだと思ってたけど、やっぱり他所は他所で面白いわねー」

「ああ、もう、あまりはしやがないでくれ、エルネスタ。頼むからこれ以上面倒をかけないでくれないか」

扉の穴越しに、クロードディアの背後から見慣れない顔の女性が二人現れた。低身長少女は綾人の腕にしがみつぎ、ユリスと紗夜はピクリと眉を動かす。当の本人は困っているのだが。

いや、見慣れないのは顔だけではない。それだけなら刹那が転入してからまだ一ヶ月ちよつとしか経っていないのだからいくらでもいるだろう。見慣れないのは、その二人が身につけている制服だ。

「……これはどういう事だ、クロードディア」

そう言うユリスの声は冷たく低い。刹那に関しては物珍しそうに二人を見ている。だが、クロードディアはそんな剣呑さなどまるで感じていないかのようには、ぽんと手を打った。

「ああ、ご紹介しておかなければなりませんね。こちらはアルルカント・アカデミーのカミラ・パレートさんとエルネスタ・キューネさんです」

「アルルカント……ああ、あの地味目の生徒会長がいる所のか」

思い出したように言う刹那は、それならユリスの態度にも合点がいくと思つた。アルルカントは先日事件の背後で糸を引いていたと目される学園だ。直接的な被害を受けている二人には、正しく仇敵と言つても過言ではないだろう。クロードディア達は殆ど扉の意味を成していない穴から中へと入る。

「今度我が学園とアルルカントが共同で新型の煌式武装ルーグクスを開発することになりました。今日はその正式な契約を取り結ぶために、わざわざ学園までいらしてくれました」

「……どうも」

褐色肌の女性が申し訳程度に頭を下げる。綾人や刹那より少し年上だろう。クロードディアに負けず劣らず妖艶なプロポーションの持ち主で、それでいてよく引き締まった体軀をしている。切れ長の目と、生真面目そうに結ばれた口元がどこか冷たい印象を与える。

「共同開発だと？……ふん、そうか。そういう事か」

ユリスは一人納得した様子で不愉快そうに吐き捨てが、刹那は何も言わずただ成り行きを見ている。綾人に関してはさっぱりといった

様子だ。

「共同開発はサイラスの一件の見返りみたいなものだろう。大方、黒幕だったアルルカントを表立って告発しないという条件で取り付けたといったところか。そんな事をされたら、学園の存続も危ういからな」

(やはりか)

「さて、なんの事でしよう」

一方のクロードイアは嫣然と微笑むだけだった。否定も肯定も示さなかったが、それだけで十分答えているようなものだ。

「まあいい。あの件の処分はお前が一任されているのだし、その手の腹芸はお得意だろうしな。だが、なぜそのアルルカントの関係者がここにいる?」

それは刹那も疑問に思っていたことだ。

黒幕であるアルルカントの関係者がノコノコと相手の腹の中へとやって来るのもどこかおかしい。

「ええ、それはー」

「はいはい、それはあたしが見たいって言ったからでーっす」

そこで突然ひよこひよここと飛び跳ねながら手を挙げたのは、アルルカントの制服を着たもう一人の女の子だった。確か、エルネスタと呼ばれていた少女で、カミラと比べると随分表情が豊かに見える。カミラと違い、こちらは制服の上から白衣のようなものを纏っていたが、こちらもやはり胸の辺りがかなり奔放な感じで自己主張していた。年齢は綾人や刹那たちと同じくらいだろうか。少なくとも年上ではないだろう。

「いんやー、ぜひとこの目で拝んでみたくなってさー。あたしの人形ちゃんたちをぜーんぶぶった斬ってくれちゃったっていう剣士くんを」

そう言うてにぱつと笑う。

「は?」

「え?」

「あら」

「ん？」

その瞬間、なんとも言えない不思議な沈黙が周囲を包んだ。

ユリスはかくんと顎を落とし、声こそ出していないがカミラは「あちやあ」とでも言いたそうに片手で顔を覆っている。クローディアでさえ驚いたように口元を手で押さええており、綾人は目の前の少女をびっくりするかのように見ていた。刹那に関しては、少女の視線を感じチラツと見た。

全員が驚くのも無理はない。何しろこの少女は、今まさに「私が黒幕です」と白状したようなものなのだ。驚くなどという方が無理だろう。

「んで、キミが噂の剣士くんだねー。ふむふむー、なるほどなるほどー」
「？」

エルネスタはそんな空気を一切無視して刹那へと近づくと、ジロジロと眺めながら感心したような表情で何度も頷いた。

「ん、なかなかいいわねー。気に入っちゃった！」

「は、はあ……」

少々の戸惑いを隠しきれていない刹那に向かって、ちよいちよいと手招きする。片手を口に寄せ、小さい声で「ちよつとちよつと」と言っているようだ。頭にはなマークを浮かべながら身を屈めると、エルネスタは猫のように目を細めてそつと耳打ちした。

「でもー次はそう上手くいかないぞ？」

「次だとー！？」

はつと顔を上げようとするのに先んじて、エルネスタの唇が刹那の頬にそつと触れる。

「ん、頬に何か付いてたか？」

「なっ……!？」

「……っ！」

「あら……」

刹那が頬を触るが何も付いていない。その傍らで星導館の女性三人が目の色を変えた。

「きつ、きつ、きしやまー！いつ、一体何を……………！」

「……………泥棒猫、滅ぶべし」

「綾人だけでは飽き足らず、刹那にまで……………」

「噛んだユリスが細剣を抜き、紗夜はまだ展開したままだった煌式武装ルークスの砲口をエルネスタへ向ける。クローディアは何やら危ない感じにクスクス笑っている。

「にやはは、怖いな怖いなー。そんな目くじら立てないでも、ちよつとした挨拶じゃないかー」

エルネスタは逃げるようにカミラの後ろに隠れると、顔だけを出して悪戯っぽく笑った。

「せつかくなんだし過去の事は水に流して仲良くしようよー。あたし的には剣士くんだけじゃなく、《華焰の魔女》ともお近づきになれたらうれしいんだけどなー」

「生憎と私はサイラスの件を抜きにしても、貴様らアルルカントが大嫌いでな。ご免被る」

ユリスの声が含まれた怒りには、確かにどこか深く強いものを感じられる。仲良く云々はともかく、ユリスがここまで嫌悪を露にすると、いうことは、ひよつとしたら何か因縁でもあるのかもしれない。

「ちえー、残念っ」

「申し訳ない、このエルネスタは……………まあ、なんと言うかご覧の通りの性格でね。代わりに私がお詫びする」

カミラは苦笑を浮かべて軽く頭を下げる。どうやらこちらは少なくともエルネスタ・キューネより真つ当な性格の持ち主らしい。が、ふとそのカミラの視線が紗夜の持つ煌式武装ルークスへ留まった。

「ふむ、これは面白いね。随分と個性的な煌式武装ルークスだ。コアにマナダイトを二つ……………いや、三つかな？強引に連結させて出力を上げているようだがー何とも懐かしい設計思想だ」

紗夜が珍しく驚いたような表情をして、カミラを見返す。

「正解。なぜ分かった？」

「分かるとも。私の専門分野だからね。しかし、言わせてもらえばあまり実用的とはいえないな」

紗夜の眉がピクリと動いた。

「複数のコアを多重連結させるロボス遷移方式は十年以上も前に否定された不完全な技術だ。出力が安定せず、使用者の負担が大きい上にどうしても大型化を免れない。高出力を維持するためには過励万応現象を引き起こさねばならず、一回の攻撃事にインターバルが必要になる。そういった欠点が改善されているようにも見えない」

つらつらとカミラが述べる内容は、ハッキリ言って専門用語が多すぎかつ、難しい言葉と並べているため理屈の半分も理解出来なかったが、紗夜の扱う煌式武装ルックが極めてピーキーな代物であるという事を指摘しているらしい、話の内容的には。実際、一回の攻撃毎に過励万応現象メテオアーツ——つまり流星闘技——が必要という事は、必殺技だけで闘うようなものだ。

「……それは事実」

紗夜は悔しそうに唇を噛みながらも、真つ直ぐにカミラを睨み返す。

「だが、それでもお父さんの銃を侮辱する事を私は許さない。撤回を要求する」

「お父さん……?」

カミラはまじまじと紗夜の顔を見た。

「ああ——もしや、キミは沙々宮教授のご息女なのか?」

その声にどこか懐かしむような響きと、嘲るような響きが同居している。

「だとしたら?」

「尚更撤回するわけにはいかなくなったな」

肩を竦めるカミラに、紗夜の視線が更に鋭さを増す。

「沙々宮教授はその異端さ故にアルルカントを、そして我らが《獅子派》フェロウアイアスを放逐された方だ。『武器武装は力であり、力は個人ではなく大衆にこそ与えられなければならない』。それこそ《獅子派》フェロウアイアスの基本思想であり、私はその代表として彼の歪さを認めるわけにはいかない」

「……」

紗夜とカミラはお互いに一步も引く気はないといった顔で睨み合う。一触即発の空気が辺りを包み込もうとした瞬間、

「そこまでだ」

沈黙を貫いていた少年が、紗夜の前に立つ。

「すまないな、沙々宮は親の事になると少し熱くなってしまう。許してやってくれ。だが——」

刹那は視線を紗夜からカミラへと移し、鋭くする。

「あんたもあんただ。《獅子派》フエロワイアスだが何だか知らないが、俺の友達のお親を悪く言わないでくれ。あんたの口ぶりからは嘲りの様なものを感じるからな」

「それは失礼した。だが、私にも立場というものがある。私が《獅子派》フエロワイアスの代表である以上、彼を認めるわけにはいかないんだ」

「カミラはそうならたら頑固だからねー。ちよつとやそつとじや自分の意見を覆すことはないかなー」

するとそれまで興味津々といった様子で成り行きを見守っていたエルネスタが、さも楽しそうに含み笑い。

「まー、どーしてもっていうなら、力づくで認めさせるしかないだろうねー。ここのルールで、さ」

「.....いいだろう」

すると、カミラとエルネスタの背後の壁に一筋の剣閃が深々と刻み込まれた。二人の目の前には漆黒の太刀の切っ先。

「あまりこういう手段は取りたくなかったんだがな。決闘でしか認められないなら喜んで受けて立とう。一秒もあれば直ぐに終わる。それに沙々宮の親の件もあるしな。まだ侮辱すると言うならその口、力づくで黙らせてもいいんだぞ? エルネスタ・キューネ、カミラ・パレート」

「.....っ!?!」

絶対強者からの威圧。闘うための修練を積んでいないカミラには途方もない化け物を相手にしているかのようだった。

「止めんかバカ者!」

ポコンとユリスは刹那の頭を殴る。

「お前はすぐ決闘に走ろうとする！ここでいざこざを起こせば《星武祭》^{フェスタ}に出れなくなるんだぞ！」

「す、すまない………」

「ねえねえ、剣士くん」

「？　なんだ？」

エルネスタがとてとととと刹那に歩み寄る。

「その純星煌式武装、^{オーガルクス}「神器」？」

「いや、違うぞ」

「ふーん？」

エルネスタはまじまじと《正宗》を見る。そして、ポンツと手を打つた。

「あ、それともう一つ！」

「？」

全員がエルネスタを見た。

「アルカント^{うち}が《鳳凰星武祭》^{フェニクス}で優勝したら、この二人の剣士くんもらつていいー？」

ビシッ

辺りの空気が凍りついた。ユリスの周りから灼熱の炎が噴き出る。

「おのれ、貴様！他校の生徒をスカウトだど!？」

「にやははー、うちらも《鳳凰星武祭》^{フェニクス}に出るのよねー。そっちが決勝まで来ればどつかで当たるっしょー？止めてみせなさいー」

「どこまでふざけた………」

「泥棒猫………」

エルネスタの目は笑っていたが、冗談を言っているようには見えな

い。
「生徒会長殿、すまないが我々は一度学園に戻らせて頂く。こちらも色々と申請が必要なのでなー行っくぞ、エルネスタ」

「はいはいーじゃ、皆さんまつたねー！」

二人は扉の穴からトレーニングルームを出ていく。

「クローディア、アルカントを沈めるぞ」

「了解しました」

「ダメだよ!?!二人とも!」

「私も行こう」

「紗夜まで!?!」

三人を綾人が宥めている傍らで、刹那は考えていた。

『次はー！ーそう上手くないかないぞ?..』

(次とはなんだー！ー?..)

先程のエルネスタの言葉を思い出していた。

第10話 開幕前夜

アルルカントの連中が来てから数日、《疾風迅雷》刀藤綺凜と天霧綾人の決闘やらユリスのペアが綾人になったりと色々立って続けに来事があった。《鳳凰星武祭》^{フェニクス}まで残り数日となった今日、北斗食堂にて何時ものメンバーに新メンバーを交えて食事を取っていた。

「あのお、《叢雲》の天霧綾斗先輩ですよね？」

昼休み、北斗食堂のテーブルで綾斗が食事を取っていると、栗色の髪をした活発そうな女生徒が満面の笑みで話しかけてきた。

「……………え？」

「えっへへー、サインもらっていいですかー？」

そう言つて、色紙とペンをずいっと差し出してくる。

「ああ、うん……………別に構わないけど」

その勢いに若干押されつつも、渡された色紙に名前を書く。当然、こじやれたサインなど持っていないので、しっかりとした楷書だ。最初は戸惑ったものだったが、綾斗も最近はどうにか慣れてきた。

「ありがとーございませーす！《鳳凰星武祭》^{フェニクス}、頑張ってくださいね！応援してますから！」

サインを受け取った女の子は、ぶんぶん大きく手を振って去っていく。

「は……………」

軽い苦笑いを浮かべながらそれを見送った綾斗は、ふと冷たい視線に気が付き、慌てて振り向いた。

「……………」

すると向かいに座っているユリスと紗夜が、ジト目で綾斗を睨んでいた。

「えーと……………なに、かな？」

「……………別に。相変わらず人気者は大変そうだなと思っただけだ」

「綾斗はちよつと愛想が良すぎる。色々心配」

「そ、そうかな……………」

紗夜の隣でうどんを食べていた綺凜もいつの間にか食べるのをや

め、首を縦にコクコク振っている。綾斗の隣でお茶を啜っている刹那は黙って話を聞いていた。

不機嫌そうな二人の圧力に微妙な居心地の悪さを覚えながら、綾斗は困ったように頭を掻いた。

綺凜との決闘に勝利し、星導館学園の序列一位になってからはや一週間。こうしたことは珍しくもなくなっていた。

現状、ファンレター、プレゼント、メディア、企業からのオファー、匿名での嫌がらせなどやりたい放題だ。幸い、学園にはそういった部分のフォロワーをしてくれる部署があるらしく、一括して任せている。先程のような直接のコンタクトには自身で応じるしかないのだが。

「お姫様も沙々宮も、目くじら立てなさんなって。リスト外の無名学生が一気に一位を搔つ攫つていったんだぜ？そりやあこうもなるさな。なあ？刹那」

「ああ、そうだな」

綾斗を挟んで隣にいる少年に話を振る。

「一位おめでどう、綾斗」

「そう真正面から言われると、なんか照れるな」

「マクフェイルの反応が楽しみだな」

「たあしかにい」

「う……」

綾斗の隣で蕎麦を啜っていた英士郎がニヤリと笑う。過去の事例を見ても、星導館においてリスト外からいきなり一位になったケースはほとんどない。公式序列戦での指名制度がそれを不可能にしているからだ。月に一度行われている公式序列戦では、序列が下位の者から指名された場合、拒否することが出来ないようになっていたが、これに参加する生徒は大きく分けて三つの階層に区分される。一つ目は刹那、ユリス、クロードイア、そして綾斗たち《冒頭の十二人》と呼ばれる序列上位者、二つ目は在名祭祀書に名前が載っている「序列入り」、そして三つ目は在名祭祀書に名前が無い「リスト外」だ。

公式序列戦では、一つ上の階層に属する相手までしか指名する事が出来ないようになっていた。つまり《冒頭の十二人》を指名するには、

最低限序列入りする必要があるのだ。そのため序列外からいきなり《冒頭の十二人》になるには、通常の決闘で相手を打ち負かす必要があるのだが、総じて序列が上位になればなるほど決闘に対して慎重になる傾向がある。

「そうですね。私も、その、う、運良く決闘でいきなり《冒頭の十二人》になれましたけど、それでも十一位。私が言うのも何ですが、綾斗先輩の場合はいきなり一位ですから、ずっとセンサーショナルだと思います」

綺凜も英士郎に同意する。つい一週間前までその序列一位にいたわけだが、特に未練があるわけでもなさそうだ。

現在、綺凜の序列はリスト外だが、「猶予期間」と呼ばれる特別な状態にあるとクローディアが言っていた。何でも、入れ替え制の弊害を軽減する措置でもあるらしい。

「だが、刀藤程の実力なら直ぐに《冒頭の十二人》になれるさ」

刹那の言葉に全員が頷いた。

「そ、そんな・・・私なんか・・・」

もじもじと下を俯いた綺凜だが、それに英士郎が付け足す。

「猶予期間」の学生にはいい特典がまだあるしな。確か、直近の公式序列戦で、「自分の旧序列以下の相手」であれば階層を無視して無条件、しかも優先的に挑戦できる権利を持つからな」

「へえ、そんな事も出来るんだ」

「第一、お姫様だって《冒頭の十二人》になった時はかなり騒がれた口じゃねーか」

「そうかもしれないが、所詮はこんなもの一過性の騒動だろう。私の時はもつと早く終息したぞ」

英士郎の揶揄に、ユリスが真顔で答えた。

「ま、そりゃあ、お姫様は完全にシャットアウトだったからな。あれだけ冷たくされれば、ふつー引くだろ」

「だから友達が少ないんだ」

「なんか言ったか？刹那」

ユリスが刹那の隣まで移動し、その頬を引っ張った。

「一言が余計なんだ、お前は」

「はいそこイチャつかない」

「な……！イチャついてなど……！」

顔を真っ赤にし怒ってもそれ程圧にもならない。

「あ、生憎、私はああいった形のサービス精神は持ち合わせていない。応援してくれるのはありがたいと思うが、くだらない打算に利用されるのはご免だ。ならいつそ全て断ったほうが誠意あると思うが？」

「打算？」

「本人に見せるのは忍びないが、どーしてもと言うなら」

英士郎が携帯端末を操作して、空間ウィンドウを開いてみせた。

「オークシヨン？……って、ああっ！」

それを覗き込んで綾斗が声を上げる。そこには綾斗のサインがずらりと出品されていた。しかも喜んでいいのか悪いのか、かなり価格が高騰している。

「あー、学生のポピュラーな小遣い稼ぎだな。よくあるよくある」

後ろからそれを見た英士郎がポンポンと綾斗の肩を叩く。

「気にしないでいい。ちゃんと応援している綾斗のファンだっている。私とか」

「そ、そうですよ！私のクラスにも綾斗先輩のファンだって子がいますし、私だって……で、でもそれよりも……」

綺凜は申し訳無さそうに頬を未だに引っ張られている刹那を見た。

「綾斗先輩よりも刹那先輩のファンの子が多くて……お、多
いって言ってもほんの少しの差というか……」

「そりゃあそうだなー。刹那、結構顔整ってるしなー。オマケに理
不尽な程強いしな」

「もちろん、私も刹那のファンだ」

「ここでも紗夜が手を上げる。」

「わ、私もです！」

「どうやらこの二人は、刹那と綾斗のファンらしい。」

「それよりも刹那」

「なんだ？」

「お前は九位で満足なのか？」

「ん？ああ、まあ今のところはな。大体序列一位はその学園の象徴みたいなものだからな」

ユリスの手を外し、またお茶を啜る。

「アルルカントはわからないが、クインヴェールなら《戦律の魔女》シグルドリーヴァ。レヴォルフなら《弧毒の魔女》エレンシュキエガル。ガードワースなら《聖騎士》ペンドラゴン。界龍ジェロンなら《万有天羅》。どれも一筋縄ではない強者たちだ。各学園が訴訟を起こせばまず叩かれるのが序列一位か、現生徒会長のどちらかだと思う。綾斗も行動には気をつけるんだぞ」

「うん、了解したよ」

綾斗の表情も自然と引き締まる。

「ああ、そういえば二人も参加確定したんだっけ？」

綺凜が紗夜から誘いを受け《鳳凰星武祭》フェニクスへ予備登録したという話を聞いた時は少なからず驚いたが、先日出場枠に欠場による空きが出たということで、無事参加が決まったらしい。

「例え綾斗たちと当たってもその時は全力で迎え撃つ所存」

「はい、私も同じ気持ちです」

「まあ、そうでなくてはな」

「出来れば当たりたくはないけどね」

「さてさて、刹那は？」

「ああ、俺は——」

「うふふ……皆さん意気軒昂で頼もしいですね」

と、そこへやって来たのはいつも通りの柔和な笑みを浮かべたクローディアだ。

「ほう、久しいなクローディア。ここのところ随分と忙しそうだったが……」

「ええ、やはり《星武祭》フェスタが近づくと色々仕事が増えますから大変です」
そう言いつつ、クローディアはテーブルの上に巨大な空間ウィンドウを展開させる。

「ああ、みんな。俺のパートナーは——」

「私ですっ」

クローディアは豊満な胸を主張するかのように腰に手を置いて喋った。

「二」「ええええええええ!?」「二」「二」

全員の声が食堂に響いた。

「ど、どうしたんだみんな」

「おいおい、今年の《鳳凰星武祭》^{フェニクス}かなり激戦だぞ」

英士郎は目をキラキラさせながら喋る。

「片や序列一位、片や元序列一位のタッグに、それに加えてあの《閃光》とうちの序列二位のタッグだぜ? ヤベーよこれは。今年は間違いく荒れるぞ!」

「確かにな……今回は突出している有力選手がいない分、かなり有利だ。しかし、この二人が出るのならば話が違ってくる」

刹那とクローディア以外の全員が二人を見た。

「ではでは、トーナメント表は表示しておきますね。皆さん、それぞれ見終わったらこの後、一度練習試合をしませんか?」

クローディアの提案に一番先に反応したのはユリスだった。

「賛成だ」

「うん、僕も」

「了承」

「わ、私も賛成です!」

「んじゃ、俺もちよっくら見学させてもらうわ」

「決まりですね。では放課後に私のトレーニングルームで」

そう言つてクローディアは踵を返し、去つて行つた。

「ふむ、ざつと見、サプライズの大物はいない感じだな」

「何を言っている、お前がいるだろう」

「お、俺か?」

ユリスがジト目で睨む。

「お前は事前に予想されていた選手の中には恐らく入っていないだろう。星導館からしてみれば、これはかなり有利な状況と言っている」

「クローディアもよく他学園に隠し通せたよね……」

「奴の事だ、そういうのには慣れてる」

「刹那が他の学園の奴だったら相当ヤバかっただろうに」

英士郎が肩を竦めた。

「確かにな」

これにはユリスや他の面々も頷かざるを得ない。

「しかし幸いと言うべきか、前回の《獅鷲星武祭》や《王竜星武祭》のような絶対的な面子がいるというわけではないしな」

「絶対的?」

ユリスの言葉に、綾斗は首を傾げた。

「《獅鷲星武祭》はガラードワースの銀翼騎士団、《王竜星武祭》はレヴォルフの《弧毒の魔女》の事だ」

つまらなそうにユリスは肩を竦めた。

「聞いた話だが、前回の《鳳凰星武祭》優勝ペアも卒業したらしく参加してないらしい。界龍の準優勝ペアは《獅鷲星武祭》に鞍替えしたって話だ」

綾斗が感心しながら耳を傾けていると、ユリスがぼんと手を叩いて一同を見渡す。

「何にせよ、今シーズンの戦略上この《鳳凰星武祭》は我々、引いては近年、成績が芳しくない星導館にとって非常に重要な位置づけにあるのは間違いない。そしてその成否は我々に懸かっていると云っても過言ではない。みんな、優勝目指して頑張ろう」

「ま、今年の《鳳凰星武祭》には特別目立った有力選手はいねえ。少し各学園の《冒頭の十二人》が目につくが、お前らなら何とかなるっしょ。ここで優勝、準優勝を俺たちが占めれば大きなポイントを稼ぐ事が出来るしな」

英士郎の的確なコメントに全員が頷いた。

「よし、《星武祭》まであと少しだ。油断せずにいこう」

刹那のその言葉を皮切りに、全員は各々の教室に戻って行った。

星導館が誇る最強タッグペアたちで挑む《鳳凰星武祭》。

開催まで残りわずか――

《鳳凰星武祭》編

第11話 鳳凰星武祭

「うん、まあこんなものか」

「そうですね」

クローディアのトレーニングルームで《鳳凰星武祭》^{フェニクス}に向けての最終調整が終わった面々が床に倒れていた。

「はあ……はあ……はあ……！流石に、くるね、これは……！」

綾斗は荒らげた息を整えながら、苦笑いした。

「みんなタッグ戦での動きは大体体に覚えさせられたはずだ。後は、全力で臨むのみだな」

「刹那は意外とスパルタなのですね」

「そうか？《蝕武祭》^{エクリップス}での経験を教えただけなんだが……そうか、厳しかったか」

しゅんと落ち込む刹那はまるで叱られた子犬のように見えた面々は、急に申し訳なく思えてしまった。

「そんなに落ち込まないでよ、刹那。わかり易かったし、動きも大体把握出来たからさ」

「そ、そうか……！」

今度はぱつと明るくなり、女性陣はその顔を見て暫し顔を覆った。

「しかし、厄介な奴が出てくるのには違いない。まさか、予選から当たるとはな」

ユリスは先日クローディアから全員に送られた数十人にも及ぶ学生データの見ながら唸った。

「厄介って？」

綾斗はため息をつくユリスの後ろに回り、その手元を覗き込む。

「こいつは純星煌式武装《霸潰の血鎌》^{オーガルクス グラヴィシズ}の使い手だ。アルルカントの連中が何を企んでいるかはわからんが、それを除けばおそらくここに挙がっている連中の中で最も危険なのはこいつだろう」

「この人って確か『ローリー』」

「ああ。私たちが順当に勝ち進めばいずれかは戦うことになる相手。名前は『ローリー・レーネ・ウルサイス』」

「ウルサイス……？ああ、『吸血暴姫』か」

刹那が思い出したように口を開いた。

「知ってるの？」

「なに、それいつも純星煌式武装オーガルクスの使い手だ。確か、レヴォルフの『冒頭の十二人』だったか？」

「ええ、序列は三位ですね」

そこには妙に鋭い目つきの女生徒が、不敵な笑みを浮かべていた。

『ローリー』

「よう、阿婆擦れ女。生きてるか？」

薄暗い通路にデイルク・エーベルヴァインの声が響く。デイルクが部屋に向かってそう声をかけると、3畳ほどの広さの室内で、なにかがもぞりと動く気配がした。部屋の中には明かりがなく、薄ぼんやりとしか見通せなかったが、どうやら奥の壁際にもたれるようにして誰かが座ってるらしい。

「ローリー誰かと思えばあんたか。わざわざこんなところまで何の用だ
い？」

デイルク同様乱暴な口調だったが、声が高い。女子学生だ。デイルクの秘書、ころなが目を凝らすと、ようやくその姿を把握することが出来た。

壁から伸びた手枷に腕が繋がれ、制服姿のまま豪快にあぐらをかいている。夏場だというのにその首にはマフラーを巻き、かと思えば着崩した制服にはアンダーを着用しておらず、何ともミスマッチな格好だ。その特異な風貌をまじまじと見詰めていたころなは、吊り上がった狼のような瞳で鋭く睨まれ、その迫力に思わず後ずさった。

「なに、ちよいとお前に頼み事が出来た」

「はっ」

デイルクの言葉を、少女は鼻で笑い飛ばした。

「頼み事だあ？命令の間違いだろ。あんたが本気で言ってるんなら、あ

たしに拒否権なんぞねえんだからな」

「聞いてくれりやあ今すぐにでもそっから出してやるよ」

「その前に差し入れの一つでも用意してねえのか？腹が減って死にそうなんだよ。なんだったらそこのお嬢ちゃんでもいいぜ？」

「ひいっ！」

ころなはデイルクの背中へ隠れるように回り込んだ。

「やるのかやらねーのか、どっちだ」

デイルクは少女の軽口に構うことなく、先を続ける。

「へいへい……んで、何をすりやいいのさ？」

「大したことじゃねえよ。星導館の小僧を二人、叩き潰してくれりやいい。再起不能になるくらいにな。決闘でも構わねえが、丁度いい具合に《鳳凰星武祭》がある。それに出ろ。——ころな、出場登録は済ませてあるな？」

「え？あ、はいっ！」

突然話を振られて驚いたが、ころなはぶんぶん頷いた。

「《鳳凰星武祭》に出ろなあ？」

「決闘じゃ拒否られる可能性があるが、《星武祭》じゃそうはいかねえからな」

デイルクはそこまで言うと、ぐっと部屋を覗き込んだ。

「お前らなら本戦までは楽に進めるだろ。向こうも同様だ。そうすりやどつかでぶち当たるだろうから、潰せ。勝つ必要はない」

最後の言葉は、まるで深い穴の底から響いてくるような声だった。

「ああ、もちろん出来るなら優勝してくれても構わねえぞ」

「簡単に言ってくれやがるな、おい」

そう言いながらも、少女は楽しそうに肩を揺らす。じやらりと鎖が音を立てた。

「——いくつか聞きてえことがある」

「言ってみろ」

「まず一つ。目標が小僧二人なら、《猫》でも使えばいいだろ。なんでそんな仕事をわざわざあたしに振る？」

「《鳳凰星武祭》という舞台に、お前らが一番適任だからだ。それに

《猫》共は銀目も金目も手が空いてねえ。おまけに連中を動かすとすると餌代がかかる」

「それだけか？」

「……二人の小僧はどっちも星導館の《冒頭の十二人》だ。流石に《猫》を使って足がついたらこつちがやべー。まずは真つ当な手段が望ましいってこつた」

それを聞いた少女はケラケラと笑った。

「おいおい本気かよ。二人の《冒頭の十二人》の相手をさせようって？」

「出来もしねえ仕事は振らねえよ」

少女は考え込むようにしばらく俯いて黙っていたが、やがて顔を上げて口を開いた。

「二つ目。その小僧共を狙う理由は？」

これにはデイルクも面を食らったのか、舌打ちが廊下に響く。

イラついた時のデイルクの癖だ。

「教えてやる義理はねえが……まあいい。《黒炉の魔剣》は知ってるか？」

「はあ？なんだそりや？」

「星導館の学有純星煌式武装だ。片方の小僧はそいつの使い手でな。まだまだ使いこなしちやいねえようだが、放っておくと後々厄介の種になりそうだから今のうちに潰しておきてえのさ」

「ふうん。んで、もう片方は？」

「もう片方の小僧は、名称は分からねえが刀型の純星煌式武装の使い手だ。さっきの小僧と違うところは自分の純星煌式武装を完璧に使いこなしてるってとこだ。それにその小僧の純星煌式武装はおそらく、「神器」の可能性が高いしな」

「イノセンス？」

「何でもねえ、こつちの話だ」

「ま、深くは詮索しねえさ。ふうん……純星煌式武装、ね。あんたがそこまで言うからには余程強力なんだろうな」

「アレを目の当たりにすりゃ、誰だってそう思うだろうさ」

「そうかいそうかい、んじや、そのお仕事ってやつをありがたく頂戴するぜ、デイルク・エーベルヴァイン」

「さっさとそう言いやがれ、イレエネ・ウルサイス」

がしやりという音ともに鎖が外され、イレエネが大きく伸びをする。

「ふう……やれやれっと」

肩をコキコキ鳴らしながら、ニヤリと笑った。

「景気付けに、まずは腹ごしらえといこうか」

背はかなり高く、しなやかで均整の取れた身体は肉食獣のようだ。ニヤリと笑うイレエネの口元からは大きく鋭い牙が二本、覗いていた。

—————

アスタリスク中央区総合メインステージは通称『シリウスドーム』と呼ばれている。《星武祭》はこのメインステージを含めた大中十一のステージを舞台として行われるが、現在そのシリウスドームでは第二十五回《星武祭》の開会式が執り行われていた。かつて綾斗はユリスは案内してもらってその前まで来たことがあったが、足を踏み入れたのは初めてだ。

シリウスドームのステージは《鳳凰星武祭》出場者が全員揃ってもまだ余裕があるほどの広さがある。実際に試合をする際はもう少し狭い範囲に区切られるそうだが、この開会式では全面を使っていた。学園ごとに出場者が整列しているものの、一部の学園では欠席している学生もいるらしい。レヴォルフあたりはそれが特に顕著で、一分の隙もなく整然と並んでいるグラードワースと比べると天地の差だ。

「それにしても、ものすごいひとだなあ」

「ふふっ、それは出場者たちのことか？それとも——」

ついつい口から漏れた呟きを聞きつけたのか、隣に立つユリスは悪戯っぽく微笑みながらそう言うのと、視線をぐるりと巡らせた。

「この観客共を見て言っているのか？」

その言葉通り、ステージを取り巻く観客席はまさしく超満員。立錐の余地もない。

「あはは……まあ、どつちもかな」

収容人数はおよそ十万人と聞いたが、こうして実際にそれを見ると圧倒されるばかりだ。何層にも分かれた観客席は見上げるほどに高く、最上階からはこちらが人形くらいにしか見えないのではなからうか。小声でそう伝えると、ユリスは大げさに肩を竦めた。

「試合になれば上層域に巨大な空間スクリーンが展開されるからな。見えないようならそつちで観戦するらしい」

「それじゃわざわざここまで観に来る意味がないんじゃない……」
「私もいまいわからんが、この場にいるということが重要なのだそ
うだ」

そういうものかと思いつつ、視線を前に戻す。放射線状に並んだ出場者の前には演壇が設えてあり、先程まではそままでアスタリスク市長が挨拶をしていたのだが、ちょうど入れ替わりで壮年の男性が現れた。

「……諸君、おはよう。こうしてまた今年も君たちの勇壮な姿を見ることが出来て嬉しく思う。そして今年からこのアスタリスクへやってきた者には初めましてと言っておかなければならないね
《星武祭》運営委員会委員長、マディアス・メサだ」

男性はよく通る落ち着いた声でそう挨拶すると、にこりと人懐っこい笑みを浮かべる。

「あの人が運営委員長？随分と若いね」
「確かにな」

「マディアス・メサは星導館のOBだぞ？」
「へえ」

綾斗物珍しそうにその人を見た。

「歳は忘れたが若いのは確かだな。まだ四十には届いていまい。学生時代には《鳳凰星武祭》を制した程の実力者だ」

「なるほど、道理で……」

静かでどっしりとした星辰力は、抑えられていてもその強大さが十分に感じられた。

「運営委員長としてもかなりのやり手だな。就任したのは数年前だっ

たと思うが、改革派の筆頭として新しい制度の制定やイベント、レギュレーション変更を次々で行っている。おまけにどれも高評価だ」「うちのOBってことは銀河の幹部ってことだよな?」

「名目上はな」

「名目上?」

その言い分に綾斗が首を傾げると、ユリスはつまらなそうに答える。

「マディアス・メサは《鳳凰星武祭》^{フェニックス}で優勝した際、卒業後の運営委員会入りを望みとしたそうだ」

「変わったヤツもいるものだな」

刹那もつまらなそうにそう言った。

優勝者には統合企業財体がいかなる望みでも叶えるというのが《星武祭》^{フェスタ}の根幹条件だが、そのシステム部分に当事者が食い込んでくるのは、運営側にとってはあまり面白くない事態ではないだろう。

「入っただけでどうにか出来るような世界ではないが、学生時代から色々と根回ししていたとも聞くな。私も何度か顔を合わせた事はあがるが、なかなか食えない男だぞ、あれは」

「だろうな……」

刹那は眺めるようにドームの天井を見るが、誰かからの視線を感じ、その方に目をやる。

(ん……?)

一瞬。ほんの一瞬、マディアスの視線が自分を捉えていた……とは言えないが、そんな気がしたのだ。

「……とはいえ、あまりここで長々と話しても興を削ぐだけだろうから、あと一つだけ諸君に重要なレギュレーションの変更を伝えて終わりにしようと思う。まあ、学園側には通達済みだし、その辺りから一部漏れて伝わっているようだけどね」

「あれ? そう言えばクロードディアは?」

「ああ、会長なら」

刹那が指を指した方向を見ると、マディアスが立つ演壇の下に、六角形の床が設えてあり、その六角形の端に各学園の生徒会長が向き合

うように対面していた。

「元来煌式武装^{ルックス}にはこれといった制限を設けてこなかったのだけれど、技術の進化というのは目覚しく、色々と不都合な部分が出てきたわけだ。具体的に言うと、自立機動^{モビリティ}する機械を武器としてどう扱うか」

これに真つ先に反応したのがやはり紗夜だった。先程まで立ったままうつらうつらしていたのに、今では真剣な表情で前を睨んでいる。

「諸君に出来るうる限り自由な場を提供するというのが我々運営の基本理念ではあるのだが、例えばこれを放置する個人が複数の自立機動兵器を武器として持ち込むことも可能になってしまう。これは流石によろしくない。……ああ、もちろんそれが《魔女^{ストレガ}》や《魔術師^{ダンテ}》の能力であるというなら話は別だけどね」

マディアスは流石に話慣れているのか、適度な間を挟みながら丁寧に説明を続ける。

「かといって武器の数に制限を設けるのは論外だ。自立機動兵器の使用を禁止してしまえば話は早いが、先程述べたように安易な制限は我々の望むところじゃない。それは停滞に繋がり、やがて衰退を招くだろう。そこで……これはあくまで次回以降の議論の参考とするための措置であることを理解してもらいたいのだけれど……今回に限っては『代理出場』という形を取ることにした」

途端に会場がざわめき出した。学生たちだけでなく、観客席も色めき立つ。

「賢明なる諸君には、これが特定の学園を有利にするのではなく、むしろ近い将来の平等性を確保するためのものであることは分かってもらえると思う。我々は常に、諸君にとって最善の道を用意するため、全力を尽くしていると信じてほしい」

ざわめきが収まるのを待ってさらに続けると、マディアスは今度は観客席に向かって大きく手を広げた。

「そして……《星武祭^{フェスタ}》を愛し、応援して下さいる諸氏には、これがまた一段階進化した新たな《星武祭^{フェスタ}》へ繋がるものである事をご

期待頂きたい。《星武祭》^{フェスタ}は常に世界で最高のアミューズメントであり、無二の興奮と感動を生み出すステージであり、そして魂を震わせる至高のエンターテインメントなのだから！」

高らかな宣言と共に、観客席から怒涛のような拍手が一斉に起こる。観客はとにかく盛り上がりたがればそれでよいというノリなので、新しい試みはとりあえず歓迎する傾向があるとクロロディアが言っていたが、まさにその通りだ。

一方で、対照的に選手陣は冷めきっていた。どう考えても面倒事が増えたのだから無理もない。マディアスは挨拶を終えると、にこやかに手を振りながら演壇を降りていく。

それからもうしばらく退屈な式典が続き、出場者たちは正午が近くなった頃によく解放された。

『それではこれで第二十五回《星武祭》^{フェスタ}及び第二十四回《鳳凰星武祭》^{フェニクス}の開会式を終わります。本日《鳳凰星武祭》^{フェニクス}に出場されるAブロックからIブロックまでの選手は、規定の時間までに該当ステージへ移動してください。繰り返します、本日よりー』

「えーっと、俺たちはこのメインステージが会場だから特に移動しないでいいんだよね？」

一回戦は四日間に渡って行われるが、綾斗たちの初戦は初日である今日だ。

「あ、刹那！君はどこが会場なの？」

「うん、どうやらこのメインステージが会場らしいが会長がまだ戻ってきて無くてな。一回戦の一発目が俺たちなんだが……」

「それって昼食後すぐじゃないか」

「すまないが先にみんなで食べていってくれ。会長を見つけたら合流する」

「了解したよ」

そう言って刹那は人混みの中をなるべくぶつからないように早歩きした。

しばらく探し、ようやくその姿を視界の隅で捉え、駆け寄る。その他に五人の男女がいた。

「あ、会長！」

「あら、刹那。どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもない、あんた、試合の時間把握しているのか？
リースフェルトたちが待っている」

「あらあら、もうそんな時間ですか」

刹那は軽く上がった息を整えながら、クローディアを見た。そこには、各学園の生徒会長が面を合わせている。

「おや、ミス・エンフィールド。君も参加するのかい？」

「ええ、彼は私のパートナーです」

「……どうも」

ぎこちなく挨拶をする。しかし、金髪の青年は愛想のない刹那に優しく微笑んだ。

「何とも頼もしいパートナーだね」

「ええ、それはもう」

「儂も出たいのう」

「あら、公主はまだ規定年齢に達していないのでダメですよ？」

「むう……」

今度は童女がむくれる。その胸には界龍ジエロンの校章『黄龍』があった。

「女狐め、今度は何を企んでやる」

「あら、人聞きの悪い。何かを企んでいるのはそちらでは？ 黒豚さん♪」

顔は笑顔なのにサラツと酷いことをいうクローディア。流石、ザ・腹黒と言ったところか。

「クローディアさん、頑張つてね！ 私も及ばずながら応援してるから！」

「ありがとうございます、リユーネハイムさん」

(リユーネハイム?)

はて、と小首を傾げる。どこかで聞いたことがある名前だが中々思
い出させない。綾斗から説明を受けた気はするのだが……。

しかし、改めて見れば何とも美しい。いや、美しいを通り越して最
早人間ではないのでは、という疑問さえ浮かばずにはいられない。そ

れ程、彼女の存在感は違っていた。紫の髪と息を呑む程に整った顔立ちには、華やかで圧倒的存在感を放つには十分すぎた。

「そっちの君は初めましてだよね？」

「え？ああ、はい。まあ……」

考え事をしていた所に急に話を振られ、刹那はたじろぐ。

「初めまして。クインヴェール女学園の生徒会長をやってる、シルヴィア・リユーネハイムです」

「ご丁寧にも。自分は神木刹那だ」

「こちらこそご丁寧にも♪」

お互いにお辞儀をする。刹那に関しては多少ぎこちなさが残っているが、片や流石は世界の歌姫。その所作は流れるように洗練されていた。やはり、慣れていくからだろう。

「……と、こんな所で油を売っている場合ではなかったな。行くか、会長」

「ええ、参りませうか。それでは、皆さん。ごきげんよう」

二人はそのままその場を後にした。そして残された面々は面白そうに呟く。

「彼が、噂の《閃光》かな。なるほど、確かにかなり強いね。彼は……公主にはどう見えたかな」

「中々面白そうな小僧だったわい」

「ふん」

「へえ、彼が神木刹那くんか」

シルヴィアは楽しそうにその名前を呟いた。

『……それでは本日の第一試合、Aブロック一回戦一組の試合を始めます！』

「緊張しているか？会長」

「はい、多少は」

「そうか、初戦は俺がいく。その間に緊張を取っておいた方がいいな」

「分かりました、それでしたらよろしくお願いします」

「ああ」

二人は顔を見合わせ、前を向く。

広大なステージに実況アナウンスが響き渡る。一瞬遅れて天地を揺るがすような大歓声が沸き上がり、無数のライトが縦横無尽に舞い踊る中、刹那とクローディアはゆっくり入場ゲートからステージへ足を踏み出した。

『さー、まず姿を現したのは星導館学園の序列九位である神木刹那選手と、序列二位のクローディア・エンフィールド選手！神木選手は最近序列九位になったばかりのため、私たちのほうにもほとんどデータがないというまさに超新星です！』

『今現在出回っている動画も少ないため、その実力は未知数ツス。期待したいツスね』

『何でも何でも神木選手は純星煌式武装の使い手という情報が出回っています、チャムさんはご存知ですか？』

『私も今日初めて知ったツス。何でも強力な純星煌式武装とは聞いたツスけど、あたしもこの目で見たことないんで実の所は分からないツスねー』

『なるほどなるほどー。それに加えてタッグパートナーはあの《千見の盟主》バルカ・モルタこと、エンフィールド選手ですからね。優勝候補の一角と言っても過言ではないでしょう！』

『エンフィールド選手も神木選手同様、純星煌式武装の使い手ツスね。未来視の能力を持つ双剣型の純星煌式武装《パンドラ》は中々厄介な代物ツス。一筋縄で行かないのは確かツスねー』

『何にせよ、この二人の試合な注目ですね！それでは続いてレヴオルフのタッグですがー』

実況の解説のやり取りはまだ続いていたが、クローディアは刹那の横に移動し、小声で話しかけてきた。

「注目だそうですよ、刹那」

「おちよくっているのか？会長」

少し困ったような顔の刹那を見て、クスクスと笑う。

「まさか。流石に慣れてますね」

「まあ、《蝕武祭》エクリプスでも似たような経験があるからな。会長も緊張して

「いないように見える」

「これでも生徒会長ですよ？人前に立つのは慣れてますから」

「そう言って観客席に向かって手を振ると更に歓声が沸き上がる。」

「そういうパフォーマンス、したほうがいいのか？」

「気まぐれです。ーと、そろそろ準備をしましょうか」

クローディアと刹那は前を見据える。

見れば反対側のゲートから現れた二人組の青年が、すでに煌式武装ルークスを起動させていた。どちらも身長は同じくらい、そしてどちらも銃型の煌式武装ルークスを構えていた。

刹那はホルダーから《正宗》の発動体を取り出す。

『おおっと、そろそろ試合開始時間が迫ってまいりました！果たしてこの一戦、勝利を掴むのは星導館かはまだレヴォルフか！それではいよいよ本日の第一試合がスタートです！』

実況の声に呼応するかのように、胸に着けた校章が発光する。《星武祭》フェスタ時の処理は完全に自動化されているため、普段の決闘時のように宣言や同意は必要とされない。

『《鳳凰星武祭》Aブロック一回戦一組、バトルスタート試合開始！』

校章の機械音声が試合開始を告げる。

「それでは私は後ろで見えますね」

「了解」

データによれば二人共遠距離戦闘を得意とする狙撃手だ。スナイパーもちろん近接特化の刹那にとってはやりにくいにはやりにくいのだが、それは攻撃をされた場合の話。ならば、させなければいいだけの事。

《正宗》を起動させ、漆黒の太刀へとその姿を変えさせる。

「……………」

一瞬、《正宗》に気を取られ手が止まる。

刹那、風が奔った。

「な、どこにいった!？」

「消えたのだ!？」

しかし、気配に気づいた時にはもう遅かった。彼らが後ろを振り向いた時には既に、発動体をホルダーに閉まっている刹那が映った。

「は、はは！勝負はまだ……！」
『バッジブローケン
校章破壊』

「……………は？」

「え……………？」

確かに、機械音声はそう言った。

「さて、戻ろうか。会長」

「ええ、昼食もまだですしね」

二人には唐突に刹那が消えたようにしか感じられ無かったのかも
しれない。が、僅かな間の後、二つの校章は乾いた音を立てて割れ落
ちていた。

……二人の間を駆け抜け抜けざま、刹那が神速の斬撃を放ったの
だ。

『エンドオブバトル ウィナー
試合終了！勝者、神木刹那&クローディア・エンフィールド』

静まり返った会場に機械音声だけが響いた。

第12話 四色の魔剣

「神器」
イノセンス

それは、神にも等しい力を持つ七つの純星煌式武装オーガルククスの総称である。
インバルティア
落星雨時からこの世に存在し続け、その形状は変化することはない。
明確な意思を持っており、使い手を自ら選ぶ。「神器」の使い手に選
ばれた者は《神星世代》ネヒユラスレイドと呼ばれ、《星脈世代》ジュエネステラとは一線を駕す存在に
区分される。刀、剣、細剣、銃、斧、槍、鎌、双剣の八つの「神器」
が存在し、いずれも使い手に絶大な力を与える。

現在、四つの名前のみ判明。

—————

静寂が支配するシリウスドームに、淡々と響き渡った機械音声の試
合終了の宣言。観戦する暇さえなかったこの一瞬の試合に観客はお
ろか、実況、出場者までもが驚愕した。試合開始から僅か六秒。文字
通り、『瞬殺』であった。

どれ程の間の後だろうか、それもやがて堰を切ったように大歓声が
包んだ。

『………、これはすごい！《鳳凰星武祭》フェニックス史上最速のタイムを
叩き出しました！試合開始から十秒も経っておりません！』

『お見事、としかないっすね』

『その強さもさる事ながら、なんと行っても星辰力プライナの流れを感じさせ
ず、あの脅威的な初速を生み出す見事な制御能力！素晴らしいですね
！』

『あれは制御能力は関係ないっす。神木選手自身も星辰力プライナの制御は苦
手と公言してるっすからね。あたし達に感じられなかったのは
その程度の星辰力プライナしか使わなかったからっす。わかりやすく言えば、
大体コップ半分位の星辰力プライナしか使わなかったって事っすね。残りは
恐らく、自分の身体能力っす』

『え!?コップ半分位の星辰力プライナと人間の身体能力だけであんな速くなる
んですか!?!』

「ふふ、さすがですね」

満足そうか笑みを浮かべるクロローディアとハイタッチをし、二人は会場を後にした。後ろでは、レヴォルフのタッグが呆然と立ち尽くしたままだった。

「この後は勝利者インタビューがあります。どうしますか？」

「その手は苦手だ。任せてもいいか？ 適当にはぐらかしてほしい」「わかりました」

おもむろにクロローディアが刹那の腕に抱きついてきた。

「カッコイイ彼氏を持った気分です♪」

「何をバカな事を……」

刹那はため息をついた。チラツと視線を移し、少女を見るがその顔はいつもの営業スマイル的なものではなく、心からの笑顔なのに気づくと尚更腕を解けづらくなり結局されるがままになってしまった。

—————

「い、いやあく、まさかとは思ってたけど……強すぎっしょ……」

英士郎はなんともいえない表情でスクリーンを覗いていた。先程の刹那たちの試合だ。

控え室で一緒に覗いていた綾斗ペアと沙々宮ペアも改めて、彼の規格外な力を目の当たりにした。今の時点では、仮に戦ったとしても勝てる算段が全く思い浮かばない。

「まさか、私たちとのトレーニングでは全力の欠片も出していなかったな、アイツ……」

「本戦まで当たりたく無い相手ナンバーワン」

「安心しろ、トーナメントで覗れば予選では当たらん」
すると控え室の扉が開いた。

「腹が減った」

刹那がそう言い、クロローディアはピースサインをする。先程の試合で勝った人の言葉とは思えない拍子抜けな言葉だった。

「お、おかえりなさい！ お二人共、おめでどうございますー！」

「刹那ー、こっちこっち」

紗夜が手招きをし、隣に座るとずいっとおにぎりを渡してくる。

「食べて」

「ああ、いただきます」

巨大なおにぎりを黙々と食べる刹那を見て紗夜の顔に笑顔が現れた。

「おいしい?」

「うん、うまい」

「そうかそうか、それはよかった」

「くっ……沙々宮の奴、弁当で好感度を上げに行つたな……?」

「ではでは、私はお菓子でも作って明日持っていきましようか」

「何、だと……!?!」

クローディアの発言にユリスは固まった。

「ユリス?大丈夫かい?」

「あ、ああ……」

すると、会場にアナウンスが流れる。

『……はいはい、というわけでこちらは第二十四回《鳳凰星武祭》第一試合会場であるシリウスドームです。早くもAブロックの第一試合が終わってしまいましたが、改めて自己紹介です。実況はABCアナウンサーであるわたくし梁瀬ミーコ、解説は界龍第七学院OGであり、現エグゼクティブ・アラドファルの部隊長であるファム・ティ・チャムさんでお送りします』

『ども、よろしくお願ひするっす』

『さてさて、今更ではありませんが、基本ルールのおさらいをしておきましょう!試合の決着はペア両名の校章が破壊された時点、または意識消失、ギブアップなどで敗北判定がなされた場合に、校章を通して勝敗が宣言されまーす』

『そのあたりがリーダーがやられたら負けとなる《獅鷲星武祭》との違いっすねー』

空間スクリーンにはふわふわした巻き毛の女性と、黒髪を短く切り揃えた女性の二人が映っていた。どうやら前者の方が実況アナウンサーらしい。

「あ、そういえばこの他にもいろいろな会場で同時に試合が行われるんだよね？放送ってどうするのか？」

綾斗の疑問に英士郎が答えた。

「各ステージごとに放送枠があるからな。好きな所を選ぶのが普通なんだけど……熱心なファンは複数のチャンネルで同時に視聴したりするそうだけー」

「へえ」

一回戦に限って言えば、全十一のステージで一日に行われる試合は三十三。試合開始時間は少しずつズラしてあるらしいが、それでも同時にチェックするのは大変だろう。

「どうせ後で全試合まとめて放送されるのに」

「そういう方々はライブで見るのが醍醐味らしいですよ」

ユリスの言葉に、苦笑で綺凜が応える。

「あ、でもこのメインステージに割り振られているのは、有力選手だって証なんですよね？」

「へえ、そうなんだ」

「通例として注目される選手が割り振られるのは確かです。序列一位がいるペアならばまあ当然でしょう。それにロー」

クローディアはそう言うと、紅茶を口に含み、スクリーンに視線を移した。そこには丁度、このシリウスドームで試合を行うタッグの名前が表示されている。その第三試合にエントリーされている名前には、見覚えがあった。

「ローああ、彼女たちも今日ここで試合なんだ。第三試合ってことは、俺たちの次だね」

ローローエルネスタ・キューネとカミラ・パレート。件のアルルカントのペアだ。

「……」

紗夜が無言のまま体を起こし、鋭い目でスクリーンを睥む。その目には強い決意が見て取れた。よほど思うところがあるのだろう。

そんな紗夜を横目で見ながら、刹那は立ち上がって大きく伸びをする。

「まあ、いつ当たるかも知れない相手のことよりもまずは目先の試合だな」

ポンと紗夜の頭を撫でると、無言のまま頷いた。

「確か綾斗たちの初戦の相手はガラードワースの騎士候補生でしたよね」

「うん、序列三十位と四十一位だったかな」

ガラードワースの《冒頭ペー・ジ・ワッの十二人》は通称「銀翼騎士団ライフロードス」と呼ばれており、それ以下の序列者はその候補生に位置づけられている。六学園中唯一“名門”と称されるガラードワースで序列入りしているということは、優秀な学生なのは間違いないだろう。事実、データや戦歴はそれを裏付けていた。

「……だが。」

「どうだ綾斗。いけそうか？」

「そうだね……一応やるだけやってみるよ」

ユリスと綾斗は目配せをして軽く笑う。それを見た綺凜が不思議そうに首を傾げた。

「何か特別な作戦でもあるんですか？」

「いいや」

しかしユリスはあっさり首を横に振る。

「むしろその逆だ。……まあ、見ているがいい」

「……………」

『……それではそれでは本日の第二試合、Cブロック一回戦一組の試合を始めます！』

快活な声と共に、観客の怒涛の声が会場を湧きたてる。

『さー、まず姿を現したのは星導館学園の序列一位である天霧綾斗選手と、序列五位のユリスⅡアレクシア・フォン・リースフェルト選手！天霧選手はなんとこの《鳳凰星武祭フェニクス》の数週間前に序列一位になったばかり！それも旧序列一位と直接決闘で勝利して一位になったため、私たちのほうにもほとんどデータがないという本日二人目の超新星スーパースターです！あ、ちなみに二つ名の《叢雲》は星導館の生徒会長エンフィールド女史による命名らしいですよー』

『今回の《鳳凰星武祭》出場選手では唯一の序列一位っスねー。今現在出回っている動画を見る限り、かなりの強さなのは間違いないようっス。期待したいっスね』

『はいはい、資料の中にあつたので私も見ましたけど、あれっでどれも決闘なのでイマイチ不鮮明なんですすよねー。せめて公式序列戦に出てくれたらなー。あ、そうそう！その天霧選手ですが《黒炉の魔剣》という星導館の純星煌式武装の使い手らしいですが………。チャムさんはご存知ですか？』

『あー、いわゆる『四色の魔剣』の一振りっスね。有名は有名っスけど、あたしも昔の映像データでしか見たことないっス。ここ十数年、使い手が出て来なかつたくらい気難しい純星煌式武装だとかなんとか。四色の魔剣だとガードワースの《白瀧の魔剣》が一番有名っスけど、同じような防御不可の武器みたいっスねー』

「刹那、四色の魔剣って?」
紗夜が疑問を投げかけた。

「ああ、アスタリスクに存在する四つの純星煌式武装の総称だ。綾斗が持つ《黒炉の魔剣》。ガードワースの生徒会長《聖騎士》が持つ《白瀧の魔剣》。《赤霞の魔剣》は使用するだけで星武憲章に違反する恐れがあるから使用が禁止されている。《青鳴の魔剣》に関してはまだ使い手が現れていない。共通するのは、よくわかっていると思うが、防御が不可能だ。アスタリスク史上、四色の魔剣が一度に会したことはまだ無いらしい」

「ほうほう、よくわかった」
『試合終了！勝者、天霧綾斗&ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト』

機械音声が空間ディスプレイを通して聞こえてくる。どうやら綾斗たちも常勝らしい。

「常勝、みたいだな」

「次は沙々宮さんたちですね」

クローディアの言葉に紗夜と綺凜が真剣な表情で頷いた。

(四色の魔剣か。《星武祭》^{フエスタ}に出る以上、いずれは刃を交える事になる。絶対防御不可の魔剣か……《黒炉の魔剣》^{セルベレスタ}が熱による防御不可の能力に、《白瀧の魔剣》^{レイグレムス}が透過の能力……厄介なものばかりだな)

そこでホルダーから《正宗》の発動体を取り出す。

(純星煌式武装なら防ぐ事は出来なくないが、対策を練っておいて……!?)

突然、心臓を何かに掴まれる感覚に襲われた。

——力を求めよ——

「……」

——汝の求めし力はそのにある——

視線は自然と《正宗》へと向いていた。漆黒のウルムⅡマナダイトが妖しく光る。

「俺の……求める力……」

「刹那?」

クローディアが刹那に声をかけるが返答がない。

「俺の……求める力……」^{イノセンス}「神器」……

「せ、刹那……? 一体どうしたんですか……?」

クローディアが肩を揺らすすが、ずっと《正宗》の発動体から目を離さない。

「神器」^{イノセンス}が俺を……

(これは……!)

「神器」^{イノセンス}は自身と適合率が高い人間に直接精神に干渉すると聞いているが……

(まさか、刹那が……? 世界初の適合者……?)

「……ん? あれ、何で俺は《正宗》の発動体を持つてるんだ?」

(元に戻った……まさか《正宗》が……)

「会長? 何を突っ立っている」

「え!? ああ、いえ。少し考え事を。それよりも刀藤さんと沙々宮さんの応援に行きませんか?」

「もうそんな時間か。わかった」

二人は控え室を後にした。

《鳳凰星武祭》^{フェニクス}での激闘が《正宗》の封印を解くとも知らずに刹那は戦い続ける。

更なる力を手にするために――

第13話 くすぐったい距離

シリウスドームのステージに立つ二体の人形——その内の一体は戦闘用擬形体に類似した姿をしていた。ただし通常運用されているようなそれよりも二周り大きいだろうか。二メートルを優に超える身の丈と、甲冑を纏ったようなフォルムは、機械で作られた騎士のようだ。

そしてもう一体の人形は対照的に、ほとんど人間と同じような——それも、人間の女性と見分けがつかないような外見をしていた。顔貌は完璧すぎるほど整っており、しなやかな体軀をメタリックのスーツのような装甲で包んでいる。どちらもその胸にはアルルカント・アカデミーの校章『昏梟』が飾られていた。

『さあさあ、いよいよそのベールを脱いだアルルカントの新型擬形体！今回は……えーと、エルネスタ・キューネ選手とカミラ・パレート選手の代理出場ということですが——実際のところ、チャムさんにはどう見えますか？』

『そうっスねー。職業柄、戦闘用擬形体とは腐るほどやりあってるっスけど、あれを基準とするなら正直どれだけ性能を上げててもジュエネステラ《星脈世代》の相手は出来ないと思うっスよ。従来の戦闘用擬形体は外部から人間が操作するのがほとんどなんスけど、それじゃ反応速度の問題で絶対のうちらには敵わないっス。どうしたってレスポンスにタイムラグが生じちゃうっスからね』

『なるほどなるほどー。ただ、今回の擬形体は自律型という事ですが？』

『んー、確かに自意識を持つというか、自己判断できるレベルの人工知能というのは一応実用化されてるっスけど、それでも戦闘時の判断をジュエネステラ《星脈世代》と同レベルで下せるような性能を持つてるようなのは見た事ないっスね』

『はあ、そうですねー。しかししかし、わざわざレギュレーションを改定してまで投入されたこの二体！よもやその程度ということでしょうか……っつと、あ、ちよつとすみません……』

ふむふむ、なるほど……。えー、こほん！失礼しました！たつた今、この二体についての情報が届きました。しかもなんと、開発者であるエルネスタ・キューネ選手からです！』

『へえー、それはサービスがいいっすね』

『なんでも「本日情報解禁」だそうで。あ、それですすね、この情報によりますと、大きい方の名前が自律型擬形体試作AR―Dこと通称アルデイ、女性の方が自律型擬形体試作RM―Cこと通称リムシイだそうです』

『一応代理出場ってことは選手を付けた方がいいっすかね？』

『あはは、どうなんでしようね？』

そんな実況のやり取りを聞きながら、アルデイたちと相対しているレヴォルフ黒学院の序列十二位《螺旋の魔術師》モーリッツは忌々しげに舌を鳴らした。

「ふん、気に入りませんね……。あんな機械人形ごときが無駄に注目されて……。！」

黒髪を逆立てたモーリッツの風貌は枯れ木のようなだが、目付きは異様に鋭い。口調は丁寧で、レヴォルフの学生にしては珍しくきっちり制服を着こなしている。末席だったとはいえレヴォルフの《冒頭の十二人》本来ならば有力選手の一角として衆目を集めているはずだったが、このステージ上での主役がどちらなのかは明らかだ。「……。で、兄貴。どうしやすか？」

そう吐き捨てるモーリッツの後ろから、彼のタッグパートナーであるゲルトが煌式武装を起動させながら小声で話しかけてきた。がっしりとした体つきは厳しく、その手に持ったアサルトライフルを手馴れた手つきで肩に担いでいる。

モーリッツはレヴォルフで数十人からのグループを率いているが、ゲルトは ほんそんな舎弟たちの中でもかなりの手練の一人だ。優秀な射撃技術を持ち、前回の《鳳凰星武祭》でもこのタッグで本戦出場までこぎつけている。なにより従順で無口なところが煩わしくなくていい。

「どうするもこうするありませんよ。いつも通りです。取り敢えず

あなたはバックアップに徹しなさい」

「了解しやした」

なにしろ相手のデータがまるでないのだから作戦の立てようがない。各学園が隠し球を仕込んでくることもある《星武祭》^{フェスタ}では、情報がまるでないという相手は珍しくない。が、それにしても今回はレアケースすぎる。

「そこの人間ども！聞くがよい！」

空気をビリビリ震わせるような音量で、腕組みをしたアルデイがモーリッツたちへと向かって口を開いた。

「我輩の本懐は勝利そのものではなく、マスターより授けられた我が威容を知らしめることにある！故に貴君らには一分の時間をくれてやろう。その間、我輩は指一本たりとも動かさぬ。存分に攻撃を仕掛けてくるがよい！」

その言葉にモーリッツのこめかみに青筋が走り、目が据わった。

「ぎ、貴様——！」

が、激昂したモーリッツが一步足を踏み出した瞬間、アルデイの側頭部で光弾が炸裂した。鈍い音が響き、アルデイの首が僅かに揺らいだ。

「あ……痛いではないか！リムシイ！」

「黙りなさい」

アルデイがムツとした声で非難すると、隣に立つリムシイがそちらを見ようとせず、冷徹に応える。その手にはいつの間にか大型のハンドガン型の煌式武装^{ルークス}が握られていた。

「全く、この愚図愚鈍で低脳無知な考えなしのポンコツ機が。一体どのような権限があつてそのような戯言を口に出したのですか？下らない世迷言をのたまう余剰エネルギーがあるなら、マスターのためを使うべきでしょう。我々はマスターの命をただ忠実に、そして確実に実行すれば良いのです。今からでもラボに戻ってメンテナンスをしてもらいなさい。いいですか、頭のですよ？ああ、ですがそれではマスターの手を煩わせる事になるのでいつそこの場で壊れて果てなさい」

アルデイと同じく……いや、それ以上に流暢な口調だった。ただしこちらの方が感情がないという部分では機械らしいだろうか。「そうは言うがな、リムシィ。この程度の輩が相手では我輩たちの優秀さ……ひいてはマスターがいかに崇高壮麗な存在かを衆目に理解させるには足りないのではあるまいか。だとしたならば、なにかこう、効果的なパフォーマンスが必要だと判断したのだが……」

「確かに、マスターの偉大さを知らしめようというのは素晴らしいアイデアです。その点は評価しましょう」

「おお！そうであろうそうですね！」

アルデイは満足そうに何度も頷いた。

「ん……？いや、ならば何故貴様は我輩を撃つたのだ？」

「何となくムカついたからです」

無表情のままキツパリ、リムシィは言い切った。

「……むう、ならば致し方ない」

アルデイは撃たれた後を擦りながら口をつぐんだ。

観客、ひいてはこの会場にいる全員が思っただろう。

(((((いいんかい……)))
と。

「さて、人間たちよ。欠陥駄作機の戯言とはいえ、一度口にしたことを撤回したとなれば、マスターの顔に泥を塗りかねません。故に、不本意ではありますが私も一分間はあなた方に対して攻撃行動を行わないと約束しましょう」

その言葉にもはや怒りを通り越したのか、モーリッツの顔には呆れたような嘲るような薄い笑みが浮かんでいた。

「……は、ははっ！そうですね、なら遠慮なくお言葉に甘えさせていただきましょう」

よくよく考えてみれば、わざわざわ相手が不利な条件を提示しているのだから怒る必要もない。舐められていること自体気に入らないが、そんなもの《星武祭》^{フェスタ}での一勝に比べれば些細なことだ。

「ゲルト、あなたはあの細い方をやりなさい。私がデカブツをやりませ」

「了解」

背後に控えたゲルトが小さく頷く。

『さあさあ、なにやらすごい事になってきましたが、そろそろ開始時間です！注目の一戦、果たして勝利はどちらのタッグが手にするのでしょうか！』

『《鳳凰星武祭》Hブロック一回戦一組、試合開始』

機械音声が高らかに響いた。

—————

かくして綺凜と紗夜の試合も勝利という形で終わり、その帰路に付いていた。時刻は丁度正午を回っており、不思議な事に自然と空腹を感じるのだから人間というのは不思議なものだ。

星導館の控え室に着くなり、ユリスはソファに腰を下ろした。

「ふう……やはり暑いな」

「初夏だからな、仕方ない」

刹那は飲み物を差し出した。綺凜と紗夜は勝利者インタビュー、クローディアは用事があるという事で学園に戻り、綾斗は綺凜と紗夜と一緒に戻るそうだ。確かに紗夜と一緒にでは迷いかねない。綾斗がいるのであれば、心配は無用であろう。故に今は二人つきりである。

(こ、これはチャンスだ……！)

「ん？そういえばもう昼か。どこか軽く済ませに……」

「おほんっ」

ユリスわざとらしい咳払いをする。

「リースフェルト？」

「あ……実は、その……なんだ。今日は、こういうものを用意してきたんだが……」

ユリスはそう言っていると、控え室のロッカーから大き目のバスケットを取り出してきた。

「これは、弁当か？」

「う、うむ。まあ、そんなところだ」

これはまた珍しい事もあるものだ。まさか、あのユリスが料理をするなど誰が想像出来ただろうか。

「まさか、リースフェルトが弁当を作るなんてな」

「なっ……ば、馬鹿にしているのか!？」

「まさか」

ふと、刹那は優しく微笑んだ。

「ありがとう、リースフェルト」

「う、うむ……」

突然の笑みに顔が熱くなるのを感じる。今日の自分はどこかおかしいのだろうか。

「じゃあ、早速食べるか」

「か、簡単なものだぞ。あまり期待されても困る」

バスケットを開いてみると、そこには可愛らしいサイズのサンドイッチが並んでいた。

「お、サンドイッチか」

器材はハムとレタス、たまごやベーコンなどの定番ラインナップだ。そこからたまごサンドを一つ手に取り、口に運ぶ。

「……ど、どうだ?」

おずおずと訊ねてきたユリスの顔には、不安の色がありありと浮かんでいる。

「ああ、美味しいよ」

率直な感想だった。そこには世辞も無ければダメ出しもない。そういう所を躊躇いもなく言ってくるから調子が狂うのだが……

「そ、そうか!」

それをこみでも嬉しかった。ユリスの顔に喜色が広がるが、刹那の視線に気がつくとすぐに後ろを向いてしまった。

「どうした? 食べないのか?」

「いや、もちろん食べるが……」

ユリスはそう言うと、何か言いたそうな視線をチラリも刹那へ向けてきた。

しかしこの超絶鈍感男には、視線だけを向けても分かるはずがない。そう、もつと態度や行動で示さなければならぬのだ。

「い、いや、別段して欲しいわけではないのだが……その、

頭を撫でて欲しいと言いたいというか……まあ、撫でて欲しいわけだが……その、だな……」

「ごによごによ言葉を濁しながら言うユリスに首を傾げるが、それでも刹那は男だ。ユリスの態度から見ると、恐らく褒美が欲しいのだろうか。（初めて女心をわかった気がしている刹那くん）

そつとユリスの頭に手を乗せ、優しく撫でた。

「ん……」

「ありがとう、リースフェルト。サンドイッチを作ってくれて」

「だいぶ前から赤かったユリスの顔に更に拍車がかかるようにその色を濃くする。そして、頭に乗せていた手をユリスの肩に移動させ、振り向かせた。

「せ、刹那……?」

「……」

じつと見つめて来る彼に自分の鼓動が聞かれそうで尚更羞恥が込み上げてくる。しかし、改めて見れば……

（本当に整った顔だ……まつ毛も長いし、顔の線も細いし、唇だっ
ていい形だし……）

見とれかけていたところに刹那から声をかけられた。

「リースフェルト、はい」

「んぐ!」

突然口にサンドイッチをねじ込められ、思わず詰まりそうになるが何とか咀嚼していく。

「おいし?」

「まあ、我ながら中々いい出来、だな……」

そうは言ったもののサンドイッチの味より目の前の少年の顔が近いことに意識が集中してしまい、先程から胸の鼓動が鳴り止まない。しかも先程の「おいし?」という尋ね方ときたらなんだ。小首を可愛らしく曲げ、若干覗き込むように見てくるのだ。撮影するものがあるならば是非とも撮りたい。残しておくべきだ。普段は冷静であり笑わないのにこういう時にああいう表情をするのは些かずるい。これ

がまた無意識なのだから、尚更タチが悪い。

「将来はいい嫁になれるな」

「ぶふっ……!」

その言葉に飲み込みかけていたサンドイッチを吹き出しそうになった。

しかし、彼がそう思っていた事にユリスは驚いた。隣でサンドイッチを美味しそうに食べる少年の横顔を見上げる。そして、思わず口からこんな事が出ていた。

「も、もし……私が見知らぬ人の、その……お嫁になったら、お前は……どう思う……?」

(な、何を言っているんだ私は!?)

今更撤回は出来ない。ここは、彼の回答を待とうと思い、そのまま俯く。

今の自分の顔はすごい事になっているだろう。

「そうだな……」

その一言にビクツと肩を揺らす。

「お前が選んだ奴なら俺はどうもしないさ。幸せになってほしいからな。だが、きつと寂しいと思う。出来れば、皆とずっといたいからさ」

予想外の答えにユリスの目は丸くなる。刹那の顔もいまいちこれだ、という答えが出なかったらしい。でも、何とか言葉にしようと必死に考えたのだろう。それが今の言葉だと思いと急に胸が苦しくなった。自分も皆と一緒にいたい、と口に出れたらなんと楽な事か。まだまだユリスの口は素直になれないらしい。

「ふふ……」

「リースフェルト?」

「いや、何でもない」

「……」

ユリスは、少なくとも刹那は見た事が無いくらい笑顔を見せていた。何故だろうか、どこか亡き母親に似ている。

「さあ、もつと食べてくれ」

「ああ」

少し開いたドアの隙間から映像ディスプレイが録画されていた。

「ほほー、お姫様もこんな顔すんのかー」

映像ディスプレイには先程の満面な笑みのユリスと、その顔を見て少し驚く刹那が映っていた。やはり、美少年と美少女は何をしたって映えるものだ。その映像の部分で止め、それを保存する。

「やれやれ」

完全に出るタイミングを失った英士郎はドアの隙間を見て、肩を竦めた。

「また少し外を散歩してくっかー。それにこれを見せたら何か面白くなりそうだしな！」

英士郎の策略により、その映像で修羅場が起こるのはもう少し後のお話。

第14話 《吸血暴姫》

シリウスドームではAブロック二回戦が行われていた。フィールドを駆け抜ける一つの影に観客は多いに盛り上がる。

「くそっ！速すぎる……!!?」

対戦相手の零した言葉を皮切りに、刹那は深く踏み込んだ。射撃武器による定点からの攻撃を潜り抜けた先には、驚愕に染まる顔と無防備の身体があつた。

「しまっ……」

後ろへ飛び退こうとするが、更に踏み込み校章目掛け一閃を放つ。

『校章破壊』

乾いた音と共に機械音声が判定を下した。

片方のパートナーが敗れたのに火がついたのか、もう片方のパートナーが自分目掛け乱射した。下手な鉄砲も数打ちや当たると言ったところだろうか。煌式武装ルックスを構え直したところで、刹那のパートナーが前に躍り出た。

「少しは私も働きませんと」

「あの数の銃撃、防げるのか？」

「フフ」

そう微笑んだクロードイアは、両手に持つ一対の双剣を広げ刹那に聞こえる程度の声で囁いた。

「……矮星双舞メント・モリ」

瞬間、一対の双剣が閃いた。眼前に迫る驟雨の如き銃撃を両手の双剣を振るうことで全て打ち落としたのだ。目にも留まらぬ速さで繰り出されたその剣技は、観客の目にはどう見えていたかは定かではないが、恐らく止まって見えていたのではないだろうか。

「なに……ッ!?!」

「終わりです」

突如距離を詰めてきた美少女がそのまま横切る。その言葉の通り、対戦相手の校章、綺麗に二つに割れていた。

『校章破壊』

『試合終了!!勝利を収めたのは星導館学園、神木刹那&クロードイア・エンフィールドペアですッ!』

「お疲れ、会長」

「お疲れ様です」

二人はハイタッチを交わし、その場を後にした。

—————

————— 《鳳凰星武祭》二日目、中央区商業エリア外縁。

「えーと、プロキオンドームは……ああ、あれかな」

ふわふわと浮かぶ空間標識を確認し、その方向へと目を向けると、人の波と連なる建物の向こうにドーム状の屋根が頭を覗かせていた。アスタリスクに全部で三つ存在する大型ステージの一つ、通称プロキオンドームだ。この他に中規模ステージが七つ、昨日綾斗たちが試合を行った最大規模のメインステージが一つ、計十一のステージで《鳳凰星武祭》の予選は行われる。なお、本戦からは大型ステージとメインステージの四つを、準決勝以降からはメインステージのみを使用するらしい。綾斗とユリスは紗夜たちの試合を応援するため、プロキオンドームへ向かっている途中だった。

「それにしても、ホントすごい人だね……」

通りを埋め尽くす人混みは真っ直ぐ進むことさえままならないほどで、観光都市としてのアスタリスクの凄さを改めて実感する。通りに面したカフェやレストランはどこも満席で、空間ウィンドウを開いている人が多いのは、恐らく皆試合中継を見ているからであろう。会場によって僅かながらも当日券を用意することもあるので、それにあぶれた人たちなのかもしれない。

《星武祭》開催期間中はこの辺りの人口密度は普段の数十倍に跳ね上がる。仕方あるまい」

そう言うユリスもどこかうんざりした顔だった。

何しろただでさえ混雑していて進みが遅い上、歩いていると突然話しかけられたり応援されたり握手やサインを求められたり、想定外のケースで時間を取られてしまうのだ。

「アルルカントの人形共が話題を搔つ攫つていったとはいえ、お前も

十分に鮮烈なデビューを果たしたのは間違いない。外のファンは学内の連中と違い、学生に直接会うような機会はあまり無いからな」

一方のユリスにも時折声を掛けてくるファンがいたが、慣れた態度で全て断っていた。綾斗もそうしてしまえば楽なのだろうが、どうにも断るのが心苦しく、中々思うように出来ないのだ。

「はあ……これじゃどのくらいかかるのやら」

地下鉄の駅からプロキオンドームまではほんの僅か距離でしかないのに、牛の歩みとはまさにこの事だ。更に真夏の炎天下、じりじりと肌を焼く陽光は、情け容赦のない強烈さで、綾斗は吹き出る汗を袖で拭う。

「ふむ……刹那たちは勝ったようだな」

ユリスは空間ウィンドウを見ながら満足そうに頷いた。

すると着信を知らせるアラートと空間ウィンドウが表示された。

「もしもし」

『ああ、リースフェルトか？今から刀藤たちの試合を見に行くところなんだが今どこにいる？』

「私たちも丁度見に行くところなんだが、なんせ混雑していてな」

『そうか、わかった。こっちも休憩を挟んだらすぐに行く。また後で連絡する』

「ああ」

SOUND ONLYと表示されていたウィンドウを閉じ、一息ついた。

「刹那からかい？」

「ああ、後で合流するそうだ」

「そっか。それにしても……」

綾斗は前方を眺め、ため息と一緒に吐き出した。

「長いね……」

—————

「さてと、そろそろ行くか？」

「そうですね、この時間帯なら少しは混雑も解消されているかも知れません」

しかし、一步控え室から外に出てみれば、

「……暑いな」

「ええ、そうですね」

だがモタモタしている暇はない。紗夜たちの試合に間に合うように二人は歩き出した。

「二ついいか」

「はい、何でしょう」

「少しばかり……いや、今日はかなり暑い」

「そうですね」

「わかっているのなら、少し離れてくれないか？」

「嫌です♪」

「……」

現在二人は最寄りの駅へ向かうため、大通りを歩いている。歩いて十分程度で着くのでそこまで苦ではないのだが、なにしろこの暑さだ。おまけにクロローディアが腕を組んで歩くもので更に暑さは倍増で刹那に襲いかかる。

それにすれ違う人の注目も搔つ攫っているのだ。

「会長だって暑いだろう」

「いいえ、そんな事はありません」

こうなつてしまつてはどうしようもない。恐らくここでも動かないだろう。ため息を吐いた刹那は、遠くから聞こえる喧騒と人の怒声へと目を向けた。そこで何やら人溜まりが出来ていた。

「何でしょうか」

「行つてみるか」

こちらの方へ逃げ出してくる者も入るようで、穏やかではなさそうだ。刹那とクロローディアは人混みをかき分けながら進み、最前列に顔を出してみれば、通りの真ん中に立つ一人の少女を複数の男たちが取り囲んでいた。よく見ると地面には既に何人か男子学生たちが倒れている。どうやら本当に揉めているらしい。と言つても、正直少女と男たちとの力量差は明らかだ。煌式武装ルークスを振り回している男たちを、少女は素手で次々と倒していく。この暑さの中マフラーを首に巻き、

それが少女の動きに合わせて風に靡いていた。

「《吸血暴姫》^{ラミレクシア}ですね」

素行の悪さは聞いてはいたが、これ程までとは、と内心思い少女を見る。

レヴォオルフの序列三位——今回の《鳳凰星武祭》^{フェニクス}参加で、純星煌式武装^{オーガルクス}の使い手。

「ウルサイスか」

「さすがレヴォオルフの学生ですね。血の気が多い方たちがいっぱいで大変そうです」

《星武祭》^{フェスタ}の開催期間中、市街地での決闘は全面的に禁止されている。無論、外からやって来る人間の完全に配慮してのことだ。一応防壁を備えた場所ならば認められてはいるが、そうなると中規模以上のステージに限られる。ところがそれは全て《星武祭》^{フェスタ}で使用されているため、実質的には学園内では決闘は行えないということに等しかった。

「おらっ！見世物じゃねえぞ！」

尻尾を巻いた男たちの背中を睨み、イレーネを囲むギャラリーに向かって一喝したが、ぐるりと巡らされたその視線が刹那へピタリと止まった。

「あん？」

「……？」

そのまま鋭い視線でじっと刹那の顔を見詰める。

「へえ……今日はツイてるな。やつぱり《閃光》^{フラッシュ}じゃねえか。探す手間が省けたぜ」

イレーネは口元から鋭い牙を覗かせ、ニヤリと笑った。

どうやらご存知らしい。レヴォオルフの生徒会長の事だ、出場者全員は当然把握しているのだろう。つかつかと歩いてくると、値踏みするように刹那を眺める。取り敢えず、敵意は感じられないが絡まれば厄介なのは間違いない。

「素行の悪さに拍車がかかっているな、ウルサイス」

「そいつあ、褒め言葉かい？神木い」

「私のパートナーに何か様ですか？ 《吸血暴姫》」

そこへ少し不機嫌そうなクロードディアが割って入る。

「……チツ、《千見の盟主》か」

「今は《星武祭》の開催期間中、決闘は全面的に禁止されています。出場停止になりたいのですか？」

その言葉にイレネの目がすつと細くなった。

「ありやあ向こうから吹っかけてきたケンカだ。別にあたしから仕掛けたわけじゃねえよ」

「だとしても応戦する必要はないと思うのですが」

何故かムキになっているクロードディアとイレネの間に不穏な空気が漂い始める。正しく一触即発だ。

「会長、何をムキに……」

「おもしれえ。じゃあ、あんたならどうするのか、教えてもらおうじゃねえか！」

イレネはそう言うと、腰のホルダーから純星煌式武装の発動体を取り出し、起動させた。

「……っ！」

クロードディアは瞬時に距離を取り、身構える。次の瞬間、イレネの手にはその身長を超えるほどに長く巨大な鎌が顕現していた。

「へえ、思ったよりいい反応だな」

《覇潰の血鎌》を出すとは……穏やかじゃないな、ウルサイス」

……重力を操る、悪名名高いレヴォルフの学有純星煌式武装。純星煌式武装にしては珍しく、誰に対しても適合率が高めに出るため、過去に幾度となく《星武祭》で猛威を振るってきたのだという。もつともそれを上手く使いこなせた者となると、皆無に等しい。イレネがどちらなのかは、まだ未知数なのだが。

「引くぞ、会長」

「わかっていきます」

……ここで決闘なんて真つ平だ。

「なるほど、こういう時は逃げるのがあんた達のやり方か。まあ、賢い判断だが……」

イレーネはケラケラと笑っていたが、ふいにその瞳に凶暴な光が輝き、《グラヴィシース覇潰の血鎌》を構えた。

「あたしは狙った奴は逃がさない質でねえ………逃がすと思っただか？」

殺気が放たれ、空気が張り詰める。気を抜けば即座に斬りつけられ、ルークスような緊張感。

(煌式武装の発動体を陽動に使って逃げるか………)

勿体無い気持ちを押さえ込み、ホルダーから発動体を取り出そうとした瞬間。

「こらぁー………っ！」

そこへ場違いな声が響き渡った。

「お姉ちゃんってば、また勝手にケンカして！あれほど大人しくしていつて言ったのに、この野蛮人！」

声の主は人垣から物凄い剣幕で現れた少女だった。三つ編みに垂らした髪はイレーネと同じ色で、顔立ちもよく似ている。制服も同じレヴォルフのものであった。

「げっ！プ、プリシラ………！」

「いつの間になくなったと思えば………説明して、お姉ちゃん！」

「い、いや、それはだな………」

するとプリシラが刹那を捉えると、

「あ！お久しぶりです！刹那さん！」

「ああ、久しぶり。ウルサイス妹」

さっきの剣幕と打って変わって、人懐っこい笑顔を浮かべて刹那のもとへと近寄る。

「あの節はお世話になりました」

「いや、気にしなくていい。元気そうでよかった」

「それにまた姉がとんだご迷惑を………！」

刹那とクローディアに、慌てて頭を下げた。

「ほら！お姉ちゃんも謝るの！」

「な、なんであたしが………！」

「いいから謝りなさい！」

「は、はい………！」

悔しそうに不承不承に頭を下げた。

「全く、刹那さんにお世話になった事あるのにまた勝手に喧嘩しようとして！今度したらご飯抜きだからね!？」

「え!?なんでだよ！」

「うるさいっ！」

「あう………！」

正座しているイレ―ネを叱るプリシラの光景は、悪さをした犬を躪ている飼い主のようだった。

「ほんつとうにすみませんでした！よおおおおく、言い聞かせておくので………！」

「あ、ああ。お手柔らかにな」

「今度、ご馳走させて下さい！姉がご迷惑をかけた代わりと言ってはなんですが………そちらの方もご一緒に」

「あら、いいんですか？」

「はい！もちろんです！」

「ちくしよー！覚えてろ、神木！プリシラは渡さねえからな！今度会ったらぶつ潰してやる！いいな！それまで負けんじゃねえぞ！わかったな………っていだだだだだ！プリシラ、そこ耳！耳引っ張ってる！」

ズルズルと引きずられるように二人はその場を後にした。妹の尻に敷かれている姉とは何とも………。

「嵐だな」

「それにしても刹那は、たくさんの女性と知り合いなんですわね」

「ああ、まあな」

刹那は気づかない。地雷を踏んだことに。

「あら。悪びれもなくよくもまあ堂々と」

「え？」

嫌な汗が出てくる。何か変な事でも行ってしまったのかと必死に考えを巡らせる。

「ちよーつと、お話ししましょうか？」

「え、いや、あの、会長、さん……？」
「来なさい」

首根つこを掴み、こちらもズルズルと最寄りの店の中へと消えていく。出てきた頃にはすっかり日が傾き、刹那は洗脳されたかのように「カイチヨウ、サイコー」と真顔で言っていたらしい。それを見たユリスにより正気に戻った刹那は、学んだとき。

クローディア程恐ろしい女はいないと。

皆も、女性の前での発言には気をつけようっ！

第15話 力と代償

「いいか、ランディ。焦るなよ」

レスター・マクフェイルは《ヴァルディッシュユレオ》を構えながら背後のランディ・フックにそう声を掛けた。

「わかってるよ、レスター。まずは出来るだけ時間を稼ぐ。そうだろうか？」

「ああ。お前はしつかり牽制してくれりやそれでいい。後はオレが何とかする」

時間稼ぎとは自分らしくもない作戦だが、この際は仕方がない。なにしろ相手はレヴォルフの序列三位。認めたくはないが、自分よりも遥かに格上だ。

「……よお、あんたレスターって言ったよな」

すると対戦相手……イレーネ・ウルサイスが妙に気軽に声を掛けてきた。既に試合開始が宣言されていると言うのに、巨大な鎌……《グラヴィンシズ覇潰の血鎌》を肩に担いだまま、構えも取っていない。

「……オレになんか用かよ」

レスターは用心深く間合いをはかりながら短く応えた。ここしばらくの出来事からレスターが学んだことは、蛮勇の排除。如何なる時も冷静さを欠いては元も子も無い。

「そう身構えんなよ。あんた、《閃光》と《叢雲》のダチなんだろ？いい機会だからさ、ちよいと話を聞かせてくれよ」

「ああ？」

予想外の質問に、レスターは思わず眉を顰める。

「別にさほど興味があるわけでもねえが、せっかくだからな」

「……なんでそんな事を聞きたいのかは知らねえが、てめえの勘違いを二つ指摘してやる。まず一つ、オレとアイツらはただ単に同じ学園の学生ってだけでダチでもなんでもねえ」

呆れた口調でそう言ったレスターは、《ヴァルディッシュユレオ》を構え直し、イレーネへ突きつけた。

「そしてもう一つ。オレはここへ闘いにきてんだ。くだらねえ茶飲み

話をするためじゃねえんだよ！」

「ははっ！確かにそいつはそうだ。そうかいそうかい、そいつは失礼したな」

イレーネは肩を竦めると、《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》をくるくると回してからその石突きを地面へ突き立てた。

「そんじゃあ、お望み通り始めるとしようぜ。せいぜいー」

イレーネの顔に凶悪な笑みが浮かび、《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》が獣のような唸り声を上げる。

「足掻けよー！」

「ランディ！走れ！」

レスターはそう言いながら、自分も駆け出していた。といっても、見境なしに突っ込んだわけではない。右手から大きく回り込むようにして、距離を取りつつ隙を伺う。イレーネの使う《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》は重力制御の能力を持つ強力な純星煌式武装だ。

だがつけ込む隙がないわけでもない。まずは何と言っても、その能力が既に広く知れ渡ってしまっているということ。おかげである程度対策は打てる。

どうやら《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》の能力は対象そのものを指定するのではなく、対象座標に対して能力を発揮するタイプらしい。つまり同じ場所に留まらず、常に移動し続けていればその効果は受けなくて済む。

そして《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》の最大の弱点ともいえるのが、その燃費の悪さ。

(この勝負、長期戦になればなるほどオレらの方が有利だ！)

そう踏んでいたレスターは隙を伺い続けた。

—————

「まずいな、レスターの試合が始まっている」

「レスターの対戦相手って……」

「ああ、あの《ラミレクシア吸血暴姫》だ」

刹那の切羽詰まった声に綾斗は息を呑む。

確かに《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》はその燃費の悪さが最大の弱点だ。そして、使い手に求める代償は血液。《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》を使えば使う程、血液を抜き

取られ最後は血液の枯渇により病院送り。それが、歴代の所有者の末路だった。酷い時は死人まで出たそう。だが、そんな危険な純星煌式武装オーガルクスをなぜイレーネは使おうとする？血液を抜き取らない対策法でも編み出したのか。刹那には引つかかってしまっただけがないのだ。

(自身の血液を抜き取られないようにするには、アレを使わないか、外部からの定期的な供給が必要……外部?)

そこで答えは見えた。外部、つまりもう一人のタッグパートナー。

「まさか……!!」

刹那は猛スピードでシリウストームへと駆けた。

「刹那!」

ユリスの声に耳も貸さず、ただ駆けた。もし、レスターが長期戦を目論んでいるならそれは間違いだ。もしイレーネが《グラヴィティ覇潰の血鎌》のデメリットを補える手段を持っているとしたら。弱点の長期戦も戦える状態だとしたら、むしろ危険なのは……

(レスターたちの方だ!)

形が見えてきたシリウストームを捉え、更に速度を上げる。まだ、間に合うかもしれない……

そんな小さな希望を持ち、シリウストームの中へ、更にメインステージの観客席へと上がり、最初に刹那の耳に入ってきたのが……
『リザイン降参。』エンドオブバトル 試合終了、ウイナー 勝者、イレーネ・ウルサイス&プリシラ・ウルサイス』

機械音声のその言葉だった。

—————

「刹那!レスターたちは……!」

綾斗たちの目に映ったのは、膝を付き悔しそうに歯を食いしばっているレスターを怪しい笑みを浮かべながら見下ろすイレーネ。そして、地面に倒れ込んでいるランディだった。

「レスターたちが、負けた……?」

「レスターが降参したと!」

「それ程までに強かったのでしょうか。あの方は」

「……………」

それから一同は控え室へと帰り、次の組み合わせ発表を待っていた。

(もし、ウルサイスが妹の血を吸っているとしたら、妹の方が最初に限界が来るはず。なのに妹が倒れたところははまだ一度も見ることがない)

戦わないパートナー。そんな無防備なのに一度も倒れていない。例え、標的にされたとしても防御の手段を持っているとも思えない。では何故、戦えない妹をイレエネはパートナーに選んだのか……：例えば吸血した場合、その後が残るはず。だが、プリシラの首には傷跡が何も無い。治るに当たってこんな短時間では無理だ。治癒能力でも無ければ……：……

「治癒能力……………」

まさかとは思っていたが、そのまさかかもしれない。

短期間による定期的な血液の供給に常人ではまず耐えられない。供給と血液の生成が間に合わないからだ。だが、それを補える能力がプリシラにあるとしたら……

「多少の傷の修復や失った血液の生成を短時間で出来る能力。ウルサイス妹は再生能力者かもしれない……………」

「再生能力者だと？プリシラ・ウルサイスがか？」

「でしたら、先にプリシラさんを狙うのが専決でしょうか」

「いや。ウルサイスの事だ、戦う術を持っていない妹に何も仕掛けていないわけが無い。恐らく防御壁等で守っているはずだ」

すると空間ウインドウに次の組み合わせが表示される。

《鳳凰星武祭》

予選 最終試合 星導館学園 神木刹那&クロードイア・エン
フィールド対レヴォルフ黒学院 イレエネ・ウルサイス&プリシラ・ウルサイス

「まさか、ベスト十六を決める試合のトリが俺たちとはな」

「嬉しそうですね、刹那」

「ウルサイスとは一度戦ってみたかったからな」

「私たちはひとまず先に本戦への切符は手に入れた。待っているぞ、二人共」

「頑張ってください！応援しています！」

「負けるなよ」

「俺も応援するよ、頑張つて」

それぞれ激励をもらい、控え室には刹那とクローディアが残った。

「勝つぞ、会長」

「もちろんです」

二人はハイタッチを交わした。

—————

「……お姉ちゃん、大丈夫？一日に二試合なんて」

「心配すんな、三十分のインターバルを挟んでからの試合だろ？十分だよ」

だが相手は星導館の二人だ。しかも片方はディルクから預かった仕事の目標。準備は念入りにおいておいて損は無い。

「よっしゃ、一仕事片付けるとするか」

イレーネがそう言ってソファから立ち上がると、プリシラの頭を優しく撫でた。

「心配いらねえよ。何もかも、いつも通りでいい」

「うん……」

ディルクからの命令を受けるのはいつもイレーネだ。プリシラは何も知らないし、何も聞かない。ただ、必要な時に血をイレーネに分け与えてくれるだけだ。それでいいとイレーネは思う。闘い場に立つのも、手を汚すのも、自分だけでいい。プリシラは何もしなくていい。これまでずっとそうしてきたし、これからも変わらないだろう。「とはいえさすがにあの二人は並の相手じゃねえ。最初から全力でいかないとキツイだろうな」

イレーネはそう言うと、《グラサインシーズ覇潰の血鎌》を起動させた。それを見たプリシラも心得たように首筋を露わにする。イレーネの心に抗いがたい欲求が膨れ上がり、無言でその白い首筋に牙を突き立てた。

「あ……」

か細い声がプリシラの口から漏れ、生暖かい鉄の味が喉を通っていくのがわかる。——いつからだろうか。この味を甘美だと思うようになったのは。

呼応するように《グラグワイシーズ覇潰の血鎌》が喜びに打ち震える。

たつぷり一分はそうしていただろう。

イレーネが口を離すと、小さい傷跡を愛おしそうに撫でた。もつともそれも、すぐに消えていく。

「いつも悪いな」

イレーネがそう言うと、プリシラはゆつくりと頭を振った。

「ううん、これくらいどうってこともないよ。でも——」

俯くプリシラを、ぎゅっと抱き寄せる。プリシラはイレーネ脳の中で小さく呟いた。

「……ごめんね、お姉ちゃん」

「ばーか。何であんたが謝んだよ」

一つ仕事をこなせば、それだけこの手にプリシラを手繰り寄せることが出来る。デイルクは信用出来ない男だが、約束だけは破らない。

こちらにだつて譲れない願がある。その為なら悪魔にだつて魂を売ってやる。そう、あの時決めたのだ。あと少し、この《フェニックス鳳凰星武祭》で優勝すれば願いを叶えてもらえる。それまでは、闘うしかないのだ。

「時間ですね」

クローディアの声に、刹那は腰を上げる。

「ああ」

「行きましょう」

ちらりと時計に目をやり、二人は控え室を出る。

「刹那」

かつかつと音を立てて前に行くクローディアが、振り返らずに言った。

「なんだ？」

「私との約束、覚えていますか？」

「ああ、全《星武祭》^{フェスタ}の制覇、だろうか？」

「はい、それは私の願いでもあります。たとえ相手が何者であれ、譲る気はありません」

「……ああ」

「ですが……勝ち方にこだわらなくてもいいですよ」

ステージへ通じる廊下は、短いようで長い。クロードの声が反響し、後ろに流れていく。

「あなたが望むやり方で勝てるのならば、私は何も言いません。私たちはパートナーです。協力し合い、手を携えて闘う。それが普通でしょう？ユリスの受け売りですが」

「……」

刹那は足を止めてクロードを見た。同じく数歩先で立ち止まったクロードに少し俯き加減で言った。

「……ありがとう」

「いいえ」

振り返ったクロードは、笑みを浮かべていた。

「それで、何をやるつもりなんですか？」

「試してみたいことがある。出来るかどうか分からないが……
掴めそうな気がするんだ。《正宗》の本当の力を」

「……分かってると思えますが、チャンスは一度きりです。
失敗したら……」

「その時は仕方がないさ」

「結構。では、参りましょう」

二人は拳をぶつけ合わせた。

『さあー各会場で白熱の試合が続いております四回戦！このシリウスドームでのトリを飾るのは星導館学園の神木・エンフィールドペアとレヴォルフ黒学院のウルサイス姉妹です！ベスト十六に駒を進めるのは果たしてどちらのタッグなのか！』

『これも楽しみな一戦っスねー。どちらも予選はほとんど相手を寄せ付けずに勝ち上がってきてるっスから、ここが一つの分水嶺になると思っスよ』

『さてさて、ここでチャムさんにはこの一戦の成り行きを予想していただきたいと思います。イレエネ選手の使う《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》は燃費が悪いですから、やはり長期戦になれば有利なのは星導館でしょうか？』

『うーん、一概にそうとも言えないっすね。なにしろイレエネ選手にはプリシラ選手という、いわゆる補給路があるっすから。それに能力自体の比較でいえば……』

「刹那、建御黒雷神あはくれぐれも控えてくださいね」
「使わない時がくればの話だな」

二人は自身の純星煌式武装オーガルクスを起動させる。

「やる気十分だなあ、神木」

《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》を肩に乗せイレエネが、そんな刹那を睨みながら薄く笑った。イレエネ一人が前に出て、プリシラを背後に控える形だ。

「大丈夫です、私が着いています。二人でペアなんですから」

「ああ、背中には任せた」

「そんじや、こつちも全開で行かせてもらうぜえ……!!」

《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》が紫色の光を放ち、万応素マナが不気味に蠢く。

緊張感が張り詰めー

『《フェニクス鳳凰星武祭》四回戦第十一試合、バトルスタート試合開始』

機械音声_が試合の開始を告げた。

第16話 《覇潰の血鎌》

「行くぞ！」

即座に刹那は駆け出し、その後を追従するようにクローディアも続く。

「ははっ！真正面からか！」

イレーネは慣れた手つきで得物を廻し、自身も駆け出し迎え撃つ。

「おらあー！」

「っ！」

二つの純星煌式武装オーガルククスがぶつかり合い、凄まじい火花を散らす。

鏢迫り合いをしている刹那の背後からクローディアが飛びあがり、一対の剣を振り下ろす。

「けっ！」

「ぐっ！」

刹那を力任せに弾き飛ばし、《覇潰の血鎌》グラサイシーズを逆手に持ち、重力操作により衝撃の威力を高める。

「吹き飛ばえー！」

「きやあっ！」

《パン||ドラ》で防御するが、衝撃が凄まじく、そのままステージの壁へと吹き飛ばされ激突する。

「かはっ……………！」

「会長！」

再度間合いを詰める。先程とは違う速度に、イレーネの顔色が変わる。《正宗》を構え、体を半回転に捻り下段から斬り上げるが、

「おおっとー！」

イレーネがその一撃を受け止める。華奢な腕の割にまるで鋼のよううにびくともしない。

「チッ！」

刹那はそれを弾き上げ、そのまま上段から斬り下ろすが、イレーネの斬り返しがそれよりも一歩早い。咄嗟に身体を入れ替えるようにして袈裟懸けの一撃を交わし、《覇潰の血鎌》グラサイシーズの石突きで突きを放つ。

しかし、それを紙一重で躲し手で押さえつける。

「なっ！」

そのまま自分の方へと引き寄せ、がら空きの胸元、渠へと強烈な拳打を見舞った。

「がっ!?!」

「会長の分だー！」

ブラーナ星辰力を集中させた拳打をくらったイレーネは衝撃波を伴う速さで後方の壁へと激突した。

「げほっ！ちっ！あたしがここまで圧されるかよ……！」

血反吐を吐き、イレーネは《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》を一振した。

「ー！十重壊！」
ディエス・フアナガ

身体の回りに黒い重力球が出現し、

「行け！」

指示を出す。無数の重力球が眼前に迫るが、鏝迫り合いでの手の痺れで思うように《正宗》を握れない。

「こんな時に……！」

「任せてください！」

再起したクローディアが前に出る。

「メメント・モリ矮星双舞！」

無数の重力球を高速の剣技で全て斬り消した。

『ー！ー！、これはのっけから凄い攻防です！神木選手とエンフィールド選手のコンビネーションも見事ですが、それを凌いで見せたウルサイス選手もまた凄い！』

刹那とクローディアは肩を並べ、イレーネと対峙する。

「ふん、組んでー、二ヶ月の急造ペアにしちやいい動きしやがるじゃねえか」

イレーネが息を整えながらそう言うのと、《正宗》を構えながら刹那がそれに応じる。

「そっちこそ、一人でよく躲す」

「ははっ！一人じゃねえよ、こっちだつてちゃんと二人いるさ」

イレーネの瞳に凶暴な光が灯り、ニヤリと笑った口元から鋭い牙が

覗く。

「こいつはあたしとプリシラ、二人の力だ！」

《霸潰の血鎌》^{グラヴァイシーズ}がカタカタと震え、紫色の光が地面を伝う。それはまるで囓っているように見えた。

「避けて！刹那！」

クローディアが叫ぶよりも前に、刹那の足は動いていた。先程まで刹那がいた場所の空気がビリビリと震えているのがわかる。おそらく、あの辺り一帯の重量を操作したのだろう。

「ほう、それが《閃理眼》か」

「……」

刹那は《正宗》を構え直す。

人間から放たれる微弱な電磁波を読み取り、次の行動を先読みする《閃理眼》も相手には知られてしまっている。

「だが、この程度でこの《霸潰の血鎌》^{グラヴァイシーズ}を攻略したと思うなよ？」

イレエネの手の中で、再び《霸潰の血鎌》^{グラヴァイシーズ}が囓う。

（なんだーさつきから《霸潰の血鎌》^{グラヴァイシーズ}がー）

「刹那！」

「ーっ!?!」

紫色の光が地面を走るが、今度は先程よりもずっと範囲が広い。

「なにつー！」

咄嗟に重圧に備えたが、押し潰されるのではなく、逆にふわりと浮き上がる。と、同時に《正宗》が弾き飛ばされた。虚空を舞い、刹那から遠く離れた場所に突き刺さった。

「重力を強くするのはしんどいが、弱めるだけならそうでもねえのさ。だからこうして、広範囲を指定できる」

刹那はおよそ二メートル程度の高さに浮かんでいた。無重力の状態ではどう足掻いても虚しく空を切るだけ。

（やはり建御黒雷神をー！）^{タケミカヅチ}

「刹那！」

「おっと、あんたはそこで大人しくしてな！」

慌てて駆け寄ろうとしたクローディアに向かって《霸潰の血鎌》^{グラヴァイシーズ}が

振られ、その身体に重圧がのしかかる。

「ぐう……!」

クローディアは転がるように倒れ込み、立ち上がることはしてもの膝を立てることさえ出来ないようだ。クローディアの反射神経なら躲すことも不可能ではない程度の範囲だったが、刹那の元へ向かうとするその動きが完全に読まれていたらしい。

「さて、あたしは《華焰の魔女》グリューエン・ローゼほどコントロールはよくねえが、さすがに止まった的外さねえぜ。——ウーノ・フアラガ単重壊!」

イレーネの眼前に重力球が出現し、ピタリと刹那へ狙いを定める。だが、ふいにイレーネがぐりと膝を折った。

「ちいつ、さすがに三つの能力を維持するとなると厳しいな……!あれだけ補充したつてのに、もう底をつきやがったか……!」

イレーネは苦しそうに顔を歪める。とはいえ、能力自体はまだ発動している。

「まあいい……取り敢えずめえはここで終わりだ、神木!」
重力球が刹那へ向かって放たれ、まさに直撃しようとした瞬間——

遠方から飛来してきた物体に重力球は真つ二つに裂かれた。

「なにっ……!?!」

更に刹那を閉じ込めていた重力の球体を切り刻む。

そう、その正体は自立移動してきた《正宗》だった。

「《正宗》!」

呼び寄せるように手を伸ばすと、柄を掌へと収めさせた。

無重力から解放された刹那は膝をついているイレーネへ、その切っ先を向けた。

「形態移行」

《正宗》の柄が割れ更に柄が伸び、漆黒の刀身も更に伸びる。

「純星煌式武装が変化しただと……」

「大丈夫ですか、刹那」

「ああ、会長も」

「私は大丈夫です」

《グラヴィティ覇潰の血鎌》の能力が解けたのか、刹那の元へと駆け寄ってきたクローディアは僅かに片足を引きずっていた。

一方のイレーネはそんな刹那たちに視線を残しながらも、じりじりと少しずつ後退していた。おそらく血を補充するためにプリシラの元へと向かっているのだろう。

「まさかー！ー！」

「させるかー！」

足にブラーナ星辰力を集中させ、加速した。《グラヴィティ覇潰の血鎌》の能力が使えないであろう今は最大のチャンスだ。このまま黙って見ている手はない。

「雷槍・連門顎ー！」

無数の顎共に神速の突きを繰り出す。

しかしー！ー！

「ー！ー！オレアガ・ベサード重獄葦」

無数の顎と神速の突きは地面から生えるように現れた紫色の壁ー！ーいや、むしろ牢屋の鉄格子に阻まれていた。火花が激しく飛び散り、一向突破出来ない。

「おお．．．！！」

ついに拮抗が崩れ、刹那は後方へと飛び退いた。

「設置型の防御能力．．．！！」

クローディアが悔しそうに唇を噛むが、その間にイレーネはプリシラの元へと辿り着いていた。

「ははっ。こいつはあたしじゃなくてプリシラを狙おうっていう不届き者が出た時に、用心のために仕込んでおいた隠し玉だ。ちよつとやそつとじゃ壊せねえよ」

その壁の向こうでイレーネは薄く笑い、見せびらかすようにプリシラの白い首に牙を突き立てる。

「．．．．．」

「これで仕切り直し、ですね」

ため息を吐いたクローディアが時間を確認すると、試合開始からそろそろ二分。理想をいえばあと一分で片を付けたところだが．．．

「刹那。そろそろ……………」

「ああ、そうだな」

刹那も領り返し、《正宗》をぐっと握りしめる。時間的にもあまり残された時間は多くない。チャンスは一度きりだろう。

「……………よお、待たせたな。そんじや第二ラウンドといこうか」

やがて壁が溶けるように掻き消えると、イレーネが口元を拭いながら前に出てきた。その背後では、プリシラがぐったりと横たわり、荒い息を吐いている。それを見た刹那の目付きが鋭くなる。

「……………ウルサイス。こんなやり方が、本当に正しいと思ってるのか？」

「……………黙れよ、神木。そんなこたあ、今更あんたに言われるまでもねえ」

「だったらー」

「黙れつつつてんだろうが！」

イレーネが《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》を振りかざすと同時に、紫色の輝きが地面を走る。

刹那は大きく後ろに飛んで能力の発動範囲から逃れた。さつきよりも更に範囲が広がっているが、刹那も慣れてきている分だけ早くなってきたている。

「ちよこまかと……………!」

やはり力づくでない聞いてもらえそうにないらしい。

「うざってえんだよ! シエン・クエステイア百葬重列!」

イレーネが《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》を一閃させるとオーロラのように紫色の波動が走り、全てを押し潰せんと迫る。しかし、刹那はその僅かな波動の隙間から右側に回り込む。

「鳴神・早蕨!」

突き立てた《正宗・叢》から、針状に変化した黒雷が地面を這うようにイレーネへと向かう。

「ちいっ!」

横へ飛びそれを躲すが、そこには構えていた刹那がいた。

「はああ!」

「くそがあつ！」

強い衝撃音と、弾ける残光。イレーネは《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》で何とかそれを防いだが、大きく体勢を崩していた。刹那はその隙を逃がさず、《グラヴァイシーズ正宗》を《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》目掛けて思い切り振り下ろす。

「っ!？」

《グラヴァイシーズ正宗・叢》は野太刀型だが小回りが利く。しかし、《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》は大振りなので小回りが効かない。ウルムⅡマナダイトが埋め込まれた機関部へ叩き込んだ一撃は、紫色の光に阻まれ威力をだいぶ殺されてしまったものの、それなりに確かな手応えがあった。《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》が悲鳴のような甲高い音を発し、更にもう一撃加えようとしたところで、刹那は見えない力で突然弾き飛ばされた。

「くっ!」

《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》の能力だろう。刹那は即座に体勢を立て直して顔を上げたが、その視線の先ではイレーネが怒りに満ちた瞳で刹那を睨んでいた。

「……なるほどなあ。まさか《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》を狙ってくるとは思わなかったぜ……!」

「刹那、時間が……!」

「わかっている。だが……!」

今の刹那が考えうる最善の手だったが、仕損じては仕方がない。

「まったく、手を変え品を変え、色々見せてくれるもんだ。そんじやあこっちもお返しをしねえとなあ……!」

イレーネの手中的の《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》も、怒っているのかのように紫色の光を強める。

「デイエス万重……!」

しかし、イレーネの容態がそこで急変した。《グラヴァイシーズ覇潰の血鎌》を掲げたままピクリとも動かなくなっただのだ。

「……!」

その瞬間、刹那の脳裏に不吉な予感が過ぎった。同時に刹那とクローディアの手の中で二つの純星煌式武装が身震いするように蠢く。

「おねえ、ちゃん……?」

プリシラも違和感を覚えたのか、イレーネへとゆっくり近づく。

「つーよせー今のウルサイスに近づいてはー！ー！」

刹那が咄嗟に駆け出そうとした瞬間、凄まじい重圧が二人を襲った。

「うぐつ．．．．．！」

「な、なんだ、と．．．．．！」

クロードディアも刹那も為す術なく地面に押し付けられる。圧力で地面にヒビが入り、気を抜けば意識を失ってしまうほどの痛みと圧迫感が全身を襲う。《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》の重力操作ーそれはわかる。だがその範囲と威力が今までとは比較にならない。ほぼステージ全体が紫色の輝きに覆われ、立つことはおろか喋ることさえままならぬ。まるで身体の上に山が乗っているかのようだ。

何とか首だけを動かし視線をイレーネへ向けると、プリシラはイレーネに左手で抱き抱えられるようにしてぐったりしている。そして首筋には、イレーネの牙が突き立っていた。

「まさか、あれは．．．．．！」

「ああ、おそらく《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》だ．．．．．！あそこまで侵食が進んだとは．．．．．！」

イレーネの身体を《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》が乗っ取っているのだ。《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》は使用者の人格まで変えてしまう危険な純星煌式武器。オーガルクスそれを行使し続けたイレーネもいつの間にか人格を捻じ曲げられてしまったのだろう。禍々しい紫色の輝きを放つその鎌は、相変わらずカタカタと震えながら嗤っているように見える。

「とにかくこのままではウルサイス妹が危険だ．．．．．！」

プリシラは先程からイレーネに血を吸われ続けている。いかにリジエネレイティブ再生能力者とはいえども、これほどの能力の代償を払い続けるとなればそれこそ命が危ない。刹那は重圧に逆らうように立ち上がり、少しずつイレーネに．．．．．もとい《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》に向かって歩き出した。

身体は重く引きちぎられそうで、骨が軋みを上げる。踏み出す一歩が地面を陥没させ、全身を激烈な痛みが駆け巡っている。しかしどれ

だけ鼓舞しても、叱咤しても、足は重く歩みは遅々として進まなかった。ほんの十数メートルの距離が、まるで十数倍にも感じられる。意識を保つだけで精一杯だった。

それでも諦めるわけにはいかなかった。

本来、《星武祭》^{フェスタ}では意識の消失を以て敗北とみなすというルールがある。その判定は校章が生体反応を測定して行っているはずなので、敗北の宣告がされていないということは、まだ若干イレーネの意識が残っているということかもしれない。

(だとすれば、それにかける……!)

歯を食いしばりまた一步踏み出す。そんな刹那を見て、手の中の《霸潰の血鎌》^{グラヴィンズ}は嗤うばかりだ。

「《霸潰の血鎌》……!」

一種の不快感を覚えた刹那は《正宗》を握りしめ、残り五メートル先の《霸潰の血鎌》^{グラヴィンズ}を睨む。

「目を覚ませ、ウルサイス! 力はただ力ではない! 力と大切なものを混同するな!」

また一步踏み出す。

「ウルサイス! 本当に大切なものなら両手で掴め! お前に必要なものは《霸潰の血鎌》^{そっちの手}ではないだろ! 分かっているはずだ、掴むべきはプリシラだということに!」

一瞬、本の一瞬だけ、イレーネの瞳に光が戻る。

「かみ……き……!」

「っ!? ウルサイスか!」

異常な重力が掻き消え、紫色の光が陰り、世界が切り替わったかのような静寂が訪れる。

……しかし。

「うああああああああああああああああああああ!」

次の瞬間、イレーネの絶叫と共に再び先程以上の重圧が刹那を押し潰した。

「ぐああああああ!」

「刹那!」

クローディアも何とか立ち上がるようにするが何度も押し戻される。先程と打って変わって凄まじい重圧が刹那の身体を押し潰す。骨が軋み、身体中が悲鳴をあげる。肺が押しつぶされているのか、上手く呼吸が出来ない。

イレーネはそのままぐったりと項垂れ、その身体からは見る見るうちに生氣が失われていく。それでも右手の《グラウイシーズ覇潰の血鎌》を離さない。――否。離れないのである。もはやイレーネは《グラウイシーズ覇潰の血鎌》の使い手ではなく、燃料を供給するだけの部品に過ぎない。そしておそらく、それが果てれば使い捨てられるだろう。地面に石突きを突き立て、禍々しい紫の輝きを放つ《グラウイシーズ覇潰の血鎌》がけたたましく嗤う。それは一筋の希望へ手を伸ばした者の眼前でそれを刈り取り、絶望する様に愉悅を覚える悪意と嘲笑だ。

刹那是指一本動かせない重圧の中、自身の中から湧き上がる明確な怒りを感じた。

(人の尊厳を弄び、なにを……なにを嗤っている……!!)
尊厳を蹂躪するものに対する、純粹な怒り。

歯を食いしばり、《正宗》を強く握りしめると、それに呼応するかの様に《正宗》が強く震えた。自分の中の奥底にある何かと《正宗》が、完全に繋がり合う。

言葉には表せないものの、その瞬間刹那は確かに《正宗》の意思を感じ取った。そこにあつたのは……強いて言うなら人間の感情でいう「不愉快さ」。《グラウイシーズ覇潰の血鎌》に対する、強い嫌悪、不快感のよくなもの。それから刹那に対して求めるような意思。

「力を求めよ」とでもいうような――。
(そうだ。力さえあれば……今よりも強い力があれば、ウルサイスを……!)

《正宗》を杖替わりに立ち上がり、ありつたけの星辰力プラナーナを込める。
「だから、貸してくれ!お前の……ありつたけをつ!!」

刹那、紫色の輝きが支配する世界の中で《正宗》のウルム＝マナダイトが黒色の色を放つ。

「あ、あれは……!」

クローディアは目を見張った。

「い、いったい何が……」

綾斗たちもその成り行きを見守るしかなかった。

その輝きは徐々に強さを増し、じりじりと紫を侵食していく。

「封印術式展開———〈封印解除〉」

《正宗》を無数の魔法陣が囲む。抑え込むように《正宗》にまとわりついていた見えない鎖が可視化し、徐々にヒビが入る。そして、弾け飛んだ。

漆黒の刃が消え、機械的な鍔が更に展開される。柄が伸び、機械的な鍔が真ん中から割れ、中から赤黒い光の刀身が伸びた。

輝きが収束すると、そこには変異した《正宗》を握る刹那が立っていた。

魔法陣が一つ一つ消滅していき、最後の一つが消えると漆黒のウルムⅡマナダイトからは似つかわしい金色のオーラの様なものが出る。

「———「神器」開放———《真刀・神威》」

たった一振り。たった一振りで紫色の輝きが支配する世界が掻き消えた。

「あれが、「神器《イノセンス》」の一つ……」

クローディアはそれを見えるように見た。

刀とは似つかわしい巨大なそれは《黒炉の魔剣》に近いだろう。

《霸潰の血鎌》の啖いが凍りつく。

再び異常な重力が掻き消えた。———ただし、今度はその根源から。

今度こそ怒りを露わにした《霸潰の血鎌》がイレーネを介して吼えた。

「万重壊———」

本来のイレーネの声の質とは違う、機械的な発音。

「———その口で喋るな、食い殺すぞ」

万を超える重力球が一瞬にして掻き消えた。

「!?!?」

「人の尊厳を踏みにじったお前を……破壊する」

今度こそ《覇潰の血鎌》は凍りついた。一瞬にして間合いを詰め、下段から《覇潰の血鎌》を斬りあげ、イレエネの右手から離す。重力に従い降ってきたそれに向かって言葉を紡ぐ。

「刻んでやる——『死の恐怖』を」

恐怖を表すかのように、空中でも分かるぐらい《覇潰の血鎌》は震えた。

《真刀・神威》が刹那の前へと宙を舞うとその刀身を収め、残ったのは待機状態の姿だった。待機状態の《真刀・神威》を核に、万応素が集まる。それは次第に鎌の形状へと変化していった。

半透明に輝くその鎌を振り回し、構える。

「——熾烈ナル斬首」

そのまま《覇潰の血鎌》を切りつける。文字通り、ウルムⅡマナダイトを残し全てを木っ端微塵にした。そして、連撃の最後の一撃である上段からの振り下ろしをウルムⅡマナダイトへと命中させた。

一拍置いて、硝子を擦り合わせたような不協和音がステージに響き渡る。それが純星煌式武装の断末魔だと気がついた者がどれだけいたかは分からない。

何れにせよ、それが途切れると同時に《覇潰の血鎌》のウルムⅡマナダイトに亀裂が入った。

やや遅れて、機械音が決着を告げる。

『イレエネ・ウルサイス、プリシラ・ウルサイス、意識消失』

そして、振り払うと《正宗》へとその姿を戻した「神器」を握っている刹那がクロエディアへ笑みを向けた。

「……勝ったぞ」

「……全く、あなたという人は……」

クロエディアも微笑み、二人は大歓声がステージを震わせる中、ステージに倒れ込み、深く息を吐いた。

第17話 誓約

プリシラがゆっくり瞼を開くと、一番最初に目に入ってきたのは隣で椅子に腰をかけた外の景色を眺めている刹那だった。

少しの間、その横顔に見とれていると視線に気づいたのかこちらに視線を移した。

「目が覚めたか」

「せ、つなさん……」

ゆっくり身体を起こそうとするが、鈍い痛みが身体中を駆け巡る。苦悶に顔を歪めると刹那の手を借りて何とか上体だけを起こすことが出来た。

視線を巡らせると、どうやらどこかの病室らしい。清潔でこぢんまりとした壁も天井も真つ白な部屋で、プリシラはベッドに寝かされていた。レヴォルフの保険病棟ではない。となると、ここは医療院だろうか。自分はどこにここにいるのだろうかと記憶を辿り、すぐに思い出す。

（そうだ。試合の最中に、お姉ちゃんの様子がおかしくなって……）
そこまでは覚えているのだが、どうにもそこから曖昧としていた。

「えつと、私どうして……」

「ブラーナアウト星辰力切れた。ウルサイズが血を吸いすぎたんだと思う」

「そうですか……」

俯き加減のプリシラは、思い出したように顔を上げた。

「あの、お姉ちゃんは……」

「ウルサイズならまだ眠っている」

刹那の視線を辿るように横を見れば、隣のベッドで規則正しい寝息をたてながら眠っているイレエネがいた。

「ウルサイズの方も、かなり消耗していたからな。当分は目は覚めないだろうと医師が言っていた」

「そうですか。あの、試合は私たちの負け、でしたよね」

何となくわかっているのだが一応聞いてみると、刹那は申し訳ない

ように言った。

「……………ああ」

「そ、そんなー！泣きそうな顔しないでくださいー！」

元より姉が望んで出たわけではないのだから、それはいい。

「じゃあー！ー《グラウインシズ覇潰の血鎌》は？」

「ー！ー！ぶっ壊れたよ」

「え……………？」

声が出た方を見れば、イレーネが仏頂面で口を尖らせていた。

「神木の野郎が、跡形もなくな」

横たわりながら腕を組む。

「あはは、そっか。刹那さんが……………」

「ま、そのおかげであたしはこうして無事でいられたわけだが……………」

まあ、なんだ」

ぷいっと首だけをそっぽを向くように横に向ける。

「……………ありがとな、神木」

顔はよく見えないが耳まで真っ赤に染まってるあたり、相当照れているのだろう。

「二人が無事でよかった」

そう言って刹那は椅子から腰を上げる。

「さてと、俺はそろそろ……………」

と、言い終わる前に身体に異変が起きた。身体中を鈍痛が駆け巡ると同時に魔法陣が無数に現れ、その中から鎖が飛び出る。

「な、なんだこれは……………!?!」

「刹那さん!?!」

「神木っ!」

それは一瞬にして身体中へと巻き付き、刹那を縛り付ける。

「くっ……………!これは、綾斗と同じ……………!」

ギリギリと締める力が強くなる。まるで、自分の何かを封じ込めるようい。

『ごめんね、刹那くん』

「っ!?!」

脳内に突如として声が響く。聞いたことがないはずなのに、どこか懐かしい声。

『あなたの力は凄く強大で、見誤ればそれは破滅となるの。だからー』

その先の言葉を言う前に声が消え、その鎖も見えなくなった。

「刹那さん、大丈夫ですか!？」

「あ、ああ」

「なんなんだよ、さっきの」

「わからない……」

綾斗が力を解放する際に破壊する鎖と同等かそれ以上の拘束力を持つ先程の鎖の正体がわからない以上、詮索の仕様が無い。

ひとまず自身の控え室に戻るとそこには、いつもの面々が待っていた。

それに、神妙な顔で。

「話は全てクローディアから聞かせてもらったぞ、刹那」

「話?」

「お前の純星煌式武装が「神器」の一つだという事だ」

「何を馬鹿なことを……《正宗》が「神器」だと言うのか?」

刹那自身訳の分からないという顔をして面々を見た。実際、自分でも分からないのだ。

「大体、俺がいつ「神器」を使ったんだ」

「覚えて、ないのでですか?」

「覚えてるも何も……」

すると無言のまま紗夜が空間ウインドウを展開する。それは先程のイレーネ戦の終盤の映像だった。そこにはー

『封印術式展開ーーー〈封印解除〉』

《正宗》の周りに無数の魔法陣が取り囲み、そこから伸びていた鎖が碎け散る。

「これは……」

そして、一際大きな輝きを放ち、収束するとそこには巨大な片刃の剣と化した《正宗》を握る刹那が立っていた。

『「神器」開放——《真刀・神威》』

「《正宗》が、「神器」なのか……?」

何度も思い出そうとしても全く思い出せない。

「恐らくこの状態の刹那は無意識下にあると思われれます。記憶がないのがいい証拠かと」

「つまり、「神器」に操られているってこと?」

「簡単に言えば、ですね。ですが幸い、こちらには敵意を示していませんでした」

「本当に存在していたのだな、「神器」は。おとぎ話の中だけかと思っ
ていたが」

「「神器」を御する事が出来た人間はアスタリスク史上まだいません。
なぜなら「神器」自体に明確な意思があるからです」

「それって、自分で考えたり、人を選んだりするってこと?」

「そうです。自身の意思に背く適合者を簡単に切り捨て、また新たな
適合者を自分で探すことが出来る」

「折り合いも何もあつたものではないな……?」

「しかし、逆に「神器」を完全に御することが出来たのならば、それ
はこの世界を支配したも同然の様なものです。一つだけでもあれ程
の強力な能力を持つているのに、それがあと七つあるんですから」

「無闇に使わない方がいいかもしれないね」

全員が無言で頷き合う。

「しかし、運営委員会の動きがないのが気になりますね」

「確かにな。衆目に晒されたのに何故何の対処もしてこない」

「もしかしたら、俺ら以外の人には見えていないのかな……?」

「……試してみるか」

刹那がホルダーから《正宗》の発動体を取り出す。

「封印術式展開——!」

先程の映像と同じように言葉を紡いだ瞬間——

《正宗》ではなく、刹那の身体中に巻き付いていた鎖が再び可視化し、
刹那を縛り上げた。

「なっ……!?!」

「あの鎖は……!?!」

「俺と同じ、禁獄の鎖!?!」

まるで刹那を咎めるように手脚を縛り付ける。

「恐らく、「神器」^{イノセンス}を発動した代償なのでしようか」

「代償……?」

鈍痛に顔を歪める刹那が、クローディアに聞いた。

「闇雲に「神器」^{イノセンス}という力を使えないように二重のセキュリティをか
けたのではないでしょう。そしてそれを解除するには——」

「あらかじめ決められた誓約をクリアする必要があると……」

刹那が荒い息を吐きながら、呟いた。

「誓約?」

「神器」^{イノセンス}を使用する際の誓いのようなものだろう。恐らく四つぐら
い定められているはずだ」

「なんでそんな事を知っているんだ?」

「え……? そう言えば、何でだ……?」

またしても自分でもわからない事が出来た。誓約とは、初めて聞く
言葉なのに何故自分は知っているのか。

「とりあえず、その四つの誓約をクリアしないと「神器」^{イノセンス}は使用出来
ないと言うことなんだね?」

「良かったのか悪かったのか分からないがな……」

「良かったんじゃないかな」

綾斗が手を差し伸べ、刹那を立てさせた。

「君は力なんかには溺れないよ、大丈夫さ」

「お前の事だ、「神器」^{イノセンス}も自分のもの出来るんだろう」

「……そう、だな」

決意を新たに、激動の《鳳凰星武祭》^{フェニックス}の本戦開始の時刻が迫ってい
た。

第18話 つかの間の休息

アスタリスクの南東に位置する界龍ジエロン第七学院は、その敷地全体が回廊で繋がれた無数の建造物で覆われている。伝統的な中華風の建造様式を模したそれらに囲まれるようにして庭園や広場などが点在し、その様相は学園というよりむしろ一つの巨大な宮殿と言った方が近いだろう。

その一角に黄辰殿と呼ばれる建物がある。朱塗りの柱に瑠璃瓦の屋根を持った三層構造の楼閣で、一見すると他の建造物とさほど違いはない。最も界龍に在籍する学生ならば、ここがいかにか特別な場所か誰でも知っている。

「……いや、より正確にいうならば、特別なのはこの場所ではない。その主だ。それは《万有天羅》の二つ名を継ぎし者。それは界龍を統べる者。三年前、齢六つにしてその座についた者の名は、ファン・シングル范星露と言った。

「……師父、そろそろ定例報告会のお時間です」

ジャオ・フーフォン趙虎峰は広間の入り口で右拳左拳の抱拳礼を取ると、一拍の間を置いてからそう告げた。フーフォン虎峰は界龍ジエロン第七学院の序列五位。その身体はよく鍛えられているものやや背は低く、柔らかく整った顔立ちと長い髪から女子の間違われることもあるが、れっきとした十七歳の男子学生である。かつては麒麟児との呼び名が高く、先のフェニックス《鳳凰星武祭》では見事準優勝に輝いたほどだ。もともと虎峰は当時の自分を思い出すと、あまりの恥ずかしさに悶絶するらしい。

「おお、もうそんな時間かえ」

広間の中央に立っていた童女がその声に振り向き、あどけない笑みを返した。

とてもではないが、何も知らない者にはこの童女がアスタリスク最大の規模を誇る界龍ジエロンの序列一位、《万有天羅》の范星露だとは信じられないだろう。

「ではここまでにしようかの。皆、ご苦労じやったな。またいつでも挑むがよいぞ」

星露はそう言つてぐるりと広間を見回す。その床には数十人の学生が息絶え絶えといった様子で倒れ込んでゐる。彼らは皆、星露へ弟子入りを希望する者達だ。

「こちらにおいででしたか、師父。探しましたよ」

「ああ、それに趙師兄も。ご無沙汰しております」

と、回廊の反対側から歩いてきた二人組の男女が、二人の前で恭しく包拳礼を取った。虎峰の眉が僅かに寄るが、星露は変わらぬ無邪気な笑みを浮かべたまま足を止める。

「おお、ぬしらか。儂にどうぞ用かえ？」

星露がそう訊ねると、二人はさも愉快そうに目を細めた。

「いえ、それほどのことではないのですが」

「今日の勝利のご報告を」

それはまるで一人の人間が喋つてゐるかのようであるで不自然さが無い。それがかえつて不気味なほどにピッタリと一息があつてゐる。少年の名は黎沈雲、少女は黎沈華。その名が示すとおり双子の兄妹であり、界龍の序列九位と十位に名を連ねる。

「うむ。観ておつたぞ。中々に見事な勝ちっぷりであつたのう」

「いえいえ。僕たちなど」

「まだまだ修行中の身でございますから」

そう言いつつも、二人の言葉には隠しきれない自負が滲み出ていた。そこにはある種の傲慢にも似た、圧倒的な自信が感じられる。

「ふん、心にもないことを。いいから本題に入るがよい」

「ははっ、師父にはかありませんね。それでは……」

沈雲はそこで一言切ると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

刹那は控え室のソファに座り、《正宗》の発動体を見つめていた。

「《鳳凰星武祭》を勝ち抜くにはもつと、今より強い力が必要だ。もつと、もつと、もつと俺は強くならなきゃいけない。姉さんを、父さんたちの仇を討つには、もつと……」

『神器』の力は確かに強大だ。だが同時に危険な代物でもある。恐らく長時間の使用に人間の身体は耐えられない。その一線を越えた場

合は、間違いなく自分は自分でいられなくなるだろう。

「あまり、使わない方がいいな……」

しかし刹那はまだ気づかない。自分は既に、『神器』^{イノセンス}の力に徐々に呑み込まれていた事に。

「次の対戦相手は……界龍の双子か」

刹那の端末に送られてきた次の対戦相手は界龍の《冒頭ペーの十二人ジ・ワン》だった。しばらくその画面を見つめ続けていると、突如隣から声をかけられた。

「あの、刹那先輩……?」

「あ、ああ。どうした、刀藤」

「大丈夫ですか?ずっと怖い顔してらしたので……」

「そうか?」

どうやら先程から呼ばれているのに気づかなかつたらしい。後輩に心配をかけてしまうとは少し情けなさがこみ上げてくる。

「すまないな、大丈夫だ」

(刹那先輩……?)

綺凜は刹那が少し変わったかのように思えて、どうも胸騒ぎが治まらなかった。次の試合で、何か……何かが起こる、と。

彼が、彼でなくなってしまうと。根拠なき焦燥感が綺凜を駆り立てたためこうして刹那を探し会場内を走り回っていたのだ。

思わず、彼の背中に抱きついてた。

「おっと……刀藤?」

「先輩、ど、どこにも行かないと約束してください!」

「それは一体どういう……」

「お願いします!約束、してください……!」

「あ、ああ……」

その時はうやむやな返事をしてしまった。綺凜の言葉の意味がわからない。どこにも行くなどはどういうことなのだろうか。

窓を見やれば、夕焼けが空を侵食し始めていた。

—————

ベスト十六を決める試合が明日に控えた夜、刹那は星導館の敷地内

にある広場のベンチに座り、月明かりを受け煌めく噴水をぼんやり見
ていた。特に理由もなく、かと言って寝付けないのでこうして暇をつ
ぶしに外にててきたわけだが……」

綺凜に言われた言葉の意味について、少し自分なりに考えをまとめ
る必要がある。が、どうも上手く思考が回らない。何やら疲労感も感
じる。思えば家族を失ったあの日から、立ち止まらず振り返ることも
しなかった。父と母に繋いでもらったこの命、よく《蝕武祭》^{エクリプス}で散ら
さなかったものだ。恐らく、「神器」^{インセンス}のおかげなのだろう。では、自
分の求める強さとは何なのか。失った過去を取り戻すため、大切な人
を取り戻すため、もう何も奪われないよう守るため、親の仇をとるた
めの力？この中に、自分が追い求める強さや力があるのだろうか。

「俺の求める強さは……」

「……そこで何をしている？」

後ろから声をかけられ、振り向けば美しい桃色の長い髪をポニー
テールにし片手に牛乳瓶を持ったユリスがいた。服装から見ると
に風呂上がりだろう。上気した頬が月明かりに照らされ元々整った
顔を更に美しく、艶めかしくしていた。

「……リースフェルトか」

「酷い顔だな。ちゃんと寝ているのか？」

「……」

「まあいい、隣座るぞ」

そう言つて、刹那の隣に腰を下ろし一口牛乳を飲む。しばらく無言
の時間が流れる。刹那はおもむろに口に出した。自分の中にあるこ
のモヤモヤを。

「なあ、リースフェルト。一つ、聞きたい」

「……」

「強さとは、なんだと思う……?」

無言のままユリスは刹那の言葉に耳を貸していた。

「最近、分からなくなつた。俺は何のため強くなろうとしていた
か……失った過去を取り戻すためなのか、大切な人を……」

姉さんを取り戻すためなのか、それとも自分のためなのか……」

「イノセンス神器」があれば、確かに強くなれる。だが、あれは俺を俺でなくしてしまふ……使えば使うほど、力を欲してしまつて、俺は……お前たちを傷つけてしまふかもしれない……」

少し間を置き、ユリスは小さなため息を吐いた。

「刹那、こっちを向け」

「……?」

言われるようにユリスの方へ顔を向けたと同時に、両頬を思いつきり挟まれた。

「……!?!」

「……全く、何を言い出すかと思えば……」

また一つため息を吐き、今度はすっかり刹那を捉える。

「強さには種類がある。金、権力、そしてお前が言った力。確かに、それは大事なものだ。強くなければ、願いを叶えることはおろか、フェスタ《星武祭》でも勝てない。グランドスラム全星武祭制覇など以ての外だ」

「……」

「だが、その強さよりも本当に大事なのは心だと、私は思っている」
(心……)

二人を夜風が包み込む。木々揺れ、草々がゆつくりと流れていく。「金を自分の好き勝手に使えば、ただの成金に成り下がる。権力を傍若無人に振りかざせば独裁者へと変貌する。そして、力はただ振り回せばそれはもう暴力者だ。野蛮人と言ってもいい。だが、心を持つて使えば、金は貧しい人たちを救える。権力だって、同じように困っている人を助けることが出来る。力は、助けを求めている人たちを助けることが出来る」

そして目の前のユリスの顔が優しく微笑む。

「確かにお前の言う通り、イノセンス「神器」は危険な代物だ。あのグラヴィティ《覇潰の血鎌》よりも。出来ることなら、お前にあれを使つて欲しくはない……。だが、いつかあれと向き合わなければならぬ。それは遅かれ早かれいずれ訪れるものだ。故に私はあえて止めない、お前を信じているか

ら………」

「リースフェルト………」

「決して、心だけはあれにくれてやるなよ。暴走しても、私が、綾斗が、紗夜に綺凜、クローディアがお前を全力で止める。だから、そんなに気負うな。お前はもう、一人ではない」

「……………」

コツンと、ユリスは刹那の額へ自分の額を当てた。冷えきっていた心に温かさが広がっていく感じがした。

「……………」

「やっと呼んでくれたな」

そのまま刹那は目を閉じ、数秒もしない間に静かな寝息をたてながらユリスの膝の上で眠りについた。余程思いつめていたのか、これは当分起きないだろう。かと言っていくら《ジェネステラ星脈世代》とはいえ、相手は男の子だ。体格差もあるため運ぶことは出来ない。残る手段は……………」

ユリスは辺りを素早く見渡し、そつと膝の上から刹那の頭を置いてあつた彼の服を畳んだ上に乗せた。そして自分もそんな彼の横に横たわる。

「……………」

隣で眠る彼の髪をそつとすく。少しくせつ毛の混じった黒い髪はユリスの手の中で夜風に踊る。

時を同じくして、運営委員会委員長室ではマディアスが執務機の記録映像を眺めていた。

「神木刹那、か。まさか、君たちの息子があそこまで強くなっていると
はね」

視線の先にあるのは執務机に置かれた写真立て。そこにはマディアスと夫婦らしき二人の男女。同じ星導館の制服を着た三人は、年相応の優しい笑みを浮かべていた。

「君たちの息子は禁断の力を手にした。それも全て君たちが仕組んでいたことかな。どちらにせよ、彼とは刃を交えることになるだろうね。聖羅くんがあそこにいる限りは。そして、「神器」インセンスは使用者の感

情を増幅させる副作用みたいなものがある。君は、抑えらるかな？己の中にある負の感情を」

マディアスの口角が僅かに上がる。

「楽しみだよ、神木刹那くん。君と刃を交える日が……」

「……………」

「ユリ……ス……」

寝言で自分の名前を呼ぶとは、どこまでこの少年は私を期待させるようなことばかりするのか。不服そうにむくれながらユリスは刹那の顔を見て驚いた。刹那の目からは一筋の涙が零れたからだ。

そして、行動に移すまで考えるまでもなかった。ユリスは無意識に刹那の手を握り、そつと顔を胸へと寄せ包み込んだ。

「ああ。私はここに……お前を一人には……」
そう言つてユリスも襲い来る眠気に抗いきれずそつと意識を手放した。

「よし、今日はこれくらいでいいかな」

明日の試合に備え訓練を止め、綾斗は夜空を見上げる、想う。

「姉さん待つて。必ず、見つけ出すから」

同じくして綺凜と紗夜も、自身の刃を研ぎ澄ませている。

（私も、刹那先輩のように強く……！）

今はただ、手に取る剣を振るうのみ。いつか彼に追いつき、胸を張って肩を並べられるようになるために。

「……………」

紗夜は無言のままシャワーを浴びていた。その瞳には熱く、それでいて静かな闘志が揺らいでいた。

そしてクローディアも自室の窓から月を見上げ、願う。

（どうか、無事に《鳳凰星武祭》が終わりますように……）

少年は誓う。

大切な人を取り戻すことを。

少女は求める。

憧れの存在に近づくために。

少女は臨む。

好敵手に自身の力を示すために。

少女は願う。

仲間たちとパートナーの健闘を。

それぞれの想いを胸に《鳳凰^{フェニクス}星武祭》も佳境へと向かう。

譲れぬ願いを叶えるために少年少女の闘いは、まだ始まったばかり
なのだった。

次回 学戦都市アスタリスク TRILOGY

第19話 突然の来訪者

第19話 突然の来訪者

「ふああ〜……………」

「……………だらしないぞ」

「ん、わるい……………」

現在刹那とユリスは共にシリウスドームへと続く街道を歩いていた。

「久しぶりに気持ちよく寝たな。なんかいい匂いがずつとしてたんだが、ユリス何か知らないか？」

「ぎ、ききき、気のせいじゃないのか？」

自分とすることがかなり動揺してしまっている。起きたら刹那を抱きしめていたなんて口が裂けても言えない。しかも外で。それに、昨日の夜から刹那は自分の名前を『リースフェルト』から『ユリス』と呼ぶようになり、何か距離が一気に縮まった気がする。

（い、いかんいかん！）

何度も緩みかける口元を必死に押さえる。でもやっぱり嬉しいものは嬉しいのだ。

「おー、きたきた」

シリウスドームの正面ホールに入るなり、綾斗がこちらへ手を振っていた。

「二人とも遅いですよ?」

クローディアが腰に手を置き、頬を膨らませる。

「すまないな、会長」

「では、遅れてきた分今日は刹那を独り占めさせてください」

「んなつ!？」

「じゃあ私は綾斗を」

「ふえっ!？」

クローディアに紗夜が二人の片腕にガツチリくつつく。取り残されたユリスと綺凜から痛い視線をもらう綾斗は苦笑いするばかりだが、当の刹那はいつものようにそれとなく流していた。

「会長、あまり二人をおちよくるのも大概にしないとな」

「むう、独り占めしたいのは本当ですっ!」

「そうか」

「それ!それです!刹那の悪いところは!女性の扱いがなってません!」

「そうだそうだ」

「それには流石に私も同意します!」

「あ、いや……」

いつものやり取り綾斗は何度目かの苦笑いをする。しかし、いつもユリスもあーだこーだ言うはずが今回は何故か大人しい。

「ユリス?」

「……」

(い……!?)

綾斗は絶句した。怒っている。間違いない、いつも怒っているユリスが激おこプンプン丸状態なのだ。無言で刹那を睨みつけているが、こちらはあの三人への対応に追われ全く気づかない。

「つたく。見てるこつちの気にもなってみろつてな」

「あれ、夜吹も来てたんだ」

「まあな。暇だしお前らの試合見てた方が面白いしな。ところでお姫さまよ」

「……なんだ」

(ええ……なんでそんな不機嫌なの……)

ただ話しかけただけなのに、とは決して口に出さない。出したら出したで面倒くさくなるのは目に見えている。

「そんなことより、お姫さまにお客さんだぜ」

「私に客人だと?」

眉間に皺を寄せていた顔がいつもの顔になり、夜吹の背後から一人の女の子がびよこつと出てきた。

歳はだいたい若い……というより幼い。大体小学生ぐらいだろうか。純朴そうでいかにも可愛らしい女の子だが、ただ一点気になるのはその服装だ。メイド服。一部のコアな層からは大儲けするだろう。

そして、その子を見たユリスが啞然とした表情で呟いた。
「フ、フロローラ……?」

執務室への固定回線を通じて執務机にコールサインが出る。

「私だ。……ここに居る時はあまり電話は控えるようにと言ったはずだよ?」

マディアスは優しくたしなめるように言った。

「大丈夫さ、彼はきつと使うよ。いや、使わざるを得ない。なぜなら、そう仕向けたのは彼らなのだから。……では失礼するよ」

ピツと回線を切り、椅子にもたれ掛かる。《鳳凰星武祭》^{フェニクス}もそろそろ大詰め。毎年、誰が優勝するか予想するのもマディアスの楽しみになっていた。

「もう少しだ。もう少しで君を目覚めさせることが出来る。聖羅くん」

マディアスは静かに笑った。

「じゃあ君は、リーゼルタニアから一人で?」

「あい! フロローラと申します! みなさま、よろしくお願いします!」

若干舌足らずなところもあったが、フロローラと名乗ったその少女は直角になるくらい深々と頭を下げた。

聞けば、フロローラはなんとユリスが救おうとしているリーゼルタニアの孤児院からやっきたのだという。

「受付で随分と困ったもんだからよ。話を聞いたらお姫さまの知り合いなのなのってさ」

夜吹が簡潔に経緯を説明した。

「あい! 助かりました! ありがとうございます、夜吹様!」
「いってことよ」

撫でてやると気持ちよさそうに目を細める。夜吹は小さい子に懐

かれやすい性格なのかもしれない。

「全く、来るなら来るで」報くらい寄越せばいいものを……」
ユリスは困りながら笑う。その表情はとても柔らかく穏やかで、それだけでフローラがユリスにとつてとても大事な存在なのだと分かる。

「だって陛下が《鳳凰星武祭》のチケットをくれる代わりに、姫様には絶対内緒にしておくようにって」

「はあ……兄上は相変わらず戯れが過ぎるな。どうせその格好も兄上の入れ知恵なのだろう?」

「あいー!」

「全くあの人は……」

ユリスはこめかみを押さえながら盛大にため息を吐く。

「どうやらユリスの兄はかなりお茶目な人のようだ。」

「ところで、神木様はどちらでしようか?」

フローラは眺めるように各々の顔を見る。

「あ、神木は俺だが……」

刹那が言うとピタツと視線と視線が合う。

「わあ……噂に聞いた通りすごいカッコイイ人ですね!」

「そ、そうなのか……?」

「あい!いつも姫様から聞いてます!神木様の凄さをこの前なんて一時間……」

「ス、スススストップだ!フローラ!」

「あら。ユリス?」

「説明願おう」

「リースフェルト先輩……」

「い、一時間……?」

ユリスが段々追い詰められているが、生憎とどうすればいいのかわからない。すると更なる爆弾をフローラが投下する。

「あ、そうでした!陛下から言伝です、姫様」

「な、なんだ?」

「実はですね、神木様と皆さんを連れて近々帰っておいでの事です

！」

「兄上がか？」

「あい。なんでも神木様と結婚がどうか言っていたよう
な……はっ！今のは言っただけじゃない事でした！忘れてく
ださい！」

「けっ、けっけ、結婚……!？」

「もう遅いと思うよ？フローラちゃん……」

綾斗が苦笑いで言う。

「ごめんなさい、フローラ。すこーし、あなたの姫様を借りますね？」

「あい。わかりました」

「私も行こう、エンフィールド」

「少し私も席を外します」

「お、おい。どこに……」

刹那の静止も無視し、三人はユリスを引きづっていった。

すると訪問を知らせるアラートがなり、ディスプレイを出すとそこ
には

『やつほー。神木刹那くんいますかー？』

「あんたは……」

控え室にとある人物の訪問によって更に空気が重くなる。

刹那を真ん中に膝の上にフローラ、右に綾斗。対面にはクロードイ
ア、紗夜、綺凜、ユリス。そして、刹那の左側には――

「あら、ご機嫌よう。シルヴィア」

「こんにちは、クロードイアさん」

「何故ここに《戦律の魔女》シングルドリーヴァがいる……」

「あなたが《華焰の魔女》グリューエン・ローゼだよ？実はあなたにも興味があったの」

「あのお……一体どのようなご用件で……」

綺凜が遠慮がちに聞いてくる。

「うん。実はね、彼とお話がしたくて」

「お、俺か？」

「うん、君のこと気になっちゃったんだもん」

ビシッ

空気が凍りつく。まさかここにも爆弾娘がいたとは。

「だから今日はお近づきのしるしに……」

シルヴィアはそっと刹那の頬に口をつけた。

と、同時に対面の四人顔がひきつる。

「あー！いけません！シルヴィア様！神木様は、姫様のものになるんですから！」

しまった。ここに爆弾娘がいたのだ。

「えー、そうなの？じゃあ尚更刹那くんはあげたくないな」

「面白い、表にでろ。リニューネハイム」

紗夜が啖呵をきつた。それに続くように三人も立ち上がり、同時に煌式武装を展開する。

五人の視線は何やらバチバチとぶつかる。

「せ、刹那。どうしよう……」

「……」

「くっ！考えることを放棄している！」

その後どんちゃん騒ぎをして運営委員会から説諭を受けたことはここだけの話。

第20話 禁忌の力 前編

我が家の家族総出で刹那くんの絵を描いていました！絵は姉と妹が描いたそうです。父と母のコメントは気にしないでください

わりと父の字がキレイ

「さてと、参りましょうか」

「ああ。これを勝てば、準決勝だ」

準々決勝、当日。控え室で二人は顔を合わせる。今からあと数分でステージで相對するのは黎^リ兄妹。

「過去のデータから見て取れる傾向は二つ。まず、この双子は徹底して相手の弱点だけを攻めます。つまりは相手が最も嫌がるであろう戦法を取るといふことです。無論それはそれで闘いの基本であるとはいえ、この双子のそれは副次的なものでしょう」

「つまりは、コイツらが最も重要視しているのは相手を騙ることか」

「はい。過去のデータの録画記録からみるに間違いないでしょう」

ならばなるべく早急に勝負をつけた方がいいだろう。長期戦は間違いないこちらの不利だ。

「そしてもう一つの傾向ですか、この双子は決して無茶をしません。自分たちにとって絶対的に有利な状況を作り、安全圏を確保した上で初めて攻勢に入ります。慎重と言ってしまうえば聞こえはいいかもしれませんが、言い換えれば自らが傷つくのを恐れている臆病者ともいえます」

クローディアが真剣な顔で刹那を見る。

「それを抜きにしてもこの双子の実力は確かに高いのも事実。加えて、策を講じるのが非常にお上手です。彼らの強さの本質は星仙術の高さなどではなく、双子ならではのコンビネーションと、この作戦立案能力でしょう」

「短期決戦が望ましいが……」

「そう簡単にはいかないでしょう」

賭けるとするなら——

「あなたの「神器」^{イノセンス}の力が必要になるかもしれん。刹那には無理を強いてしまいますが……」

「気にするな。元より楽しんで勝てるとは思っていない。大丈夫、俺にはあんたがついてる。そして、あんたには俺がついてる。今はそれで十分じゃないか？」

「ふふ……そうですね」

「足りないところは補えばいい。まあ、なんだ。暴走したら、よろしく頼む」

「了解です」

二人は歩き出した。さあ、傷つくことを恐れている臆病者に見せてやろうじゃないか。戦士の戦いというものを。

『さあさあ皆様お待ちかね！いよいよこのシリウスドームでも準々決勝の試合が始まるうとしています！まず東ゲートからその姿を現したのは、星導館の神木刹那・クローディア・エンフィールドペア！そしてその反対側！西ゲートからは界龍^{ジエロン}第七学院の黎沈雲・黎沈華ペアが入場です！』

『今日の注目試合ツスねー』

『なお、他のステージでは既に全ての試合が終了し、ベスト四のうち、三枠までが決定しております！果たして果たして、その最後の一枠を埋めるのはどちらのペアなんでしょうか！』

耳をつんざくような大歓声、それに負けじとほとんど限界まで音量を上げた実況と解説の声が響く中、刹那とクローディアはゆつくりとステージに降り立つ。

「すごい歓声だな」

「そろそろこの《鳳凰星武祭》^{フエニクス}も大詰めですからね。観ている方も気合が入るんでしょう」

「今回も背中中は頼んだぞ、会長」

「無論です」

二人は拳を合わせた。

実況が言っていた通り、既に他の準々決勝の試合は既に終わっている。現在決まっているベスト四のメンバーは、星導館の綾斗とユリス、綺凜紗夜。そしてアルルカントのアルディとリムシイだ。

「初めまして、《千見の盟主》に《閃光》。僕は黎沈雲」

「私は黎沈華。以後、お見知りおきを」

二人は薄い笑みを浮かべたまま、そう挨拶する。それにしてもこうして間近で見ると、本当に驚く程そっくりだ。界龍ジエロンの制服はゆったりとしていて体のラインが出てないため、ほとんど頭のシニヨンで見分けがつかない。

「何か用か」

「少しだけ警戒しながら簡潔に返す。

「いや、お詫びをしておこうと思ってるね」

「詫びだと？」

「ええ、先日僕らの同輩が君たちの選手と不甲斐ない試合をしてしまったようで」

「同じ師につく者としてお恥ずかしい限り」

（もしかして、綾斗たちと戦っていたあの二人組の事か）

一切の淀みもなく、沈雲の言葉を沈華が受け継ぐようにして双子が喋る。

「私はあの方たちが不甲斐ないとは思いませんでしたが？少なくとも傷つくことを恐れているあなた方よりは」

クローディアが鋭い視線を向けると、沈雲は大げさに肩を竦めてみせた。

「言ってくれるねえ。いやいや、《万有天羅》の直弟子がああ程度だと思われては困るんだなあ」

「だから、あの二人では見せられなかったか世界を私たちが見せてあげる」

「……星仙術の深奥を、ね」

双子は交互に言葉を紡ぎ、さも愉快そうにつくつくと喉を鳴らす。と、同時にクローディアと刹那の星辰力プライナが読んで字の如く、爆発した。

「ーっーっ！」

思わず顔を覆ってしまう。二人を中心にアリーナ内を風が奔りまわる。

「《鳳凰星武祭》フェニクス 準々決勝戦第四試合、試合開始！」

試合開始の宣言と同時に沈雲と沈華の目の前には、刹那とクローディアがいた。

「うそーっーっ！」

「はやすーっーっ！」

二人を同時に壁際へと弾き飛ばす。その時沈雲は思った。間違いない、これはただの挨拶だと。

「沈華………！」

「まだ大丈夫よ………！」

何とかガードしたが両手が痺れてしばらくは満足に動かせないだろう。それは沈華も同じであった。前に目線を向ければ、刹那とクローディアが煌式武装も展開せずこちらを見ていた。

「さて、お得意な隠れんぼでしたらお付き合いしますよ？」

「なんだと………！」

「ふふふ」と口元を押さえて愉快に笑うクローディアに沈雲は僅かに怒りを覚える。

第21話 禁断の力 後編

姉の同級生の方が描いてくれた刹那くんです！

このクオリティで雑に描いたらしいんですけど……羨ましいの前にすごいです。

それでは本編どーぞ！

「急急如律令、勅！」

沈雲の手が複雑な印を結ぶと、周囲の空間がゆらりと揺らめく。と、次の瞬間にはステージのあちこちからもうとうとした煙がとてつもない勢いで吹き出した。

「これは、煙幕か」

煙は瞬く間にステージを覆い尽くし、二人は背中を合わせた。

「大丈夫ですか？刹那」

「ああ、問題ない。しかし、これはしてやられたな……まさかこんな手で来るとは」

二人は注意深く周囲を探るが、煙は深くまるで見通せない。

「これも、幻影ですか」

「だろうな」

煙はあまりにも深く、濃い。それにしてはまるで煙くない。沈雲は無いものがあるように見せる幻影のエキスパート。ならばこれが星仙術で作りに出された見せ掛けの煙であっても不思議はない。

「黎沈雲の幻影はあらゆる物を再現してみせると聞きますが、まさか煙とは……。ですが、いずれこの煙も晴れるでしょう」

「確か、意図的に外部の視覚を遮断する状況を作り攻撃することは、ステラ・カルタ星武憲章違反だったか。過去のデータを見ても、あの双子がこのような戦法を取ってきたことはなかった」

「ええ、何が起こっているのか分からないと、反則行為もチェックできませんし。ですが一番の理由は――」

「これが、エンターテインメントだからだろうな」

刹那の言葉を裏付けるようにしばらくすると観客席からブーイングが沸き起こる。それが次第に大きくなつてくると、その煙は忽然と掻き消えた。

「やれやれ、最近のお客は辛抱が足りないね。そうは思わないかい？」
「まったく。そう焦らなくてもこれだから本番だつていうのに」

いつの間にかステージの端まで移動していた沈雲と沈華が、ニヤニヤと笑いながら言う。

「卑しい奴らだな」

刹那はそう吐き捨てながらも、《正宗》を構え直す。クローディアも心の中で同意しつつ《パン||ドラ》を構え直し、二人は間合いを詰める。

「おや、こちらもまたせつかちだね。ま、そういうことなら次の手をご披露しようか」

沈雲の手が再び印を結ぶ。

沈雲の周囲の空間がぐにやりと歪み、影法師のように朧気な何かが浮かび上がる。見る間にそれは人形となり、やがてそこには沈雲と全く同じ姿をした人影が四体、不敵な笑みを浮かべて立っていた。

(出たな……)

これこそ黎沈雲が最も得意とする幻影――いわゆる『分身』だ。過去の試合映像を見ても、沈雲はほぼ全ての試合でこの術を使っていた。もちろんこれも幻影である以上実体はないのだが、外見から見分けることはほぼ不可能な程に精巧で、星辰力の動きまでもが擬似的に再現されている。しかも四人全てが異なる動きを取るため、パターンといったものを読み解くことさえ出来ない。

さらに――

「それじゃ私も、と……」

沈華が印を結ぶと、その姿が溶けるように消えていく。

こちらは沈華の十八番である幻影――『隠行』だ。ただ単に姿を

消すだけでなく、沈雲の分身同様に気配や物音、星辰力の動きさえもその幻影によつて覆い隠してしまうため、よほど集中しない限りほぼ感知できない。

「さてさて、これでこちらの支度は整ったわけだけど」

「このままそちらの出方を待つというのも少々芸がないかな?」

「うん、それに観客の皆様も退屈してしまうだろうしね」

「少し盛り上げないとブーイングされかねない」

「というわけで……」

五人の沈雲たちがそれぞれ違う言葉を紡ぐ。どうやら声までも再現できるらしい。

「……ここは一つ、派手に行こうか」

不敵な笑みを浮かべた沈雲たちが手首をスナップさせると、どこからともなくその指の間に紙切れが出現した。

「刹那、気をつけてください……あれが呪符です」

クロードディアが《パン・ドラ》を構え、警戒するように腰を落とす。呪符とは星仙術の力が込められた、一種の補助アイテムだ。使い切りではあるが、呪符の種類によつて発動する能力は千差万別であり、様々な場面で応用が利く。

「だが、本物はあの中の一つだけだろう?」

「それはそうですが……来ます!」

そこへ五人の沈雲が同時に襲いかかってきた。武器を持っていないので、あの呪符にはなにかの攻撃型の能力が込められているのだろう。迎撃するように《正宗》を振ると、その一人はあっさり両断された。

「幻影か……!」

なんの手応えもなく、斬られたはずの体も煙のように揺らいだけですぐに元に戻ってしまう。返す刀でもう一人斬り捨てたものの、やはり手応えがなく、剣閃が虚しくすり抜けるだけだ。

「残念、ハズレだね」

と、それをすり抜けるようにして現れた三人目の沈雲が、呪符を刹那へ向かって突き出しながらニヤリと笑った。……が、目の前の

刹那の姿がブレた。

「なにー！ー」

「どこを見ている。それは残像だ」

声がする方を振り向く前に、呪符を全て斬り捨てられる。

(いつの間にも後ろにー！ー！ー！)

と同時に二人の幻影を斬り捨て、更に追撃をかけるが身軽な身のこなしですぐに距離を取られる。

『絶影』。建御黒雷神タケミカヅチ発動中のみ使える歩法である。一時的に発動することで沈雲のうらをかき事が出来たようだ。あわよくば校章を狙ったのだが、逃げ足だけは速いらしい。

「私を忘れてもらっては困るわね！」

「チツ！」

一時的とはいえ建御黒雷神は反動がある。身動き取れないところを沈華が仕留めようとするが、

「あなたも私を忘れていませんか？」

「ー！ー！ー！」

「みーつけた」

本来ならば知覚することすら叶わない自身の『隠行』を彼女は見抜いていた。見えないはずの自分を捉えている彼女の目にゾクリと身震いすると同時に、攻撃をやめ沈雲同様距離を取った。

「助かった、会長」

「いいえ。さて、そろそろ終わらせたいところですが・・・」

「長期戦は不利だからな。黎沈華の動きに注意しつつ、黎沈雲から落とす。会長は見えるのか？」

「問題ありません。私には優れた第六感がありますので」

自信満々に腰に手を置く彼女を小さなため息を吐いた。既に試合開始からそれなりの時間が過ぎている。これ以上はこちらが不利になる一方だ。

「行くぞー！」

二人は同時に沈雲へと向かって走り出した。

「ふうん、やっぱり僕の方に来るか」

沈雲は呟くが、悠然と立ち尽くしたまま構える様子もない。ということは幻影なのだろうか。

(閃理眼！)

眼球に星辰力を集中させる。微弱な電磁波が見えるためどうやら幻影ではないようだ。

(ならばー！)

さらに加速し、沈雲の懐間近というところまで来た瞬間、なんの前触れもなく眼前に突如として巨大な壁が出現した。

「ー！？」

刹那は咄嗟に壁を回り込もうと横に飛んだが、今度はそれを見透かしていたかのように目の前の空間が爆発する。

「ぐああっ！」

今度はまともに爆風をくらってしまう。

「ああ、ひとつ言い忘れていた。気をつけたほうがいいよ。沈華の仕掛けた呪符は見えないからね」

そんな刹那に向かって楽しそうに言った。

(仕掛けたー！ということとはトラップか・・・！)

どうやらあの煙幕の時に仕掛けていたようだ。形としてはユリスの設置型能力に近いが、ジュブは作成次に必要な星辰力が込められているため、術者はその使用に際してほとんど星辰力を消費しない。つまり物理的に呪符が弾切れしない限り、使いたい放題なのだ。

だとすれば、どこにどれだけ仕掛けられているのかわかったものではない。

「刹那！」

「来るな！」

「だからさ、私もいるんだけど」

(しまっー！)

いかにも楽しそうな沈華の声がクローディアの背後から響いた。防御の構えを取ろうとするが、遅かった。

「招雷！」

「あああああああああ！」

凄まじい稲光と共に電撃が迸り、クローディアの体を引き裂くような衝撃が走り抜ける。沈華の星仙術だろう。

「会長……！」

「ほおら、こっちがお留守よ！」

「うあつ!？」

どこからともなく、楽しそうな沈華の声が響いた。察するにクローディアへ直接打撃を叩き込んだのだろう。

「ぐっ……！」

何とか立ち上がった瞬間、刹那の周囲に魔法陣が浮かび上がり、光の縛鎖が刹那を戒めていく。

「まだ制限が……！」

「神器」^{インセンス}の使用による戒めの鎖。それは自身の星辰力の大半をも縛り尽くしていた。もう使える星辰力は刹那には残っていないかった。鈍痛に顔を歪め、その場に膝を折る。沈雲はそんな刹那の様子を愉悦の表情で眺めながら、傍へとやってくる。

「訳は知らないけれど不憫なものだね。で、今はどんな気分かな」

「……っ！」

(こいつ、最初からわかってて……！)

無言で刹那は沈雲を睨んだ。

「おお、いい顔するじゃないか。うん、中々にそそる」

沈雲の言葉に喜悦が滲む。

「抵抗できないやつを蹴って楽しいか……？ 黎沈雲……！ 生憎と俺はしぶとくてな、簡単にはいかないぞ……！」

「ああ、いいねえ、その無駄な足掻き。心が躍るよ……！」

「はっ、下衆が……！」

ゼロ距離で呪符が揺らめき爆発する。

「ぐああああああ！」

打撲と裂傷、骨もかなりのダメージを受けているだろう。

「おおっと、まだ気を失わないでくれよ？ 君は最後にとっておきたいからね」

「な、に……！」

すると突如前方からクロードディアが地面を転がってきた。

「か、会長……!」

「私は、大丈夫です……!それより、刹那は……!?!」
そこでクロードディアは息を呑んだ。既にそこには光の縛鎖で繋がれた刹那がいたからだ。

(そんな……!)

「さあ、まずは君からだ。《千見の盟主》」

「なっ……!」

刹那の数メートル先のクロードディアを突如として地面から何条もの鎖が湧き上がり、蛇のようにクロードディアの体に巻きついて絡めとる。

「ぐっ……!」

「頑張った君に、褒美をあげないとね」

そう言った途端、縛り上げられ抵抗できないクロードディアに向かい呪符を放った。当然この状態ではかわしようなどあるはずもない。呪符はクロードディアの眼前で爆発し、直撃する。

「かはっ……!」

「あっはははは!どうした《千見の盟主》!最初の時のような強気はどこにいったんだい!」

愉悦に染まった顔で高笑いし更に呪符を放ち、それも全てクロードディアの眼前で爆発していく。

「やめろ……!」

「あっははははは!痛いのがあ!いいだろお!?あっはははは!!」

刹那の懇願も聞く耳持たず、呪符をクロードディアへ向かって放ち続ける。

「あああああああああ!」

クロードディアの絶叫が刹那の耳を貫く。

(また俺は、黙って見てることしか……)

脳裏に過ぎるのは連れていかれる幼き姉と、父と母との永遠の離別。あの頃はまだ幼かったし力もまだなかった故に何も出来なかった自分が憎かった。だが今は違う。

力ならずぐ側にある。この最悪な状況を覆すことが出来る力が。

「……………こせ」

「……………?」

沈華は刹那を怪訝そうな顔で見た瞬間、遂に禁断の力を解放する。

「誰かを守るだけの力を……………!」

「な、なに……………!?!」

刹那を縛りあげていた鎖がカタカタと震え出す。

「力を寄越せッ!!」イノセンス「神器」ツツ!!」

瞬間、鎖が弾け飛び、抑え込まれていた星辰力が一気に溢れ出す。

その衝撃波は凄まじく沈雲と沈華を後方へと吹き飛ばすほどだった。

「な、なんだ!?!」

「なによ、あれ……………!」

溢れ出る星辰力を纏い、巨大な片刃の純星煌式武装を手にした刹那が立っていた。

「せ……………つな……………」

一足で駆け寄ると、その身体に巻きついた鎖を断ち切った。

「つくづく君には驚かされるね」

沈雲はそう言うと、両手に複数の呪符を取り出した。沈華も無言のまま、真剣な顔でその姿を消す。

「……………」

刹那は一言も喋らず、その姿が一瞬にして消えた。

そして次の瞬間には、消えたはずの沈華の前にはいたのだ。

「……………!?!」

気づいた時にはもう遅かった。校章は既に破壊されており、あのとつともない殺気に充てられ当分まともに歩けないかもしれないのだ。

『黎沈華、バツジブ校章破損』

「沈華がやられた!?!」

前方には巨大な片刃の純星煌式武装を構えた刹那が無言で睨みつけていた、濃厚な殺気を放ちながら。そしてまた一瞬にして消えた。

「なに……………!?!」

自分の懐にいつの間にかいる刹那に顔が青ざめていく。そして首

を握るように締め上げられる。

「かつ……」

「……………」

ギリギリと握りしめる力が強くなり、呼吸がままならなくなっていく。完全に「神器」イフセンスに操られている刹那にクローディアが片足を引きずりながら近づく。

(ダメです、刹那……それ以上はあなたを……！)

「か……は……」

「……………」

《真刀・神威》が黒雷を纏い出す。

それを見ていた観客席で見えていたユリスの手の握る力が無意識に強くなっていた。

(刹那……！)

黒雷の迸りが激しくなり、ゼロ距離で沈雲へ放とうとした瞬間、背中に重みを感じ、一瞬だけ動きが止まった。

「もう、困った人ですね……」

「く、ろ……」

「はい、クローディアです」

意識を失っている沈雲はその場に倒れ込むように、崩れ落ちた。

『黎沈雲、意識消失』アンコンシヤスネス

校章の機械音声が、宣言したと同時に怒涛の歓声が鳴り響いた同時に刹那はクローディアにもたれ掛かるように意識を手放した。漆黒に怪しく光る《正宗》の発動体を握りながら……………」

第22話 神器という名の悪魔

目が覚めた時にはそこは辺り一面暗闇だった。黒が覆い尽くすそこはある種の安らぎの様なものを刹那に与えた。何故か、理由は分からない。

「ここは……」

「いらっしやい」

暗闇の世界に唯一響く可憐な声。ソレは刹那の目の前で人の形を模し、一人の女性の姿へと変貌した。

「あらあら、本当に可愛らしい適合者ね」

大きな目を細め、唇を舌で舐める。その仕草一つで刹那の背筋を悪寒が走った。身体が警告している。本能的にアレを拒んでいるのだ、アレは人間が関わっていいものではないと。刹那は警戒心を最大限に引き伸ばし、伺った。

「……お前は誰だ」

「誰って、私よ私。さつきあなたと一緒にあの双子を黽つたじゃない。忘れたの?」

今度は楽しそうに言うその姿は最早狂気とも言える。間違いな

かった、アレは――

「お前は「神器」……」

「正解。人間にしては察しがいいのね」

黒いドレスを纏った黒髪紫眼の女性はクルクル回りながら嬉しそうに言った。

「そうよ、私は「神器」^{イノセンス}の一つ。《真刀・神威》の意思そのもの。やっと会えたわね、私だけの可愛い可愛い適合者さん」

「……」

恍惚を帯びた表情で刹那を見つめる。

「お前が俺をここに連れてきたのか? 目的は」

「やれやれ、人間って本当にめんどくさい生き物よね。理由がなきや何かしちやいけないのかしら。まあいいわ、あなたをここに呼んだのは私よ。お話したかったし」

「話だど？お前と話すことなど何も無い！」

「いやね、そんなに怒らないで」

するりと刹那の体に抱きつき、耳元で囁き出した。

「あの双子を殺そうしたことを怒っているの？」

「お前、やはり殺すつもりで……！」

「当たり前じゃない。私の大切な適合者をあんなに傷つけておいて生かしておくわけないでしょ？でも、あなたのパートナーのおかげで仕損じたけどね」

「何故そんなことをする」

「何故？何故って……」

刹那から離れ、目の前でドレスを揺らし妖艶に踊る。

「そんなことに理由なんていらないでしょ？殺したいから殺す。ただそれだけ」

「貴様……！」

「怒った？本当にあなたって優しいのね。小さい時からずっと」

「なに……？」

「私は知ってるのよ？あなたが小さい時からね。ずっとそばにいたんだから当然よ」

両手を後ろで組み、笑顔を向けてきた。

「でも昔はもつと殺伐としてたのに。今はあまくなっちゃったね。あますぎて……反吐が出そう」

「……ッ！」

目の前の美女が握っているのは《真刀・神威》だった。その切っ先を刹那の首へと向けてニヤリと笑った。

「私を使えば使うほどあなたは私色に染まっていくの。まあ、嫌なら使わなければいいのだけれどそうもいかないわよね？」

「……」

「あなたは私を使わなければ勝てない。だってあなたのその《魔術師》としての能力も莫大な星辰力もぜええええええんぶ、私があげたのだから」

「何を、言つて……」

「忘れたの？」

《真刀・神威》の顔が歪む。刹那を嘲るように。

「小さい頃のあなたは《星脈世代》^{ジエネステラ}なんかじゃなかったんだから」

「ち、違う……俺は……！」

「違うのよ、刹那。あなたが何故ここで戦えるのか、何故《蝕武祭》^{エククリプス}で三回も優勝できたのか、何故「神器」^{インセンス}と最初から適合出来たのか」

「や、やめろ……！」

「全部……ぜええええんぶ私があなたにあげたからよ。私があなたと高い適合率があったから、私があなたを選んだの。ま、それも全部あの人たちの差し金なんだけどね」

「違う、違う違う！俺は……！」

「だって、あなたが小さい時から《星脈世代》^{ジエネステラ}だったらあなたのお父さんもお母さんも死なずに済んだ。一緒に戦えた。でもあなたは逃げた、力がないことを嘆いて、憎んで、絶望して……！」

「お、俺は……！」

「あなたの姉が攫われた時だってそう。あなたはただ見ていることしか出来なかった。立ち向かうことさえしなかった、弱虫、臆病者」

「……！」

「成すべき時に成すべき事を成せなかったあなたが……！」

ずいっと刹那の顔の目の前まで顔を近づける。紫色の瞳の奥に黒い闇みみたいなものが蠢いていた。

「あ、まさか懺悔のつもりだったの？あつはははは！だったらそんな笑い話あつたものじゃないわ。あなたは懺悔しているつもりになっているだけ」

「……ッ」

あれは遠い昔。がむしゃらに走っていた時だった。『振り返るな』という言葉の元、少年は走り続けた。立ち止まることなく。

しかし、その幼い身体にも限界は訪れるもので、足がもつれ硬い砂利に身体を打ち付けた。

『ツーーーーー』

何とか起き上がろうとするが、身体は鉛のように動かない。そう言えはいつからだろう、何も食べていないのは――

『僕、死んじやうのかな．．．．．』

少年は仰向けになり、寝転がった。次第に灰色の空から一粒、また一粒と雫が落ちる。

『ごめん、お父さん、お母さん．．．．．。約束、守れそうにないや．．．．．』

次第に瞼も重くなり、味わったことのない眠気が襲ってくる。

『お姉、ちや．．．．．』

そこで少年の意識はブラックアウトした――はずだった。

『力がほしいの?』

声が聞こえる。初めて聞くのに、何故か懐かしい。それもずっと、そばにいてくれていた様な――

少年はうつすら瞼を開いた。

『お姉さんは、誰．．．．．?』

『私? 私はあなたの剣』

『つるぎ．．．．．?』

『そーーーー』

ムクリと起き上がり、目の前の美女と対峙する。身長差はあれど、その瞳は真っ直ぐに自分を見ていた。そう、これが《神威》と刹那の初めての会話だった。

『僕は、このままだと死んじやうの?』

『ええ。どのみち長くは生きられない』

『そっか．．．．．』

幼い刹那の顔がシユンと曇った。

『でも、方法がないわけじゃない』

『え?』

『私の、パートナーになりなさい』

かつて《神威》にもパートナーはいた。だが往々にしてそいつらは自分を道具として見ていなかったのだ。自分はただ仲良くなりた

かっただけなのに――。

結局、その期待に込えてくれる人は表れず嫌気が差した途端、自分はパートナーを殺していた。その次もその次もその次も――。そして辿り着いたのがこの刹那という一般人の少年だった。この子どもどうせ、自分を裏切るだろうと思っていた《神威》はいつ殺すか時を伺っていた。

『お姉さんのぱーとなー？になったら、お姉ちゃんを取り返せるの……？』

『ええ、もちろん』

『……なるよ。僕がお姉さんのパートナーに』

これには当時の自分も驚いたものだ。彼の瞳には年齢には似つかわしい程の怒り、憎しみ、憎悪が宿っていたのだから。

『お姉さんのパートナーになったら、死なないでいいんだよね？』
『ええ』

『それと、お姉さんとお友達にもなれる？』

『……え？』

『僕、お姉さんとお友達になりたい！なる！はい！』

さっきの目とは違い、年相応の笑みを浮かべる刹那が手を差し伸べてきた。

『……』

これにも本当に驚かされたものだ。今まで誰一人、自分と友達になるうなどと言っただけでこなかったのに。ただの強力すぎる道具としか見られてこなかったのに。

いや、簡単に信じていいものなのか。子供の気の迷いかもしれない。またいつか、裏切られるのかもしれない。だが、そんな疑念よりもやはり身体は動いていた。

少年の手を握っていたのだ。

『仲良くしようね！あ、僕は刹那！神木刹那！お姉さんは？』

『私は、《神威》――』

『かむい？かっかい！』

ああ、だから嫌なのだ。人間は。そんな目で見られたらまた期待してしまう。今度こそ、仲良くなれるかもしれないという淡い期待を。だが、この少年なら、自分の全てを託せるかもしれない。これも彼らの差し金だろうが、例えそうだとしてもこの子を守るのは自分だ、と。『この時より、我が身はあなたと共に——』
『行こう、かむい！お姉ちゃんを取り返しに！』
『私はあなたの剣。全てあなたの想いのままに——』
そうして《神威》は自身の力の大半を刹那に貸した代わりに長い眠りにつくことになる。その姿が《正宗》。

そして刹那は後天的にはいえ人類初の「神器」イノセンス 適合者、そして《星脈世代》ジェネステラとして誕生した瞬間でもあった。

医療室のベットから上半身を起こし、瞑っていた目をゆっくり開いた。

「……はっ、ははは……何だ、最初から俺は弱かったじゃないか……」

父も母も姉も、失ったのは全て自分の無力さが原因だった。立ち向かうこともせず、ただ見ていることしか出来なかった自分の弱さが招いたこと。それを無意識のうちに《影星》や仮面の男の所為にすることで逃げていた。

所詮、「神器」イノセンスがなきや自分は強くないし、あそこで野垂れ死にしていた。認めたくないが、「神器」イノセンスに自分は生かされていたのだ。適合者ということだけで。

『あなたは懺悔しているつもりになっているだけ』

(本当に、その通りだ……)

ずつと忘れていたなんて——

手の甲に一滴、二滴と雫が落ちる。

普通の人でもなければ、《星脈世代》ジェネステラでもない。兵器の適合者として生かされているただのモノだ。突きつけられた真実に刹那の今までの想いや、希望が徐々に亀裂が入り音もなく崩れ落ちていく。

「俺は………一体………」
『神木&クロードディアペア、試合開始十五分前です。控え室に移動を開始してください』

刹那は力なく立ち上がり、そのまま歩き出した。

第23話 暴走は止まらない

「おめでとうございます、エンフィールド様！」

控え室に戻ったクロードディアを出迎えたのは、フローラの熱烈な歓迎だった。

「あれ？神木様は？」

「ああ、彼でしたら……」

すると控え室の扉が開く。中に入ってきたのは刹那だった。

「あ！神木……様……？」

「……」

俯いたままゆっくり中に入って行く。フローラには一切目をくれず、準決勝を控えた綾斗とユリスへ向かった。まるで何かに取り憑かれたかのような足取りだった。

「あ、刹那。目が覚めたんだね、よかった」

「全く、心配させてくれる」

「ああ……すまない」

「酷い顔だな、「神器」^{イノセンス}の使いすぎだ」

「しっかしまあ、よくも三組もうちが残れたもんだ」

「ここまで来たら、是非とも同校で優勝を目指したいですね」

刹那の口角が僅かに上がった。

「ようやくベスト四が出揃ったようだね」

執務室の椅子に腰を下ろし、《星武祭》^{フェスタ}運営員会長マディアス・メサ

は大きく息を吐いた。

「ええ。今年の《鳳凰星武祭》^{フェニクス}は前評判こそ振るわなかったものの、蓋を開けてみれば見事な盛り上がりとなりました。アルルカントの代理出場をお認めになったご決断は大正解でしたな。大したお手並みです」

「大成功、と言うにはまだ早いかな。準決勝、決勝で評価がひっくり返る可能性だってあるからね」

「いえいえ、既に現時点で興行収益・観客動員数共に前回の《鳳凰星武祭》を上回っております。ここから評価が変わることなど……」
「先のごことはわからないさ。だからこそ面白いんじゃないかな」

あからさまな世辞と媚を振りまいてくる年上の部下にそう言うと、マディアスは机の端末を操作して複数の空間ウィンドウを開いた。それぞれの空間ウィンドウには今回の《鳳凰星武祭》で準決勝まで勝ち上がってきた八人の選手のデータが映し出されている。

アルルカントから一組。そして星導館から三組。

「どうかな。君はどこが優勝すると思う？」

「は……？いや、私は運営委員ですからおいそれとそういった私見を口にするわけには……」

「ははっ、硬いね。いいさ、私が許可する。これも業務の一環だと思っ
てくれ」

「はあ……」

マディアスに促され、部下は不安そうな顔をしながらも並んだ空間ウィンドウに映し出された顔ぶれを見つめた。

「そうですね……正直、星導館から三組も残るとは思いませんでした。いくら《鳳凰星武祭》を得意としているとはいえ、ここ数年の低迷ぶりには目を覆いたくなるものでしたから」

「うん、その分彼らには勢いのようなものがあるね。ではこの中から優勝出来るペアがいるかい？」

「いえ、確かにどちらのペアも優秀ではありますが、不安定要素が大きすぎます。優勝は無理でしょう。ですが、可能性があるとすれば、私はこのペアが優勝すると思います」

部下が指を指したのは神木・エンフィールドペアだった。

「ふむ、なるほど。では、君の見立てでは現時点で優勝する可能性が大きいのはアルルカントの擬形体ということになるのかな？」

「はい。彼らのスペックには目を見張るものがあります。ここまでの試合を見ても、ほぼ全て圧勝。文句のつけようがありません。妥当に判断するならば、優勝は彼らで間違いないでしょう。ただ……」
「ただ？」

「いえ、果たしてそれが今後の《星武祭》にどのような影響を与えるかを考えると、あまり喜ばしい事ではないかもしれないと……」
「ほう」

「ああ、いえ、これは私ごときが口を出してはいいようは事ではありませんでした。申し訳ございません」

部下はおいそれと頭を下げた。

「いいや、そんなことはないよ。大変貴重な意見だからね。確かに特例措置で出てきた人形が優勝をかつさらっていったら、面白くない者も多いだろうからね。それに今は彼らを応援しているファンも、優勝となると少々勝ちすぎと感じるかもしれない」

今回の特例措置はアルルカントが直接マディアスにねじ込んで来たものだ。つまりこの一件で判断を誤れば、それは即アディダスの責任となる。

「……だけど、そうだったらそうだったで仕方ないことだよ。我々はあくまで彼らに適正な場を提供しているだけに過ぎないからね」

「……そうですね」

部下がそう言うのと、さも今思いついたといった顔でマディアスに言った。

「ところで……委員長はどこが優勝するとお考えで？」

「私かい？うーん、そうだね……」

マディアスも八つのウインドウを見比べる。

「……アルルカント、だね」

「やはり、ですか」

「純粋に戦闘能力を比較すればこの結論になるのは否めないよ。十中八九今回の《鳳凰星武祭》は彼らが制するだろうね。……つと、そろそろ時間かな」

「ああ、確かにフラウエンロープとの連絡会議のお時間ですね。これは無駄話をして貴重なお時間を取らせてしまいました」

「いやなに、私から頼んだのだから気にしないでくれ」

マディアスが軽く手を挙げると、部下は一礼をして執務室から去つ

ていった。それを見送ったマディアスはため息を一つ付いてから空間ウィンドウを一つ一つ消していく。アルルカントの人形が消え、紗夜と綺凜が消え、綾斗とユリスが消え、クローディアが消えた。残るは神木刹那の映し出された空間ウィンドウのみ。そこでマディアスの手がピタリと止まった。

「……神に選ばれた少年、か」

そして神木刹那の空間ウィンドウも消え、執務室を静寂が包んだ。

—————《鳳凰星武祭》十四日目。シリウスドーム、控え室。

「それじゃ、そろそろ行きましようか」

綺凜がそう声をかけると紗夜は手元に落としていた視線を上げ、いつもの無表情で頷いた。

「？ それ、なんですか？」

紗夜は何やら古い紙切れを見ていたようだ。

「……これは私のお守り」

紗夜がそう言って広げて見せてくれたそれは、手作り感あふれる手書きのチケツトだった。子供の手によるものだろう、可愛い文字で大きく『願い事チケツト』と書かれている。

「なんでも願いが叶う、魔法のチケツト」

「わあ……素敵ですね」

おそらく紗夜にとって大切な思い出の品なのだろう。そのチケツトを扱う手つきからも、それがひしひしと感じられる。

「あ、じゃあもしかして今日の勝利をお願いしたのですか？」

しかし紗夜はぶるぶると首を振った。

「違う。これはあくまでお守り。今日の勝利は、あくまで私たちの力で掴むもの」

「……そうですね。失礼しました」

紗夜の言葉は至極ごく最もだ。何かに頼るような甘い考えでは、この先を勝ち抜くことは出来ない。綺凜がそう思っただけで気合を入れ直していると、チケツトを懐へしまった紗夜がゆっくりと綺凜に向き直る。

「……綺凜」

「あ、はい。なんででしょう?」

素直に問い返すと、紗夜は唐突に頭を下げた。

「……ありがとうございます」

「ええっ!? な、なんですか、急に!」

「ここまでこられたのは、綺凜の力があってこそ。感謝する」

「そ、そんな、やめてください……!」

突然の出来事に、あわあわと綺凜が両手を振る。

「……私はどうしても辿り着きたかった」

紗夜はそう言って、ぎゅっと拳を握り締めた。

「アルルカントの自律型擬形体を倒すため、ですよね?」

紗夜が《鳳凰星武祭》に出場するに事になった経緯は綺凜も聞いている。アルルカントの学生に紗夜の父親が作った銃が侮辱され、それを撤回させるためだとか。けれど、確かに少しばかり不思議に思わななくてもなかった。紗夜にとってそれがとれほど大事な事だったのはわかるが、それにしてもその為だけに《鳳凰星武祭》に出場するといふのは、やや度が過ぎていっているようにも思える。するとそれを察したのか、紗夜は小さく苦笑した。

「……綺凜には教えておこう。私のお父さんは、勤めていた研究所の事故で身体の大部分を失っている」

「え……?」

あまりにもあっさり言うので、綺凜は一瞬その意味がよく理解出来なかった。

「幸いにも脳は無事だったので、今は補助金で家に工房を作ったその中枢ユニットと連結している。本人的には慣れてしまえば生身の頃より精密な作業がこなせるようになったので、満足らしい」

「……」

綺凜は何を言っているのか分からず、ただ困ったように俯くしかできな

「気にしないでいい。お父さんは今の方が自由に好きなことを研究できるようになってよかったと言ってるし、もう私も割り切ってる」

「好きなことって……」

「……私のために銃を作ること」

紗夜はそう言っつて、腰のホルダーに収めてある煌式武装の起動体を撫でた。

「……紗夜さんのため？」

「そう。だからある意味カミラ・パレートが言っつていたことは当たっつている。多くの『誰か』ではなく、『私』というただ一人に向けて作られたものだから」

そこで息を吐くと、紗夜は一度目を瞑り……ゆっくり開く。

「ただ、それでも……だからこそ、それを否定する事を私は許さない」

そう言う紗夜の瞳には、強く固い意志が煌めいていた。それは決して曲げることのない信念だ。

「……あ、そうだ。お父さんのこと、綾斗には内緒で頼む」

「どうしてですか？」

「綾斗は優しいから。変な気を使わせたくない。この大会が終わつたら話すつもり」

「……わかりました」

「いっぱい喋つたから疲れた……行こう」

紗夜は小さく息を吐くと、控え室を出る。

「あ、はいっ」

綺凜も千羽切を腰に差し、慌ててその背中を追いかけた。二人を待つのは、最大の壁。同校二位と九位の実力者。最強の相手を迎え撃つ二人の背中を綾斗は静かに見送つた。

ステージへと続く通路は長く、薄暗い。そう言えば、シリウストームで試合をするのはこれが初めてだ。他の大型ステージと何が違うという訳でもないのだが、やはりアスタリスクのメインステージで試合をするというのは少し特別な気がする。

入場ゲートの手前で止まり、静かに息を吸つて、吐いた。

「刹那とエンフィールドは強敵。多分、私たちが戦つた相手の誰よりも」

「はい」

「でも、叶えたい願いのために負けるわけにはいかない」

「……はい」

「……もう一度言う、綺凜がパートナーで良かった。ありがとう」

「……私も、紗夜さんがパートナーで良かったです」

紗夜と綺凜は小さく笑い合った。

「後ろは任せろ。だから、綺凜は思い切り行ってこい」

「了解です」

光と歓声が渦巻くステージへ、足を開ける。

「……絶対に勝つ」

「……はいっ!」

二人は拳をぶつけ合った。

『はいはい、皆様お待たせしました!シリウストームの実況担当毎度おなじみ梁瀬ミーコ、解説はチャムさんです!』

『どもーっス』

『えー、そういうわけでして《鳳凰星武祭》もいよいよ準決勝!その第一試合は星導館学園の神木刹那・クローディア・エンフィールドペアと、同じく星導館学園の沙々宮紗夜・刀藤綺凜ペアの、早くも同校での激突です!いやいや、楽しみですねぇ!』

『これはかなり見物ツスよ』

ステージ上では既に四人の視線が交わっていた。

「まさか準決勝のお相手があなた方というのは驚きました」

「それはお互い様」

「全力で参ります!」

「……」

――

『あなたのお姉さんは、アスタリスクにいるわ』

『なに……!?!』

「そんな刹那先輩が、「神器」に……」

「せいぜい楽しませてくれよ、沙々宮、刀藤」

刹那は凶悪な笑みを浮かべた。

第23話 暴走は止まらない

第24話 覚悟の準決勝

「はあっ！」

「——」

綺凜の千羽切が弧を描いて刹那へと迫り、それを素手で受け止めた。握る手から鮮血が一滴、二滴と滴り落ちる。

「っ!？」

「綺凜！」

「く……!？」

刹那は千羽切を離し、《神威》で綺凜に切りかかる。それを紙一重で躲し、そのまま背後に回り込むようにして再度上段から斬り落とすが、集まり出した万応素で阻まれる。

それでも綺凜の剣戟はほんの一瞬も途切れることなく、流れるように次の一撃へと繋がっていく。

『ステージの中央では刀藤選手の物凄い連続攻撃が続いております！』

『これが噂に聞く刀藤流の“連鶴”ツスカー。いやー、なるほどなるほど、ホントに隙がないっスねー』

「————“連鶴”。

それは綺凜が学ぶ刀藤流の奥義であるが、ただ一つの技を指すものではない。繋ぎ手と呼ばれる型を組み合わせるにより途切れのない完全な連続攻撃を成し得る技術こそが“連鶴”なのだ。

「————」

（あれは刹那先輩じゃない……!私が止めるんだ……!）

「————ッ!？」

収束し、“連鶴”を防いでいた万応素が綺凜の目の前で広がり、衝撃波として綺凜を吹き飛ばした。

「綺凜！」

「だ、大丈夫です……!？」

紗夜のいる後方まで一瞬にして吹き飛ばされた綺凜は落ちる汗を拭う。刹那はそれを冷めた目で見ていた。

「……………」

紗夜は言葉を発さず、ただ力を無慈悲に振るう刹那に一種の恐怖を抱く。

「まだ、です……………！」

「綺凜……………」

「私の憧れた刹那先輩を、取り返すまでは……………！」

よろめきながらも立ち上がり、再度構え直す。

「わっかんねえなー」

「何がだ、夜吹」

「あんなにボロボロになってまで、何で他人に関わろうとすんのが俺にはわかんねえ」

「友を救いたいと言う気持ちに他ないだろう」

「そういうもんかねえ……………」

（解せねえな。圧倒的力の差があるのが分かっても尚、戦う意志を持ち続ける意味がわかんねえんだよなあー何だ刀藤をあそこまで駆り立ててんだ）

そんなの分かりきっていた。おそらく刹那だからだ。いや、例え刹那で無くて彼女自身が傷つくのも厭わず助けるために戦うだろう。それが刀藤綺凜という少女なのだ。

（故にそのあまさが自分の剣の冴えを鈍らせてるのも気づいちゃいない）

夜吹は試合を見ながら目を細めた。

（どのみちあの状態の刹那には絶対に勝てない。早く「神器」イフセンスを切り離すかしねえとあいつらが危ねえ）

《真刀・神威》を肩に担ぎ、遠くにいる二人を光が消えた瞳で睨む。乱れぬ息、無くならない星辰力。全てが規格外な怪物相手にどう対処すればいいのだろう。

（弱気になっちゃダメ……………）

全力で自身を叱咤する。震える足に力を入れ、目の前の男に視線を向ける。まだ戦う力があるのか、と思ったように刹那の顔が一瞬だけ驚いた表情をした。だがそれは一瞬にして消え失せ、また無表情へと

戻る。

「刀藤綺凜、参ります！」

綺凜は千羽切を正眼に構えると、刹那と真つ向から対峙する。

「それじゃ、こっちも始めよう」

「紗夜……」

「四十一式煌型粒子双砲ヴァルデンホルト」

クローディアと対峙する紗夜がポツリと呟いた。父が自分のために作ってくれた武器の名を呼ぶこと。それは紗夜が紗夜自身に定めたルールの一つだけ。巨大なバックユニットを備えた煌式武装が顕現し、それに応じて紗夜の髪飾りが簡易照準モニターを展開させる。腕全体を覆うような砲身は、左右に一門ずつ。着地と同時にそのマナダイトへ星辰力を注ぎ込み、紗夜はトリガーを引き絞った。

「……………《バースト》」

銃口の前に青白い光が集約し、膨張。次の瞬間、甲高い発射音と共に巨大な光弾が二つ、大気を切り裂くかのような速度で射出される。

「……………」

辛うじてその一つをかわしたクローディアも、二つ目の光弾を避ける事はできない。だが、防ぐ手段もない。

甲高い発射音がなつたと同時に刹那の意識がクローディアへと向いた。そして一瞬にしてクローディアの前へと移動し、迫り来る光弾を真つ二つに両断した。後方へと絶たれた光弾が着弾し爆発する。

「……………？ せつ、な」

名前を呼んでも返事はなかった。やはりまだ「神器」^{イノセンス}に操られていのだろう。しかし、何故助けてくれたのだろうか。

「……………」

（斬った。ヴァルデンホルトの光弾を）

虚ろな目で今度は紗夜を見つめ、《真刀・神威》を構えた。戦闘態勢に入ったのだ、ここからは今度は紗夜を蹂躪するために。

（いけない……！）

「逃げて！紗夜！」

「……………」

しかし、もう遅かった。そこには刹那の姿はなく、既に紗夜の後にいたのだ。

「……………」

片手で《真刀・神威》を下段から上段へと切り上げる。それを間一髪でかわしたが衝撃波でステージの地は切り裂かれ、ヴァルデンホルトを一撃で破壊した。

「くあ……………」

宙へと投げ飛ばされた紗夜は何とか態勢を立て直し、新たな武装を展開しようとしたがもう既に自分の戦いは終わってる事に気付かされる。またも背後を取られていた。あの距離を一瞬にして詰めていたのだ。

黒雷が吠え、唸り渦を巻く。《真刀・神威》の赤黒い刀身には既に黒雷がまとわりつく様に迸っていた。シリウスドーム内に一点の黒い光が煌めく。

「やめろッ！刹那！」

「紗夜！逃げてッ！」

ユリスと綾斗の声は届かない。

「紗夜さんッ！」

綺凜は全力で走る。間違いない、あんなのを食らったいくら星脈世代とはいえ一溜りもない。刹那は溜めた黒雷を上へと放つ、それは彼の最強の流星闘技の初めの動作だった。

それは巨大な顎として姿を現した。超高压の電気で出来た悪魔の顎。

「神木、殺す気か!?!」

「刹那さん！」

今まさに自分の眼前で自分を喰おうとしている口があるのに、星辰力はまだ余っているのに、何故か逃げる気になれなかった。

絶望からじゃない。諦めたくはなかったが、流星にこれは無理だと思ふ。直感的に無理だと感じたのだ。

綾斗の声もユリスの声も綺凜の声もちゃんと本当は聞こえている。逃げられるものなら持つとつくに逃げてる。だが、あの切り上げの時に

「う……………」

もぞりと綺凜がうめき声をあげながら、顔を上げた。クローディアも同時に何とか起き上がる。空いた天井から太陽の光が差し込み、クレーターの中央を照らした。

「さ……………やさん……………」

そこで綺凜の目は最大まで開かれた。

クレーターの中央には衣服が焦げ、体からは僅かに蒸気が立ち、うつ伏せで倒れている紗夜がいた。

「ま、さか……………」

『沙々宮紗夜、意識消失』
アンコンシャスネス

「……で緊急のインターバルを取ります！神木選手のあの一撃で惜しくも沙々宮選手は敗れてしまいました。校章を通してのバイタルチェックでかなり心肺が微弱になっていたため緊急搬送し、集中治療室へと運ばれています！容態が分かり次第、試合を再開させていただきますー！」

「マジかよ……………あれが《閃光》の本気なのか……………」

「あの沙々宮って子、焦げてなかった……………?」

観客席から不安の声やら感嘆の声が漏れる。

「……………」

綺凜は拳を握りしめた。

「綺凜……………」

クローディアは片腕を抑えながら呟く。

『綺凜、後は任せた。刹那を頼む』

「……………!!」

千羽切を支えに立ち上がる。その瞳に、静かな闘志を燃やして。

「刹那先輩……………いや、神木刹那」

刹那は《真刀・神威》を肩に担ぎ、綺凜へと向き直る。

「インセンス神器」の傀儡となったあなたを……………倒します」

千羽切の切っ先を刹那へ向ける。

「戦場に事の善悪なし……………ただひたすらに斬るのみ……………」

綺凜の瞳が淡く輝き出す。星辰力がそよ風のように綺凜の周囲を

躍る。

「《疾風迅雷》 刀藤綺凜、推して参りますッ！」

次回 綺凜、覚醒

第25話 決別の夜

「刀藤のやつ、土壇場で殻を破るたアな……！」

荒地と化したシリウスドームのステージに淡い燐光をたなびかせる綺凜を見て夜吹は眩く。

「っ……」

「ユリス」

ユリスは綾斗の顔を見上げた。

「大丈夫、綺凜ちゃんならきつと」

「……ああ」

ユリスは再度、ステージに立つ二人を見下ろした。

綺凜は自身から湧き溢れ出る力を感じながら、目の前の相手に目を向ける。未だ強大な力の呪縛に囚われている大切な人を取り返すために、自分に託してくれたパートナーのために――

「もう、遅れはとりません。必ず――あなたを取り戻します！」

「――来い」

その言葉を皮切りに、二人の姿は一瞬にして消えた。

そして、次に姿を現した時は剣を交えていた。音と影すら置き去りにする神速の剣戟が観客はおろか、実況、有数の実力者の目すら釘付けにした。遠くで衝突すれば、今度は近くで衝突し、後から聞こえてくる剣戟音がドーム内を反響する。その打ち合いに圧倒され、歓声を上げることすら忘れていた。しかし、綾斗とユリスだけは決して目を離さなかった。劣勢だった綺凜がついていつている。お互いがお互いを読み合い、一瞬の隙も許さない。

「はああー」

刹那が踏み込んだ瞬間、一足飛びに斬りかかった。逆袈裟の一撃を刹那は《神威》で受け止めるが、跳ね上がった切っ先はすぐに次の斬撃へと繋がっていく。

《連鶴》だ。

それでもなお、その全てに完璧に対応してくる。

(閃理眼で読まれてる………!)

綺凜は構わず攻撃を続けるが、上段からの斬撃を防いだ《神威》が、そのまま綺凜の身体を薙いだ。

「……………」

すぐに軌道を修正し、《神威》の一閃を防ぐ。しかし、その衝撃は凄まじく千羽切が軋みをあげ、その身体はいとも簡単に弾き飛ばされた。綺凜はまだ十三歳といえども厳しい鍛錬を積んできている《星脈世代》であり、膂力も非常に優れたものを持っている。その打ち込みは重く、並の《星脈世代》ならばよとほどの力があつたとしても防ぎ切るのが精一杯だ。綾斗のように剣技に優れた者ならある程度刀を弾くことは可能だろうが、身体ごと跳ね飛ばすなど尋常ではない。ま

ず人間では不可能だろう。

「うっ……くっ………!」

霞む視界に刹那が映った。

「ま、まだ………!」

残りの星辰力も少ない。あと一撃、一合持つかどうか。

「綺凜ちゃん………!もう星辰力が………!」

先程まで溢れ出ていた星辰力は淡い燐光となって放出されていたが、もうそれも消えかかっていた。千羽切を杖替わりにして立ち上がる姿はもう、見てもいられなかった。制服はボロボロ、口や額からは血が流れていた。

「あきらめ………ない………!」

「……………」

「やく、そく、したんです………せつな、せんぱいを………と
りかえすって………」

「……………」

「だから………!!」

綺凜の瞳からは光が消えかかっていた。空元気もいいところ、かつこ悪いっちゃありやしない。それでもいい、今ここで倒れても綾斗たちに何かを繋げることが出来るなら……

「それに賭ける……!」

綺凜は最後の星辰力を振り絞り、刹那に向かって駆けた。惨めに見えるかもしれない。無駄な足掻きかもしれない。でもやっぱり、それでも足掻きたい。だって、私の助けたい人は、笑った顔がとても可愛らしい人だから……そんな表情はしないで欲しいから……

コツン

刹那の胸に、綺凜の拳が当てられた。何の変哲もない、パンチとは程遠い、本当にただ当てただけの拳だった。

「……?」

「はや、く……もどつてきて……せん、ぱ……」

先輩にはずっと、笑っていてほしいから……

そこで綺凜は刹那に事切れたように寄りかかった。

『刀藤綺凜、意識消失。アンコンシヤスネス勝者、神木・エンフィールドペア』

静かな機械音声。それは静まり返ったドーム内に響いた。

数秒の間、大きな拍手が沸き起こった。

刹那の目からは一粒の涙か溢れ出る。拍手喝采を浴びながら、自分に寄りかかる少女が医療班に運ばれるまで、その顔を見つめ続けた。

「刹那は…….?」

「ずっと、綺凜ちゃんと紗夜につきつきりだよ」

「そうですか……」

すっかり夜になり、月明かりだけが病室内を照らし、隣り合わせのベッドで眠っている二人を照らしていた。

「……」

眠る綺凜の手を握ると、僅かながらに握り返してくる。

「後戻りは出来ない……か」

『先輩!』

「……く、く……」

刹那の口から笑いが漏れる。静かな病室に嬉々とした笑いが響いた。

「全く、あいつはどこに行った」

ユリスはドーム周辺を探し回っていた。遅い時間になっても戻ってこない刹那を探していたのだ。

少し外側を探していると、丁度噴水の前にこちらに背を向け立っている刹那がいた。

「刹那！探したぞ！」

ユリスは駆け足で刹那に近づく。

「帰ろう、刹那」

「……………もう、放っておいてくれ」

「え……………？」

「……………」

「何を言っている！そういうわけには……………！」

刹那は軽く舌打ちし、ユリスの胸ぐらを掴んだ。

「っ!？」

「はつきり言わなきゃわからないか？」

もうそこには、かつての彼はいなかった。見たことない悲しそうで、そして、何かに取り憑かれたかのような虚ろな目でユリスを睨んだ。

「迷惑なんだよ……………！他人のくせに、偉そうに言いやがって……………！」

「やめ、ろ……………！刹那、お前は「神器」にいい様に使われてるだけだ……………！目を覚ませ……………！」

「黙れッ!!」

胸ぐらを掴みあげる力が更に増す。

丁度そこにユリスと刹那を探しに来た綾斗が通りかかった。

（あれは……………ユリス!?)

傍から見れば首を絞めあげているように見えた綾斗はダツシユで向かう。

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ、黙れッ!!」

「か、はッ……!!」

「ユリスッ!」

胸ぐらを掴む手を綾斗は力づくで引き剥がした。尻餅をつき咳き込むユリスを庇い、綾斗は刹那を睨んだ。

「どういうつもりだい?刹那」

「何なんだよ、どいつもこいつも……俺の邪魔をして……」

「はあ、はあ……」

「俺にはもう「神器」しかないんだ。これしかないんだよ……!!
!なのに……!!」

「落ち着くんだ、刹那!君は今も「神器」に取り憑かれてるだけだ!」
「黙れよ……!!」

「君は「神器」に頼らなくなつて充分強いじゃないか!それは危険なんだよ!」

「分かっているような口を聞くなッ!」

「神器」による感情の増幅。例えそれが本人の意思ではなくとも、根底に眠る本心は抑えることは出来ない。「神器」に取り憑かれてる今の状態なら尚更だった。

「お前らに何が分かる!?最初から全てを持つてる、お前らにッ!!」

刹那の目からはボロボロと涙が溢れていた。

「家族も、居場所も、力も!最初から持っているお前らなんか!俺の何が分かるって言うんだよ!言ってみろよッ!!」

刹那は今度は綾斗の胸ぐらを掴んだ。今まで本心を語らなかつた少年の本当の気持ち。孤独、悲壮、憎悪、あらゆるものが混じりあつたその言葉に綾斗は何も言い返せなかつた。

「それでも、俺たちは君の……!!」

「うるさい、黙れッ!もう俺は、立ち止まれないんだよ!俺のことは放つとけよッ!」

「それでも、その力は間違ってる!力はただ力でしかないって言ったのは、君じゃないか!俺は認めない!そんな自分や他人を傷つけてまで得た強さは間違ってる!」

そこで綾斗は掴まれていた手を振りほどき、距離を取った。ユリス

を気かけながら、視線は刹那から外さない。

「だったら否定してみせろよ……俺を倒して、俺の強さを否定してみせろ……！」

「もちろんそのつもりだよ」

決定的な決別。刹那は踵を返し、闇夜に溶けるように消えていった。

「ユリス、大丈夫かい……？」

「……ふっ……うっ……」

「ユリス……」

彼女は泣いていた。決して、弱音も弱みも吐いたり見せなかった彼女が泣いているのだ。

「違うんだ……私はただ……刹那の、力になりたくて……なの……」

「わかってる。わかってるよ、ユリス」

「綾斗……私は、間違っていたのか……？」

そこで、綾斗はユリスを抱き寄せそつと頭を撫でた。

「間違っってなんかないさ。大丈夫、刹那は俺たちで正気に戻してやろう。間違っって言うって言ってあげよう」

「綾斗……」

「やれるさ、俺たち二人なら」

「うう……」

(刹那、君はやっぱり間違っってる。君を倒して、君の強さを否定する……！)

その後もユリスは泣き続け、綾斗はユリスが泣き止むまでずっと頭を撫で続けた。

第26話 最期の想い 前編

綾斗は時間を確認すると、控え室のソファに座って目を閉じていたユリスに声をかけた。

「そろそろだね、ユリス」

「……………そうか」

ユリスは短く答えると、立ち上がって大きく深呼吸をした。

ステージへ続く通路をこうしてユリスと歩くのはもう何度目だろうか。一番最初、一回戦に臨むため初めてここを通ったのが随分と昔のように思える。まだたった二週間前の話だというのに。

と、ふいにユリスがぼそりと呟いた。

「……なあ、綾斗。私は……………」

「何も言わなくていいよ、ユリス。刹那を取り戻す、その思いは俺も一緒だよ。ユリスは刹那の事になると、周りが見えなくなるからね」
「な……………」

ユリスは思いがけない言葉に顔を赤くし、狼狽した。その顔がおかしく少しだけ笑ってしまう。

「やれるさ、俺たちなら」

「そうだな」

小さく息を吐いたユリスは強く拳を握り締め、ゲートをくぐった。

『さあー、東ゲートからは星導館学園の天霧綾斗選手とユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト選手の入場です！二週間の長きに渡って様々な闘いが繰り広げられてきたこの《フェニックス鳳凰星武祭》も、いよいよラストバトル！決勝戦です！』

眩い光の乱舞。

その中を進みながら、ユリスが呟く。

「不思議なものだな。こんな状況だというのに……今の私はこの試合に勝ちたくてたまらない」

「うん、俺もだよ」

そう答えると、嬉しそうにユリスが頷く。

「よし、ならば私もお前も精々欲張るとしよう。望むもの全てを手に

入れて見せようではないか」

「何一つ取りこぼすことなく、ね」

綾斗とユリスが見つめる先には二つの影。

その片割れ——瞳は鮮血のように真っ赤に染まり冷徹な表情が一変して不敵に笑った。

「よく逃げずに……虫けら共、死にに來たのか？」

「生憎と死ぬつもりはなくてね。君を取り戻しに來たんだ。それと、一緒に優勝も貰っていくよ」

「人間風情がよく吠える。優勝などに興味はないが、貴様らは実に不愉快だ。いつ刹那あの子が目覚めるか分からないからな。不確定要素は、ここで始末してやる」

「……クローディア」

「私は……」

「大丈夫。刹那は絶対に取り戻すから」

「綾斗……」

『そろそろ開始時間が迫って参りました！さあさあ皆様、泣いても笑ってもこれが今《鳳凰星武祭》最後の試合です！果たして頂点に立つのはどちらのペアなのか！』

興奮した実況の声を聞き流しながら、精神を集中させる。

試合開始は正午丁度。

あと、三、二、一……

「《鳳凰星武祭》決勝戦、試合開始」

胸の校章が最後の合図を告げる。それと同時に刹那の星辰力が爆発した。

「くくくくつ……！」「神器」解放、《真刀・神威》

赤黒い片刃の大剣を顕現させた。迸る赤雷に息を飲む。

「行くよ！ユリス！」

「ああ！」

綾斗とユリスは真っ直ぐに刹那へと向かった。

（出し惜しみはなしだ！最初から全力で行く！）

「天霧辰明流剣術中伝——九牙太刀！」

五つの突きと四種の斬撃を組み合わせた九連撃。中伝の中でも最高難度の技だが、その全てが防がれてしまう。

「ーーーーふっ」

「……………だろうね」

「ーーーー？」

それでも余裕の笑みを見せる綾斗に、刹那は顔を曇らせる。刹那相手にこんな技が通じるとは思っていない。

防がれる事は想定済みだ。

「咲き誇れーーーー九輪ブルームの舞焰花ローズ！」

直後、綾斗の背後で猛烈な熱気が上がった。いくら「神器」とはいえ、手は塞いでいる。防ぐ手段は限られているはずだ。さらに多方向からの同時攻撃となれば更に限られてくる。

「ーーーーー」

上下左右から襲いかかる炎の花を、刹那は何もせず直撃をくらった。普段よりもずっと遠距離からの発動なのに、ユリスのコントロールには一切の乱れがない。

「天霧辰明流剣術初伝ーーーーふたつみずち 貳蛟龍ニウカウリウ！」

その隙に綾斗はさらに踏み込んで次の技を繰り出した。が、もうそこには

(い、いない……………!?)

「人間、面白い技を使うな。どれ、見様見真似だが私も使ってみるとしよう」

「いつの間に……………!!」

「あ、綾斗！」

「〃九牙くが太刀がたち〃」

刹那が繰り出す〃九牙太刀〃。

神速の速度で放たれる五つの突きと四種の斬撃。もちろん綾斗ですら避ける事は叶わず、防御もできず、その身体に強烈な九連撃が叩き込まれた。

「がはっ……………あ……………!!」

身体に風穴を開けられたかのような錯覚を覚える程に強烈な九連

撃に意識が飛かける。

「綾斗ツ!!」

「つまらんな」

綾斗の手を掴み、接近してくるユリスに向け放り投げた。

「つつー!」

何とか綾斗を受け止め、刹那から距離を取る。

「終いか。大言の割にはだな、人間」

「しつかりしろ、綾斗!」

「くっ……そ……!」

「貴様らより、あの刀藤綺凜とかいう人間の方が余程やりがいがあったが、どちらにせよ「神器」イノセンスである私にとっては虫けらと何ら変わりはない」

つまらなそうな表情でユリスと綾斗を見下げる。

「まだまだ……!……!……!……!……!……!……!」

「畳み掛けるぞ!綾斗!」

「了解!」

「ほう……!」

綾斗を先頭にユリスが追従する。

「咲き誇れ!——赤円の灼斬斬!」リビングストーンデイズ

地面から無数の炎が吹き上がり、渦を巻くようにして炎の戦輪が現出する。いつもより若干小粒なのは、威力よりも数を優先させたのだろう。優に二十を超える灼熱の戦輪が刹那を襲う。

「ふん」

刹那は右指を前に出しそして、パチン——と鳴らした。

瞬間、無数の赤雷が炎の戦輪を全てかき消した。

「くっ……!……!……!……!……!……!……!……!……!」とびあざみ

綾斗は身体ごと回転させてのに連撃を叩き込むが、それすらも防がれる。《黒炉の魔剣》と《真刀・神威》が火花を激しく散らしながら鏢迫り合いをし合う。

「ぐう……!」

「邪魔だ」

「がつ……！！」

綾斗を蹴り飛ばし、追撃を仕掛けようとしたが、

「よくやった、綾斗……！！」

「なに……！！」

「綻べ……栄裂グロリオサの炎爪華……！！」

ユリスがアスペラ・スピナーを振り下ろすと同時に、地面に魔法陣が浮かび上がった。巨大な炎の爪が噴き上がり、そのまま刹那を握り潰す。

「……くどい」

が、《真刀・神威》を一閃。

巨大な赤雷により巨大な炎の爪は虚空へ虚しく消え失せた。

「そ、んな……！！」

「ネタは尽きたか、人間」

「く……！！」

「もういい、楽にしてやる」

そう言った瞬間、刹那の姿がぶれた。

綾斗の背後に移動し、頭を掴みあげ放り投げた。

「ぐあつ……！！」

「早蕨さわらび」

《真刀・神威》を地面き突き立て、針状と化した赤雷が綾斗の身体をそのまま串刺しにした。

「あ……！！」

「死ね、人間」

「あや……と……？」

ユリスは無残に転がる綾斗に歩み寄る。串刺しにされた箇所から血が流れ、最早戦える状態ではなかった。

『天霧綾斗、意識消失アンコンシャスネス』

『救護班、天霧選手を集中治療室へ！』

アナウンスの焦った声がドーム内に響き渡る。

「さあ、あとは貴様だけだ。女」

「……」

「まだ、私もいます」

「ん？」

クローディアがそつと歩き出し、ユリスの前に立った。

「ほう。貴様はそちらを選んだか」

「……………」

「まあいい。いずれ、貴様も殺すつもりだったから手間が省けた。だが酔狂な人間もいたものだ、己から死にたがるやつがいるとはな」

「もう、私の大切な人の体で……………」

《パンドラ》を握り締め、目の前の怪物を睨みつける。

「私の大切な人を傷つけさせはしません……………！」イノセンス「神器」!!

あなたは、私が止めます!」

「いいだろう、まずは貴様から殺してやろう。人間」

無数の赤雷が刹那の周りを駆け巡る。

「ユリス、行きますよ……………」

「ああ……………」

「神」の力を思い知れ」

次回

この世に神様がいるのなら……

その全てを私は燃やし尽くしてみせる……

神を殺すことが出来るのがまた神だと言うのなら……

喜んでその力、使ってやる。私の大切な人を取り戻す為なら

ば……

私はお前に恋をしている……

第27話 最期の想い 後編

第27話 最期の想い 後編

――圧倒的。

それ以外に表現しようのない強さだった。

「先程までの威勢の良さはどうした、人間」

刹那の《真刀・神威》を紙一重でかわしながら、その死角へ回り込んだクロードディアが一对の剣を振るう。

が、それは当然のように防がれ、届かない。

刹那は喜々に顔を歪め、手を握り締める。

「ああ……！この体は本当によく馴染む。流石は私の適合者だ」
《パン！！ドラ》を、突き立て状態で防いでいた《真刀・神威》を更に地面に押し込んだ。

「くあ……！！」

《真刀・神威》を引き抜き、反動で宙に浮いたクロードディアの胸元にその柄を軽く押し当てた。

「きやああああああ！！」

瞬間、何かに押されるかのようにクロードディアの体がくの字で外周の壁に激突した。

「クロードディア！」

「う……！！っ!?ユリス、逃げて……！！」
「……！！っ!?」

振り向くと既に自身の背後にいた刹那が《真刀・神威》を振り下ろす瞬間だったが、咄嗟にアスペラ・スピナーでそれを防ぐ。

「ぐ、ああ……！！」

（お、重い……！！）

火花が飛び散り、ユリスの体がどんどん押し負けていく。

「はああああああ！！」

再度詰め寄ってきたクロードディアが刹那へ向けて一对の剣を振るう。

「矮星双舞！」
メモント・モリ

「小賢しい」

罅迫り合いを止め、直ぐに双剣による連撃に対応する。

(そんな……!!)

一瞬の隙を突かれ、《パンドラ》を弾き飛ばされたクロードの首を掴み上げる。

「か……は……!」

「愚かな。己の非力さを嘆くがいい」

周囲に赤雷が迸り始める。

「やめろ……!」

ユリスの言葉に全く耳を貸さず、《真刀・神威》の刀身に赤雷が纏わり付く。

「やめろ……刹那アツ!!」

「終わりだ」

笑みを浮かべながら、赤雷を纏った《真刀・神威》でクロードを斜めに一閃した。

「……」

「く、クロードアツ!」

(ああ、やっぱり私でもダメでしたか……後は、あなたが最後の希望です。ユリス……)

口から血を流し、目からは涙を流したクロードはそつとユリスに手を伸ばした。

『クロード・エンフィールド、アンコンシヤスネス意識消失』

「あ、ああ……!!」

その手をユリスが掴む前に、クロードは地面に崩れ落ちた。

「私とした事が、少々手元が狂ってしまった。まだ完全には馴染んでなかったか」

ユリスがクロードに近づくと、まだ僅かに息があった。斬られたところも比較的傷は浅い。

「あれが、「神器」インセンスの本性……素晴らしい。美しいよ、神木刹那くん」

マディアスは委員長席から試合を見ながら、口角を吊り上げる。

「さて、残りは貴様だけになったな。人間」

「……………」

「安心しろ、懺悔は聞かん。直ぐに奴らの所に行かせてあげる」

「……………れ」

「ん？」

「黙れ……………」

ユリスが立ち上がると同時に周囲に炎の燐光が舞い散る。

「まだそんな力を……………面白い」

「貴様は私が倒してやる、「神器」イノセンス……………友の……………」

私の大切な人の心は、返してもらおう……………ツ!!」

アスペラ・スピナーを構え、刹那へと駆け出した。

「はあああああ!!」

「ふん」

再度衝突し、剣戟音がドーム内に響き渡る。

「貴様だけは……………私が……………ツ!!」

「ツ……………」

(何だ、コイツは……………)

「私が倒す!!」

ユリスの髪がまるで燃える様な色に輝き、瞳が炎の様に煌めく。

「チツ……………!」

ユリスを弾き飛ばし、顎を模した赤雷をユリスへ放ち、後方の壁に激突させた。更に、無数の顎の赤雷を出現させ、一斉に放つ。凄まじい轟音が鳴り響き、ユリスがいるであろう煙が漂う場所を見つめ、吐き捨てた。

「ふん、所詮この程度か……………」

踵を返した瞬間、後方から焰の槍が刹那の頭を目掛け飛来してきた。

「……………!」

すぐさま《真刀・神威》で防ぎ、力任せに弾き飛ばした。遠くの方へ着弾し爆発が起きる。

「はあ……………!はあ……………!はあ……………!はあ……………!」

煙の中で陽炎のように揺らめく一つの人影。

「貴様………!」

ガチャリ、と瓦礫を踏みつけながら煙を払う。アスペラ・スピナーを握りながら、覚束無い足取りで刹那の前に姿を現した。傷だらけで最早満身創痍の様子に会場の空気が張り詰める。

「貴様の、攻撃は………終わりか………?」

「なに………?」

「ならば、私の、番だな………文句はないだろう………ツ!

不敵に笑うユリスの顔を見ながら、刹那は顔を抑えながら上を仰ぎながら笑った。

「はっはははははは!………死ね」

再度無数の顎の赤雷を出現させ、ユリスの四方八方を囲むように放った。

ユリスを食い破らんと接近するそれを、アスペラ・スピナーの刀身に焰を纏わせた巨大な刃で焼き払った。炸裂する閃光に爆発、吹き荒れる熱風に刹那は顔を歪める。

「……炎蔓の飾王花」
アレクサンドリット

燃ゆる炎を刃状へと凝縮させた全てを焼き切る灼熱の刃。

(私と対等に戦えるだと………!)

「調子に……!」

左右から出現した赤雷がユリスの身体に絡み付き離さない。

「つツ……!」

「乗るなツ!」

巨大な赤黒い雷の顎が、ユリスを飲み込みそのまま壁へと押し戻したが、紅蓮の剣閃が閃きそれを焼き切る。

「くっ………!」

「はあああああ!!」

「チイツ!」

上空からアスペラ・スピナーを構えながら接近するユリスに向かい再度放つ。

「雷槍・連門顎!」

今までの比較にならない数の無数の赤雷の顎と神速の突きを全て防ぎ、弾き、焼き払う。

「バカな……!!」

(やつの攻撃が全て見える……これなら……!)

「覚悟しろ!」^{イノセンス}「神器」ツ!

「貴様ああああ!!」

赤雷を纏った《真刀・神威》の刀身が更に伸び、ユリスに向け振り下ろした。

「はああああ!!」

焔と赤雷が交錯するドーム内に亀裂が走り始める。

『凄まじい衝突だああ!こ、これは一体……!!』

『不味いっスね……!ドームの耐久が……!!』

「まさか、彼女も選ばれたのか……?」^{イノセンス}「神器」に……ただ、友を救いたい。その願いのためだけに人間をやめるというのか……!!」

マディアスは驚いた表情でユリスを見ていた。

「ぐううう……!!」

「くっ、人間風情に……ッ!!」

しかしその拮抗も長くは続かなかった。

ビキツツツツ

「なにツツツツ!!」

《真刀・神威》の刀身に亀裂がはしった。

ユリスはその亀裂を見逃さなかった。

自身に残された最後の力を放出する。

『ユリス先輩!』

『リースフェルト、あとは任せた』

『大丈夫、ユリスなら出来るさ』

『ユリス、刹那を……』

「ツツツツ!!!!うああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ユリスの背中から四枚の炎の光翼が吹き出る。

「この力……まさか、貴様も……?!?」

完全に碎け散った《真刀・神威》の刀身は虚空に消えながら宙を舞い散る。

(まだ何も言っていない……まだ何も伝えてない……!!)こんな所で倒れるものか……!!お前がいつでも戻ってこれるように、帰る場所は私が守る!だから……ツ!!)

「戻って来い!刹那ああああ!!」

近づいてくるユリスを刹那は睨みつける。

「人間……!!」

そして、二つの影が交わると同時にドームを巻き込む強烈な閃光が全てを包み込んだ……

「な、なんの真似だ……人間……」

刹那は目の前の人物を見て、目を見開いていた。

身体からは僅かに蒸気が昇り、目はほぼ光を失っていた。そして、自身のすぐ側に突き立てられたアスペラ・スピナーだったもの。

「ふ……これで、きさまは、にげられ……」

「なに……」

周囲の魔法陣から鎖が伸び、刹那の身体を縛り付けていく。

「この鎖は私を封じるための……!!? 貴様……この鎖を知っているわごと……!!」

「あまり、なめるなよ……にん、げんを……」

「どこまで私の邪魔をする気だ……! 天霧遥ああ!!」

禁獄の鎖が消えると同時に、《真刀・神威》も発動体へと戻り、刹那はその場で倒れ込んだ。それを見たユリスも限界を迎えたのか、

「ばかもの……しんぱいばかりかけおって……」

その場で倒れ込んだ。しかしその手はしっかり刹那の手を握り、その表情は僅かに微笑んでいた。

『神木刹那、意識消失』

アンコンシヤスネス

『ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト、意識消失』

アンコンシヤスネス

二人の校章が同時に宣言した。

刹那――

ん？何だ、ユリス――

実は私、お前にだな……その、伝えたい事があるのだ
が……

なんだ？――

その、なんだ、えつと……

よし……！言うぞ！一度しか言わんからよく聞け！――

あ、ああ――

わ、私は……私は、お前に――

――恋をしている――

《リーゼルトニア》編
第28話 《大博士》

シリウスドームのステージが使用不可能になってしまったため、表彰式及び閉会式の会場は急遽プロキオンドームへと変更されたら。開会式と違って出席する生徒が限られているため、多少箱が小さくなくても問題ないのだという。

「――以上の事から見ても、今回の《鳳凰星武祭》がいかに素晴らし
いものだったかわかって頂けると思います。特にアルカント・アカ
デミーの二人に関する特例措置は、あくまで暫定的なものであるとは
いえ、今後のルール制定において重要な……」

壇上では運営委員長のマディアス・メサが、今大会の総評を述べて
いる。開会式の挨拶が主に学生たちに向けたものであったのに対し、
今のそれは観客と視聴者に向けてのものだ。そのためか、口調もやや
堅苦しい。

「さて、それでは第二十四回目の《鳳凰星武祭》優勝者と準優勝者をお
呼びしよう――と、言いたるところだけど、残念ながら優勝者
と準優勝者は治療院で要安静が必要との事なので代理の人に来ても
らっている」

「それで、刹那の方は？」

「依然、意識は戻っていないそうです」

「まだ目が覚めてないのは刹那だけ……そんな事より、エンフィー
ルド」

「はい？」

「体はいいのか？刹那にバツサリ斬られたと聞いた」

「ええ、もう歩くぶんには大丈夫ですよ」

治療院の通路でクロードディアと紗夜は修復作業が行われているシ
リウスドームを遠目に、話をしていた。

「————」イノセンス「神器」とはなんだ」

「————」

「あんな危険な代物をなぜ統合企業財体は情報を各学園に提供しない」

「————詳しいことは私にもわかりません。「神器」イノセンスとは強力な力を秘めた全八種類の純星煌式武装オーガルクスの総称です。明確な意志を持ち、適合者を自ら選ぶ代物だと。使用者には絶大な力を与える反面、負の感情を増幅させてしまう……………それが「神器」イノセンスです」

「じゃあ刹那は……………」

「ええ。おそらく心の底にある何か……………そこに付け込まれたのでしよう。肉体的にも精神的にも相当負荷がかかったようですので……………」

「た、大変です！」

綺凜が遠くから駆け足でクローディアと紗夜の元へ駆けつけた。

「どうした？綺凜」

「せ、刹那先輩が……………！」

「刹那がどうかしたんですか!？」

「刹那先輩が……………いなくなりました!」

「え……………?」

—————
遡ること一時間前。

病室のベッドで目を閉じていた刹那はそつと開けた。

（そろそろ、だな……………）

後は五分後に医師の巡回検診がある。

脱走するにはこの病室に医師が入った時が絶好のチャンス。

（夜吹からの情報が本当なら、確かめなければならぬ）

そしてドアをノックする音が鳴ると、医師が数名程中に入ってきた。

（足音からすると、二、三人、か。この人数なら今の俺でも対処は出来るか）

自身が眠るベッドに近づいてくる気配を感じ、手にそつと医師の手が触れた瞬間、その手を握り、そのまま自身の方に引き寄せた。

「なっ!？」

「悪いな、少し眠っててもらおうぞ」

そう言い、一人目の医師の渠にパンチを入れ、そのまま崩れ落ちた。

「神木さん！一体何を……!」

「早く他の者を……!」

出口に向かおうとしている二人目の医師に背後から接近し延髄に手刀を入れ、最後の一人にも渠にパンチを見舞い、その場に崩れ落ちた。

「よし……」

病室の窓を開ける。自分がいる所は三階だが、この高さならさほど体にも影響はないはずだ。

そのまま身を乗り出し、飛び降りた。

「神木、こつちこつち!」

茂みの中から、夜吹が顔を出し手招きをする。念の為、再度周囲を確認し夜吹と共に、茂みの中に姿を消した。

その後、昏倒している医師を綺凜が見つけたのはその三十分後だった。

「結構ヒヤヒヤするな」

「ああ……そうだな」

「つたく、お前も無茶するよな。体、まだ完全に治った訳じゃねえだろ?」

「無茶をしても、確かめたいんだ」

「姉ちゃんの事か?」

「……ああ」

人目を避けながら二人は、治療院の門を潜ろうとしていた所、その目の前に壁に背中を預ける二つの影を捉えた。

「おおっと、早速お出ましか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どこへ行くつもりだ」

「まだ安静にしてないとダメだよ、刹那」

ユリスと綾斗。

あと少しのところまで今一番会いたくない人物に刹那の顔は険しくなる。

「―――どうする」

「どうするもなにも、強行突破しかないだろう・・・・・・・・・・」

夜吹と耳打ちをし、目の前の二人と対峙する。

「悪いなお二人さん。ちよーつと、通してほしいんだけど」

「そういう訳にはいかんな。お前は要安静患者をどこへ連れ出そうと
している」

「実はお忍びデートでもどうかかなあと。ほら、治療院の中つままない
だろ?」

「男二人でデートって・・・・・・・・・・」

「とにかく!邪魔すんなら、ちよつと痛い目をみてもらうぜ」

「夜吹、あまり問題になる様なことは・・・・・・・・・・」

「大丈夫だって。お前さんは絶対連れてくからよ」

夜吹はポケットから何かの玉を取り出した。

「ま!そういう事なんで、ここでドロンさせてもらうでござる!」

そう言つて、思い切り地面に向けその玉を投げつけた。それと同時に濃煙な煙が周囲に立ち込める。俗に言う煙玉だ。

「なにっ!?!」

「け、煙玉!?!」

「うし、今のうちだ!」

「ああ・・・・・・・・・・!」

煙の中を二人は駆け抜け、そのまま用意してあったバイクに乗り治療院を後にした。

「けほっ・・・・・・・・・・けほっ・・・・・・・・・・!待て・・・・・・・・・・!」

「もう行っちゃったよ、ユリス」

「なにを考えている・・・・・・・・・・あの二人は・・・・・・・・・・」

「それを聞いても教えてくれる二人じゃなさそうだけどね」

「いやあ！案外上手くいくもんだな！」

「悪いな、夜吹。お前まで巻き込んでしまつて……」

「気にすんな。それより体、大丈夫か？」

「さすがにキツイな……」

「はは！いいリハビリにはなつただろ！お前さん、一週間も寝てたんだからな」

「そうか……」

アスタリスクの市街地を駆け抜ける。久しぶりの外の空気に、若干喉が痛い。そんな事を考えていると夜吹が口を開いた。

「お前の姉ちゃんは、今アルルカントにいる。俺のツテに調べてもらつたんだが、まず間違いない」

「なぜ、アルルカントなんか……」

「まあ、考えられるとしたら一つしかないさな」

「マグナム・オーパス『大博士』か……」

「ご明察！ヒルダ・ジェーン・ローランズ。アルルカント創設以来の天才と呼ばれちやいるが、相当頭のネジがぶつ飛んでるつて話だ。性格は狡猾かつ残忍、まともに話なんか出来ると思うなよ」

「わかつてる」

「さあて、そろそろ見えてきたぜ」

視界の端にアルルカント・アカデミーを捉え、刹那は顔を引き締めた。

途中で降ろしてもらい、アルルカント・アカデミーの正面玄関まで続く長い道を歩く。

「お待ちしておりましたよ、神木刹那」

突如目の前に現れた一人の女性。

女性は刹那より幾分か年上だろうか。肉付きは薄く、すらつとした体型で手足が長い。白衣を着ているため最初は研究員か何かだと思つたが、よくよく見ればその下に着ているのはアルルカントの制服

だ。

顔立ちは整っているものの、やや三白眼気味なせいか少し怪しげな雰囲気醸し出している。髪はまとまりのないセミロングで、大きな眼鏡が印象的だった。

「お前が、《大博士》マグナム・オーパスだな」

「おや？あたしをご存知で？きしししし、光栄ですね。あなたのような名人に名を知られているのは」

衣擦れのような乾いた笑い声を上げ、女性は猫のように目を細める。

「ここに、姉さんが……神木聖羅がいると聞いた」

「ああ、そうそう、そうでした。あなたがここに来る理由はそれしかありませんからね」

また例の笑い声をあげ、くるりと踵を返した。

「ついてきてください、案内します」

そう言い、先に中に消えた彼女の後を追うように刹那も続いた。

薄暗い通路をヒルダと刹那は一定の距離を保ちながら歩く。

その道がしばらく続き、そして開けた場所に辿り着いた。大型の機械が数個、それ以外は何も無かった。そして中央には蒼く輝く結晶のようなもの。その中に見覚えのある影があった。

「どうぞ、何年ぶりの再開かは分かりませんが。あなたがずっと探していた神木聖羅の今の姿です」

「姉、さん……」

巨大な結晶の中に裸で眠るように目を閉じている姉の姿がそこにはあった。

恐る恐る近づき、その結晶の表面に手を触れた瞬間、

「っ……」

まるで触れられるのを拒むように弾かれた。

「この結晶が何なのか、何故彼女はこの結晶の中にいるのか。聞きたいことは山ほどあると思いますが、先に言っておきます。実のところ

わからない、と言っておきましょう」

「姉さんは生きているのか……?」

「どうぞでしょう。これはあたしの私見ですが、神木聖羅を覆っているこの結晶は、彼女と何か深い関係があると推測しています。おそらくですが、この結晶を何とかしない限り彼女は永遠に目覚めないでしょう」

「……」

「これもあたしの私見ですが……」

ヒルダの眼鏡が怪しく光、歯を見せながら口角を吊り上げる。

「神器」と神木聖羅。深い関係があるのでは、と私は推測しています」

「なに……?」

刹那の表情が険しくなる。薄暗い広間にヒルダの声が反響する。

「《鳳凰星武祭》の試合、勝手ながら観させてもらいました。まさかあなたが「神器」の一つ、《真刀・神威》の適合者だったとは。きしししし」

「貴様……」

「そんな怖い顔しないでください、せつかく整っている顔が台無しですよっ」

「茶化すな……!お前は何をどこまで知っている……!」

「それは教えられません。あ、そおだ!取り引きしましょう、神木刹那」

「取り引きだと……?」

「あなたのお姉さんを奪い去った張本人の名前、そして「神器」についてお教えする代わりに、神木刹那。あなたには《獅鷲星武祭》で優勝してもらいます。あなたなら造作もないでしょう? 《蝕武祭》と《鳳凰星武祭》で優勝したあなたなら。きしししししし」

「つまり、俺を代理として叶えたい願いを叶えたいというわけか」

「うーん。有り体に言ってしまうえばそうなりましようか」

刹那の言い方に不満があるのか、やや納得できていないような顔で

ヒルダが答える。

「具体的になにを」

「あたしのペナルティを解除していただきたいのです」

「自分がかつて何をしてペナルティを課せられたか、わかって言っているのか……?」

「ええ!もちろんです!」

「《狐毒の魔女》^{エレンシユキィガル}に、非人道的な実験をしてたらしいな」

「おやおや、それもご存知でしたか。一応あの実験のことはまだ発表されていないのですがね」

「発表する気など更々ないだろ、この外道が……!」

「そうですね。あれはあたしにとって特別な被検体でした。ああ、もしも今もあれがあたしの手元にあつたなら、どれほど貴重なデータが取れたことか。まったくもって、残念でなりません」

ヒルダは一転して悲しそうに首を振ると、すぐに今度は仏頂面で口を尖らせる。

「それもこれも、みーんなレヴオルフの陰険狸のせいです。人が苦勞して成し遂げた研究成果を横から搔つ攫っていくなんて、まったくなんて酷いやつなんでしよう。許せません」

「お前の物言いは、《狐毒の魔女》^{エレンシユキィガル}を一人の人間としてでは無く、あくまで研究対象としか捉えてないということか。お前には凡そ人間らしい感情が欠落しているな。そんなお前がああ《悪辣の王》^{タイラント}を悪く言うのは身勝手にも程がある」

「おや、失敬失敬。でもまあ、過ぎたことを嘆いていても仕方ありません。科学者たるもの、常に未来へと目を向けねばならないのです」

「何が科学者だ。貴様には狂った科学者がしつくりくる」^{マッドサイエンティスト}

「言ってくれますねえ。褒め言葉と受け取っておきます。きしししししし」

耳障りな笑い声を上げるヒルダに刹那は眉を顰める。

「話がそれてしまいました。さて、ここからが本題です。神木聖羅、あなたのお姉さんを攫ったのは《処刑刀》です。もちろん、ここに運んできたのも彼です」

「《処刑刀》……そいつが仮面の男か……!」

「ええ、そうです。「神器」イノセンスについて。「神器」イノセンスに適合したものは、人間やめません。はい」

「人間をやめる……?」

「《星脈世代》ジエネステラすら越える存在になるからです。あなたが一番ご存知なのでは?あの人を越えた「神」にも等しい力を。あたしはその適合者を《星脈世代》ジエネステラを超えた存在として、《神星世代》ネビュラスレイドと呼んでいます」

「ああ、そうそう。お近づきの印にこれあげます」

そう言っただけでヒルダが取り出したのは真紅の色のウルムIIマナダイトが輝く発動体だった。

「これは……!」

「神器」イノセンスです」

「なに……!?!」

「あたしが持つても宝の持ち腐れのようなもので、あなたにあげます。八つある「神器」イノセンスの一つ、個体名《アクセラレータ・ノヴァ》。あたしがわかっているのはそこまでです」

「こんなもの、俺は……!」

「既に適合者は見つかったようですがね。あなたの傍にいたりして。きしししししししし」

その場にはヒルダの笑い声だけが響き渡った。

第29話 戻ってきた風景とお誘い

「帰ったら何言われんのかねえ」

「さあ……甘んじて受けるしかないだろう」

「謹慎程度ならありがてえな。どーせ冬季休業中やる事ねえし」

「……」

刹那はホルダーに入れていた発動体を見つめながら先程のヒルダとの会話を思い出していた。

『身近にいるだと……？それはどういう事だ……』

『《華焰の魔女》』

『……？』

『おそらく彼女でしょう。《鳳凰星武祭》決勝戦で見せたあの力、

『神器』に見初められるには十分そうですし』

『ユリスが、だと……』

『まあ、後のことはお任せします。あなたがそれを《華焰の魔女》に渡すか渡さないかは』

『神器』は危険すぎる。

こんなもの、彼女に渡すことなど……

「刹那？大丈夫か？すっげえ難しい顔してるぜ」

「あ、ああ。なんでもない」

夕陽に照らされる星導館を捉え、発動体をそつとホルダーに押し戻した。

「お二人は、自分が何をしたのか分かっていますか？」

「お忍びデート？」

「……」

星導館に戻るなり、やはりと言うべきか二人は待ち構えていたクローディアに捕まりこうして生徒会室で説教中だ。

「はあ……今回は大目に見ますが、以後同じ事をしたら今

回のようにあなたたちを庇いきれませんが、悪しからず」

「へーい」

「………わかった」

すぐに夜吹は用事があるのだと言い、そそくさと生徒会室を出ていき、今度はいれ替わるようにいつもの面々が入ってきた。

「邪魔するぞ、クローディア」

「ええ、どうぞ」

「せ、刹那、先輩………」

「………」

綺凜の呼びかけに刹那は応えるどころか、目線すら合わせようとしなかった。

あんな事になった後に、どの面下げて彼女たちと接すればいいのだろうか。

「刹那………」

すると無言でユリスが立ちあがり、刹那の元へと歩き出す。何やら凄い怒気のようなものを感じた綾斗はすぐに止めに入ろうと、足を出しかけたが、

「こっちを見ろ」

「むぐー!?」

思い切り頬を挟み、ユリスは自分の方へと刹那を振り向かせた。

「いいか、刹那。下らん負い目を感じているなら捨ててしまえ。そんなもの重荷になるだけだ」

「ひ、ひかひ………」

「私たちは誰もお前を憎んだりはしていない。相当苦勞はしたがな」
刹那は見渡した。ここにいる全員は、まだあちこちに包帯を巻いてながらも、ほぼ完治に近い状態にあることもわかった。

「全く………綾斗とクローディアの傷口は幸い浅かったらしく痕は残っていない」

そつと頬を挟んでいた両手を離し、ユリスも僅かに微笑んだ。

「それでも俺は………お前たちを殺そうとした………」
殺そうとしたんだ、俺の手で………」

「ああ」

「そんな俺を、許すのか……」

「ああ」

「お前には、あの時の夜に酷いことを言った……確かにあの言葉は俺が気づかない内に心の奥底にしまい込んでいたものだ……俺は、お前たちが……帰る場所があつて、待つてくれている家族がいるお前たちが羨ましくて、眩しかったんだ……」

「先輩……」

「っ……」

今にも消えそうな儂い笑みを見せた刹那に紗夜は我慢出来ず、抱きついた。まだ全身に鈍い痛みがあるため受け身が取れずその場に倒れた。

「いっ……沙々宮？」

「私がずっと刹那のそばにいる。だから……」

「え……？」

あまりに突然の事に刹那は驚いた。

何故ならあの紗夜が涙を流していたのだ。

「なぜ、泣くんだ、沙々宮」

「刹那が、悲しそうに笑うから」

制服の裾で目元をぐしぐし拭い、紗夜の頭をそつと撫でた。

「ごめん……それと、ありがとう」

「ん、許す」

目元を赤くした紗夜が笑い、刹那も微笑んだ。

「刀藤も心配かけてごめん」

「うう……！」

綺凜も泣きながら刹那に飛びついた。

二人にくつつかれると体がかなり痛いのが、何とか受け止めることが出来た。

「よがっただでずう……！」

「と、刀藤……あまり頭をグリグリされると……」

「ふええええええ！」

「ああ・・・制服が・・・」

身長の関係もあるのか、二人の幼い子供をあやす父親にも見えなくもない。

そんな光景を見ていたユリスは若干不機嫌そうな顔をしていた。

「あら、ユリス。あなたは行かないんですか？」

「ば、バカを言うな！」

「ではユリスが行かないと言うなら・・・」

そう言い背後からそーっと近づき、一気に抱きしめた。

「おお・・・!!」

「ああ・・・!!」

「刹那、私も構ってください」

後ろから抱きしめられ、クロードディアの豊満な胸が丁度頭の後ろからグイグイ当てられる。

「な、何をしている・・・」

「何って抱きしめているんです。あ！そうだ！優勝記念に今夜私の部屋に来ませんか？」

「・・・?なぜ・・・」

「それを私に言わせるのですか?もう、刹那ったら」

「んんっ!」

今まで軽く抱きつかれていたのが、更に抱きしめる力が増し刹那の体への負担が大きくなった。

「あはは・・・クロードディアも、お手柔らかにね」

「な、な、何をしている!クロードディア!」

「ユリスは邪魔しないでください。私はこれから刹那とあんな事やこんな事を・・・」

「むっ。エンフィールド、今すぐ刹那から離れろ」

「いいえ、その申し出は受けられません」

「お、おい・・・!会長、そろそろいいかげんに・・・」

「いいだろう、なら力づくで離れてもらう」

「あら、穏やかではありませんねえ」

何故かバチバチ火花を散らし合う二人を綺凜は一人でアワアワしながら交互に眺め、綾斗は溜息をつきながらも微笑んでいた。

当のユリスは丁度刹那と目が合い、優しく微笑んだ。

次の日、刹那は目の前のディスプレイの前で非常に難しい顔をしていた。

「それで、何故俺の連絡先を知っている………シングルドリーヴァ《戦律の魔女》」

「えーっと、夜吹くん？だっけ。その子にねもらったの」

「一応聞いていいか？」

「うん、なに？」

「なんて言ってもらった」

「私の水着写真と、パジャマの写真と、あとなんだっけかなく………」

「どうりで朝から機嫌が良かったわけだ………」

遡ること一時間前——

『ふう………』

『朝起きるのも一苦労ったあ、大変だな』

無事治療院から退院した刹那は自身の部屋に帰ってくることに出来た。

帰って早々、退院祝いと夜吹が新聞部の部員を連れて夜中までバカ騒ぎをし、疲れて眠ってしまいついさつき起きたばかりだ。

『一応異常はないんだろ？』

『まあ。しばらく痛みは続くみたいだけどな』

『ま、しゃーないな。おっ！俺、ちよつと出かけて来るわ！』

『ああ』

そう言って何故かスキップしながら部屋を出ていた夜吹を、刹那は首をかしげながら見送ったと同時に通話のアラームがなり、先程に続く。

「それで、何か用か？」

『体の方は大丈夫？』

「まあ、何とか」

『むう、なんか素っ気ないなあ』

少女はぶくーつと頬を膨らませた。

「そっちこそ、芸能活動は大丈夫なのか？世界の歌姫なんだろう？」

『え!?刹那くん、私の事知ってるの!?!』

「いや、うん。まあ……」

(昨日の夜、夜吹から延々と語られるまで知らなかったなんて言えないな……)

『なんか嬉しいなあ。あ、そうそう！その用事って程でもないんだけど……』

「ん？」

『私と今から商業エリアまでデートでもどうかなーって』

「ああ、いいぞ」

あまりにも即答だったため、一瞬少女は固まった。もちろん、刹那はデートの意味を分かっている。

『えっ!?!いいの!?!』

「あ、ああ」

すると今度は目の前の少女は今度は満面の笑みを浮かべた。何とも女の子とはコロコロ顔が変わるものだ。

『そ、それじゃ！私が星導館まで行くから待ってて！すぐ行くから！』

「あ、ああ。気をつけてな……」

そう言い終わるとディスプレイが消え、部屋の中にまた静寂が訪れた。

それにしてもー

「デートってなんだ……?」

当の本人はこんな感じである。

刹那、歌姫とデートするってよ